THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第廿二年 第一號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約欵に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし

●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり

●利益配當附保險の契約を爲す者は最も公平の方法に依り計算したる利益金を得べし

●掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限內ニ死亡セバ)の新法あり

●當會社は本願寺保護の下に全國に渉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり

●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし

●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角 (電話 七貳貳番) **京都本店**

東京市京橋區南傳馬町三丁目壹 (電話本局五壹八番) **東京支店**

大阪市東區大川町御靈筋角 (電話東壹貳五參番) **大阪出張所**

廣島市紙屋町(秦 忠兵衛方) (電話 六〇八番) **廣島出張所**

近刊豫告

明治闇黒史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歷史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、强者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗闘せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黒史

紙數約四百頁

上卷には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として當時全國に彌蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲撃を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として丸山作樂の朝鮮計劃あり

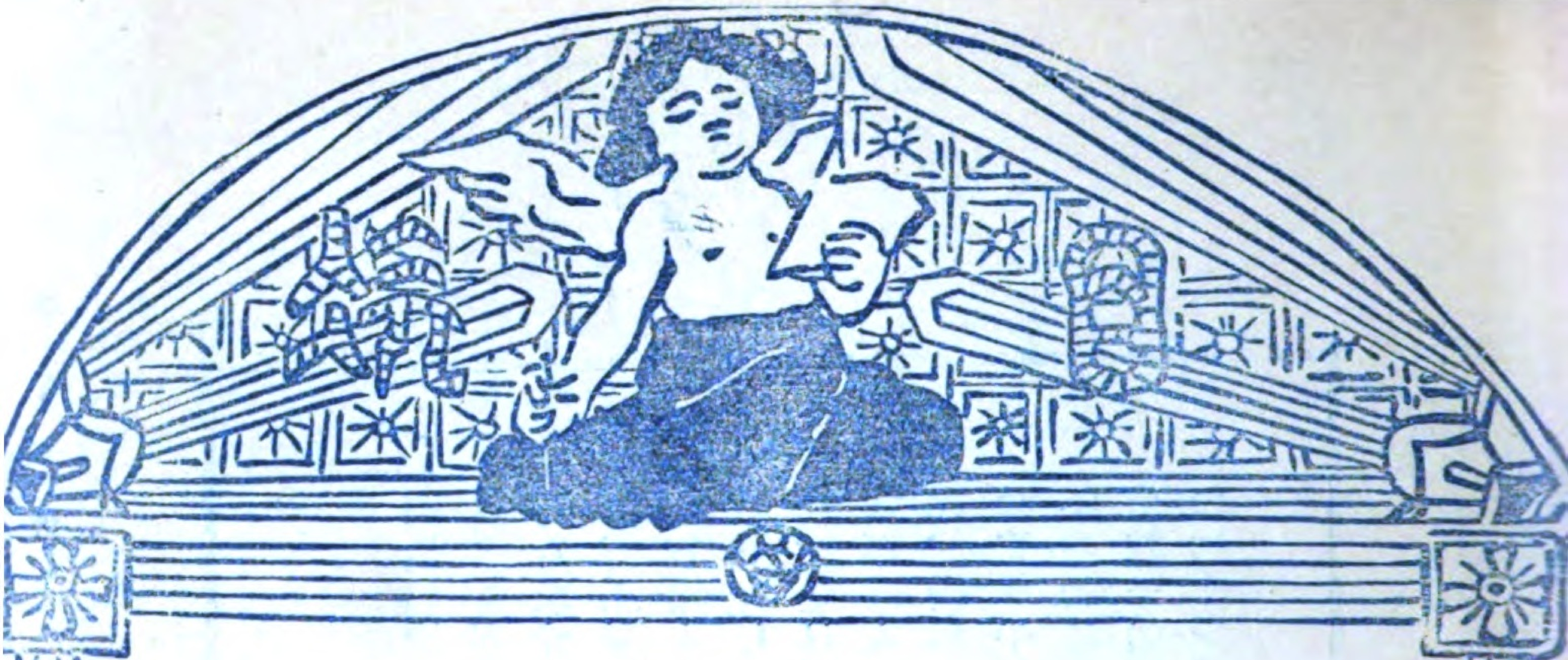
中卷には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の黨爰に全敗す。然かも之を前にしては、芝增上寺の燒拂あり、岩倉具視の要擊あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下卷には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黑に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いで起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

潜める事象の發見は愈よ出でゝ愈よ新に著者をして筆を擱くに暇あらざらしめぬ、拙速は功遲に劣る、一面期に後れたる謗あるところ、其處ぞ完璧の誇の伏する所なるを信ず。

發行所　東京本郷區西片町　反省社

中央公論第二十二年第一號目次



明治四十年を迎ふ

明治の聖代も茲に四十回の春を迎ふ。明治天皇が不世出の英君に在はすが如く、日本も亦實に有爲にして、此の四十年間に未曾有の進歩を示したり。乃ち未曾有の進歩なりと雖も、之を歐米諸國に比すれば、學問、文藝、美術は勿論、工業商業共に甚だ幼稚を免かれず。幸ひに三千年の歴史を有して國民の聰明靈智殆んど歐米人に優さるが故に、啓發誘導其の道を以てせば、一切の文化更に駸々として竟に歐米を凌駕するに至らんと期して俟つべし、否然らざる可らざる也、是れ明治天皇の宏謨にして、また實に日本國民の天職也。

我が同人の中央公論を刊行する、また此の方針に準由すること勿論也。而して其の志、操觚者としては誠實に其の職務に勤勉し、國家社會のため、世道人心のため、公正和平の見を秉て以て其の本分を盡すに在り、是れ曾て渝ることなき所、唯だ新年の初めに於て亦重ねて之を讀者の眼前に申べて天下に矢ふのみ。

南枝一輪の梅花、窮陰を破つて陽春に魁けす、日本の前途は之に似て洋々春の海の如く多望也、多幸也。

此廣告によりて御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

文學博士　南條文雄先生序
文學博士　村上專精先生序
文學博士　前田慧雲先生序
文學博士　高楠順次郎先生序

望月信亨先生
文學士〔ドクトル、オブ、フィロソフィー〕萩原雲來先生
文學士　鈴木暢幸先生
加藤玄智先生
共編

佛教大辭典

全一册
正價金十五圓

洋裝堅牢極美
大判四六倍判紙數千五百頁
精巧鮮明の挿繪
木版寫眞版三色版ゼラチン版六百餘種彩色密畫數十葉
附佛教大年表

佛教は世界の最大宗教にして、東亞文明の中心淵源也。古往二千五百餘年以來幾多の邦國は之に由りて文治の華を開き、無數の人類は之に由りて向上の路に入ることを得たり。特に我が日本民族の精神的文明は、殆ど全く佛教の賜物なりと謂ふも、敢て過言にあらず。試に我が國の文學美術人情風俗等に就いて、佛教の感化より產出せられたるものを除かば、其の餘すところ能く果して幾許かあらん。最近、國運の異常なる發展と共に、佛教に關する各般の注意の一齊に加はり來りつゝあるは、當然の現象と言はざるを得ず。弊堂深く玆に見る所あり。曩に望月、萩原、鈴木、加藤の四先生に懇囑し、爾來之が辭典の編纂に全力を傾注すること實に幾閱年、今や粗々其の完成を告げんとするに至れり。加ふるに南條、村上、前田、高楠の四博士並に鷲尾順敬、山田孝道、釋慶淳 河野法雲、常盤大定、塚原周峯、上杉文秀等の諸大家は各專門の研究に就いて執筆若くは懇篤なる援助を與へられ特に建築美術の事項に關しては工學博士伊東忠太、大村西崖等諸先生の指敎を受くること少なからず斯の如くして、此空前の大辭典に無限の大生命を與へられたるは、學界の爲め欣喜措く能はざるところ也。世人若し一たび本書を手にせんか、幾千の經卷數萬の註書を座右に備ふるに等しく、苟くも佛教に關する諸般の事項は細大並に普通解することを得て、讀むものをして容易に眞理の探究に入らしむるものあらん。尙本書に附したる佛教大年表は汎く内外の史籍に涉り、又古記遺文を搜りて得たるもの、支那、日本、朝鮮は言ふに及ばず、非歷史國を以て有名なる印度の史實を一目燎然たらしめたるは、深く學者の注目に値する所ならん。

豫約法

申込期限　明治四十年二月十日限

甲種　金六圓（四十年二月十日迄に全額一時拂込）

乙種　金七圓（四十年二月十日迄に一圓二月より七月迄每月一圓宛拂込）

丙種　金八圓（四十年二月十日迄に一圓殘額は同七月迄に拂込）

製本出來期　明治四十年七月中

見本進呈（但貳錢郵劵封入のこと）**發行及豫約申込所**　東京京橋區五郎兵衛町　**金尾文淵堂**　振替貯金三八一七

山路愛山主筆

獨立評論

四十年第壹號

一月一日發行

目次

毎月一回三日發行　定價壹部金拾錢

壹ケ年十二冊郵税共金壹圓◉但し外國は郵税共金壹圓四拾八錢

發行所　東京中澁谷九〇二　獨立評論社

文學士 大谷繞石譯述（卷頭 惠馬遜肖像 仝住宅及墳墓 精巧寫眞版二葉）

新刊

惠馬遜傑作集

全 四六判美裝
壹册 定價五拾錢
郵稅金八錢

英國の文豪カアライルと共に十九世紀思想界の双兒と稱せらるゝコンコオドの哲人エマーソンの著作は晦澁難解の聞え高し然れどもその一言一句仔細に之を玩味ずれば何れも深奥なる意義を有し玄妙なる哲理を語るに非るは無し本書は哲人の所作中最も代表的なる傑作自然論、學者論、自待論、及報償論の四編を撰びて最も謹嚴なる逐字譯を試みたるものにして原文の奇警なる筆致を保持して而かも毫も晦澁に陥らず哲人の金言名句を味はんとするもの英文學の研鑽に資せんとするもの乞ふ一本を購ふて机上の珍となせよ

泰西名著[illegible]譯叛書

原著者 譯述者	書名	册數	定價 郵稅
アーヴィング 淺野馮虛	スケッチブック	貳	金壹圓 金拾四錢
デッケンス 淺野馮虛	クリスマスカロル	壹	金四拾錢 金六錢
ゴールドスミス 淺野馮虛	ウイカーオヴウエークヒルド	壹	金五拾五錢 金拾錢
ホウソーン 松本信夫	ツワイストールドテールス	壹	金六拾錢 金拾錢
エマーソン 大谷正信	偉人論	壹	金五拾五錢 金拾錢
エマーソン 大谷正信	惠馬遜傑作集	壹	金五拾錢 金八錢
ヂヲンソン 芝野六助	羅世刺斯傳	壹	金四拾錢 金六錢
アストン 芝野六助	日本文學史	壹	近刊

發行所 東京市京橋區銀座壹丁目 大阪市東區北久太郎町四丁目 大日本圖書株式會社



第二十二年
第一號
二百十四號

注目すべき政界の一權畧

新聞紙の報ずる所によれば、伊藤侯は韓國の事略々定まれるを以て統監の現職を辭するの意あり、而して其の後任は十中八九桂伯なるべしといへり。

記せよ、此の報導は自由通信社の發せる所にして、而して自由通信社は政友會の機關にして兼て西園寺內閣のためにするものなることを。

伊藤侯の辭意ありといふの果して事實なりや否や、韓國統監たる侯の地位の斯く動搖せらるべく傳說せらるゝの果して利益なりや否やは姑らく言はず、斯る傳說は、此の際政界に於て必然有り得べき權略なることを知らざる可らず。

〔第一〕單に伊藤侯のためにする策士は、此の際侯をして韓國を去らしむるを最も有利にして且つ有

智なりとすべし。

韓國に統監府建てられ、理事廳設けられ、其の外交關係は苦情多かりし當國總領事問題に於て明白に解決せられ、所謂統監の聲明なるものも略々中外に認識せらるゝに至りたり、若し之を以て我が對韓經營の大體鹽梅略々成れりと言はば則ち言ひ得ざるに非ず、然るに對韓經營の苦境は今日に在り、韓國王父子の意圖をして全然我に歸嚮せしめ、其の君臣を擧げて心より陰謀を斷念せしむべきや否や、韓國官吏をして其の分を守り職を盡すの循吏たらしむると期し得べきや否や、韓國民の生命財產の安固を保障すべき法律を定め、且つ之を實行して効果を擧げ得べき見込ありや否や、韓國の道路港灣を修築して交通運輸を便とせば、其の產業果して駸々として進步し發達すべきや否や、教育制度を定めて韓國民を啓發せば、彼等果して常識あり進步し發達すべき良國民となり得るや否や、居留日本人取締規則なるものは、果して善く行はれて日韓人を親睦せしめ得るや否や、凡そ此の諸點に於て確然たる見解を定め得るは何人ぞ。

吾人をして忌憚なく直言せしめば、伊藤侯自身と雖も此の問題に就て明白なる答辯を示し能はざるべし、是れ伊藤侯の罪に非ず、否伊藤侯の聰明足らざるが故に非ず、器幹足らざるがために非ず、韓國積年の形勢素より然るのみ。

幸ひにして世上の俗衆多くは韓國の事略々定まれりと思惟す、若し韓國の事を識るらしきものにして亦聲を大にして然かく稱せば、俗衆は益々以て然りとせん、而して所謂國の事略々定まれるの功績を收

めて、之を伊藤侯に歸すると、世上俗衆の多く異存なき所なるべし、故に伊藤侯をして危境に入らしめず、其の老後の功名を失敗せしめざらんと欲せば、此の際全く手を韓國より引かしむるは侯の利にして而して最も智惠ある所爲ならん。

侯は内閣制度の創始に於て第一の總理大臣たりき、憲法制定の總裁として、議院制の實施せらるゝや第一の貴族院議長たりき、樞密院の始めて設置せらるゝや、亦其の第一の議長たりき、韓國統監府の設けらるゝに及んで、また初度の統監たるに於て、侯や總て範を後昆に垂るゝとせん、是れ侯最大得意の擅場にして、侯のためにする策士より視れば、此の際統監を辭するを以て最も其の機會を得たるものと做すべし。

或るものをして曰はしめば、國士如何ぞ難局を避く可んや、韓國の前途茫漠として測る可らず、今日以後洵に苦境ならば、身を以て之に當りて、施設開閉其の宜しきに適ひ、竟に茫漠を變じて明確とし、苦境を轉じて順境とするこそ、眞に其の識慮材幹を發揮する所以にして、又至誠至忠の人たる所以なりとすべし。然るも是れ滔々たる策士の斥けて以て戇愚と做す處、策士の尙ぶ所は唯だ巧智のみ、然り、巧みに身を處して功名を全くするを智と爲すのみ。

故に伊藤侯韓國統監を辭すべしとするは、一部策士の當然案出すべき一權略也。

【第二】伊藤侯を辭せしめて桂伯を往かしむるは、西園寺内閣の利益にして、而して又政友會の利益也。

伊藤侯が西園寺内閣の後見者にして又保護者たるとは、既に公知の事實たり、山縣侯また素より後見役の一人たるも、素より伊藤侯と同視す可らず、伊藤侯は西園寺侯の推選者にして、西侯をして成功せしむるは、是れ推輓者たる伊侯の一責任にして、又其の待望する所、且つ滿足する所なれば也、西侯の成功は、取も直さず伊侯の組織したる政友會の信用を增す所以なれば也、伊侯の志を成す所以なれば也

伊藤侯あるがため、山縣侯の後見役が假令全然解除されざるも、亦極めて稀薄なる關係となるべきや必然のみ、隨つて山縣侯の西園寺内閣に對する行動甚だ自由となり、時に反對の態度に出づるも亦屢々なるべし、然れども伊藤侯と山縣侯とは外和して内熟さず、隨つて其の間嚴格なる遠慮あり、甚だ相悦はずと雖も亦公然激しく相敵對し得ざる事情なきに非ず、況んや井上伯の兩侯間を繫がんとするあり、松方伯また井上伯と同一態度を執らざるを得ざる義理あるをや、伊藤侯の眼前にあるは、少くも西園寺内閣に取て一の强味也、侯の智慮と助言とを事毎に借り得るとも、亦西園寺内閣の一利益也。

桂伯若し統監として伊藤侯の後任たらんか、幸ひに其の謀慮と器幹とに由て、韓國の効果大に擧らば天下（少くも伊藤侯のためにする策士）皆曰はん、是れ伊藤侯の蒔きたる種子を收穫したるのみ、侯の規矩準繩に由て然るを得たるのみと、若し不幸にして失敗せんか、亦齊しく曰はん、伊藤侯成功の後を承けて此の事あり、伯や竟に侯に及ばざると遠しと、斯の如きは是れ伊藤黨政友會の利益なり、少くも不利益には非ず。

且つ桂伯の外にあらざるがために、西園寺内閣の壽命を永くし得べき事情なきに非ず、山縣系の内閣

を主宰すべきもの今や桂伯を措きて他にあらず、故に桂伯在らずんば、山縣系は內閣を組織するに於て躊躇せざらんと欲するも得べからず、乃ち桂伯の機を得て歸來するまでは、陰忍しても暫らく西園寺內閣を存續せしむるの外はあらず、是れ豈西園寺內閣の一利益にあらずや。

西園寺內閣の安危明治四十一年度の豫算編成に在りとは、萬口の齊しく唱ふる處、假令俗見と雖も亦多少の價なきに非ず、況んや四十一年の總選擧を控へて、進步派及び大同派の如き寧ろ議會解散を促がすの意向なきに非ざるをや、四十年の冬期議會の險惡なるべきこと豫想に難からずとす。

然るに政友會の多數者は西園寺內閣の一日も永く存續して、自黨に利便することを期圖すべし、殊に總選擧が西園寺內閣下に於て行はれんことを希望するや無論なるべし、伊藤侯內に居て桂伯の外に在ること、果して西園寺內閣に利益ならば、政友會の策士中、侯を辭せしめて伯を往かしむるの權略を弄すること如何ぞ必無なりとす可けんや、新聞紙の報導の自由通信社より發せられたること決して偶然ならず。

〔第三〕進步派の政客も亦侯辭して伯往くを便なりとすべし、進步派は之に由て西園寺系と山縣系とを離間すべき機會を捉へ得ることを豫期す可ければ也。

進步派は多年沈淪の苦境を脫して前途の發展を期するがため、煩悶苦惱の極、竟に彼の改革論を絞り出したる程なれば、此の際何等かの機會に接到せんことは、素より其の熱望する所ならざる可らず。

彼等の中聰明なるものは、從來の苦き經驗に由りて、民間黨聯合の甚だ難からずして、衆議院に大多數を制するの頗ぶる容易なるも、貴族院を左右するに非ざれば竟に一事の成すに足らざることを悟れるな

るべし、乃ち政權を得る唯一の方法は、貴族院の味方を得るため山縣系と提携するに在ることを發見せしなるべし、故に今日の第一策は、山縣系と西園寺系とを離間するに在るとも、亦彼等の夙に知り且企つる所なるべし。

伊藤侯を辭せしめて桂伯を往かしむるの策は、政友會策士に取て餘りに怜悧なる丈け、乘じて以て離間すべき途なきにしも非ず、第一以て桂伯の感情を破るに足り、延きて山縣系を怒らしむるに足り、或は伊藤侯の在つて盛んに西園寺内閣に助言し助勢するに乘じ、貴族院の排伊侯、非政友會、非原等の諸感情を煽揚せば、形勢の䮚るゝ或は意外に出で、竟に兩者間に破綻を生じ、竟に西園寺内閣を倒すに至るも亦知る可らざればなり。

故に政友會の策士にして、伊藤侯あるがため安全に西園寺内閣を掩護し、桂伯往くがために益々山縣系との交情を密にすることを得るに非ずんば、其の權略或は失敗すべき虞なきにあらず、今の時誰か此の權略の成功を必して之に保險するものあらんや。

夫れ議長交際費問題に由て、動もすれば貴衆兩院間の乖離を來すが如きは、是れ政友會が山縣系を悅ばしむる所以に非ず、少くも西園寺内閣の利益にあらず、況んや伊藤侯を辭せしめて桂伯を往かしむるが如き權略を弄するをや。

然れども韓國統監の最高僚屬たる鶴原氏が進步派の某領袖に贈りし書面によれば、伊藤侯老來頗ぶる韓國の事務に倦み、頻りに之を辭するの意ありといへり、果して事實ならば、侯の辭すると侯の本心に

出てて、而して策士の豫期に中るべし、唯だ其の成功の果して豫期に中るや否や、吾人疑ひなき能はざるのみ。（十二月十日稿）

社會の階級戰爭

（一）

近時の傾向中、著るしく看取し得べきものは社會各種の階級間に於ける戰爭なり、而かも其の間往々にして世界大勢の變移を徵知すべきものなきにしも非ず。

階級戰爭の中の最も著るしき一は富豪征伐なり、其の二は社會主義者（勞働者を含む）征伐なり、富豪を征伐するものは言ふまでもなく勞働者と中流人士とにして、而して社會主義者（勞働者）を征伐するものは、中流人士と富豪となり、富豪階級と勞働階級は主として相對戰し、而して中流階級は一面富豪階級と戰ひ、一面勞働階級と戰ふ、吾人の最も注目すべしとするは、從來曾て階級戰爭に與からざりし中流階級が今や起て富豪勞働の兩階級と戰ふに至れる一事なりとす、而かも其の戰ひの正義を標榜するに於て、最も之を重要視せざる能はず。

（二）

富豪階級と勞働階級との戰爭は、玆に絮說するの要なかるべし、前者は獨占を武器として勞働階級を

壓し、後者は同盟罷工を武器として敵手を征服せんとす。

此の戰爭中に於て、恰かも新生面を開きたるが如き觀あるは、米國大統領の富豪征伐とす、ルーズヴエルト氏は、正義を尙び、邪非を憎むの思想を以て、敢行果斷、正を踏んで恐れざる資質を以て、富豪階級の大勢力と稱すべきトラストに大攻撃を加へ、米國多數の富豪をして悚然戰慄せしめたり。

米國の各州中、トラストを是認するもの素よりあり、而してトラストが多くの株式會社合資會社を合同せしめながら、一二の材幹あるものに其の樞機を掌握せしめ、製作販賣より諸種の駈引に至るまで、總て材幹ある此の一二人者に托して如何なる秘密行爲をも自由ならしめ、株主又は合資者には幾んど全く帳簿點檢、事業監査の權を與へず、又決算報告をも受くると莫らしめたるは、會社法の精神に反し、又多數の株主合資者に危險を及ぼし、經濟界の平和を紊るの虞あるものとして、全然之を禁止する州もあり、ルーズヴエルト氏は先づ此の州法律に準據し、其の各州に於てトラストを告發し檢擧したるなり。

米國は由來富豪の權勢甚だ熾んなる國なるも、流石に平等主義を以て、普通選擧制を採る丈け、多數者を保護するの法自から備はれるあり、現に富豪が其の勢力を恃みて鐵道の如き交通機關を獨占し、自家の貨物のみを廉價に輸送し、又は自家の貨物のみを最先に發送して、小工業者小商人の貨物を輸送するに高價の運賃を要し、若くは其の發送を後にして、以て自家の商利を獨占せんとする弊害を防止するため、法律を以て鐵道運賃の最低限と輸送の前後とを規定し、之に違反するものを罰する州少からず、殊に近時の議會に於て此の法律を合衆國の國法とするとを是認し、各州統一の法律に由るとゝなれるを

以て、ルーズヴエルト氏は又此の法律を楯に、スタンダアド石油會社を告發し、米國隨一の富豪ロックフエラー氏を檢擧するに至りし也、蓋しスタンダアド石油會社が其の勢力の大なるを恃みて、密かに法定以下の低廉なる鐵道運賃を以て、盛んに鐵道を獨占し、而してロックフエラー氏が石油大王にして鐵道王を兼ね、自家の石油を自家の鐵道にて運搬し、法外の利益を獨占せるとは、米國に於て公知の事實なるも、歷代の大統領及び法官等、富豪の勢力を憚かりてか、恰かも知らざるが如くせしに、ルーズヴエルト氏のみ乃ち敢然として、法律の正條に照して之を告訴し檢擧したるのみ。

ルーズヴエルト氏の果斷なる處置が、米國多數の富豪を懊惱せしめ、恐怖せしめ、憤怨せしめたると共に、直接に勞働者、小工業者、小賣商人等をして一大痛快を感ぜしめたるや論なかるべし、而して間接に影響する所は、勢力を濫使し、國法及び正義を無視し、單に黃金のみを萬能とする富豪、人格の卑俗なる富人の甚だ重んず可からざること、及び正義又は國家の偉大なる權威あることを自覺せしむるにあり、蓋しルーズヴエルト氏の心事は、勞働者、小工業者、小賣商人等を救濟するとまた其の一原因たるや論なきも、素より彼等多數者に媚るが如き卑しき動機に出でたるものには非ずして、主として正義及び國家の偉大なる權威を示現するに在るべし、是れ世界人道のため最も悅ぶべき現象也。

且つルーズヴエルト氏の心は、中流階級の心とする所也、米國の中流階級は實に斯の如き心を以て富豪階級の征伐に同意し、ルーズヴエルト氏の處爲を謳歌しつゝあり、換言すれば、ルーズヴエルト氏の富豪を征伐する心事と手段とは、殆んど全く中流階級を代表したるものゝ如き也。

（三）

更らに米國に於て注目すべき一事は、紐育州知事の候補を爭ひたるハースト氏が失敗したる理由也。ハースト氏は父なる銀鑛王の大遺產を受け、少壯氣鋭に乘じて紐育、市俄古、桑港等の多數新聞紙を買收して所謂新聞王と稱し、兼ねて紐育の一大魔力にして又一大勢力たるタンマニーを後援とし、極力紐育州知事たらんとせしが、大統領ルーズヴエルト、國務卿ルート氏等が熱烈に之を非難したるため、脆くも失敗したるが、其の一大原由は、彼れが多數の投票を集中せんため、頻りに勞働者社會主義者の歡心を買ふに力め、自然に勞働黨に阿諛したるより、頓に中流階級の人望を喪失したるに在り。

勞働黨に阿媚するハースト氏が富豪に排斥せらるべきは自明の理なり、而して米國に於ける中流階級が勞働階級を敵視する事實は、玆に著るしく證明せられ、竟にデモクラット黨の巨魁たるブライアン氏をして、自己の社會主義者勞働黨にあらざることを辯疏すると共に、ハーストの應援者に非ざりしことをも聲言せざるを得たるに至らしめたり。

此の中流階級が社會主義者殊に勞働階級を悦ばざる思想は、啻だに米國に於て熾んなるのみならず、英國に於ても今や頗ぶる旺盛ならんとするものゝ如し。

英國には素より明白に社會黨と稱する者あらず、而かも勞働者の勢力は漸次に增加し、前內閣時代に補缺選擧ある每に勞働黨の選出せらるゝ者漸く多く、自由黨が諸種の黨派と聯合して大多數を占めんとするや、勞働黨議員のパーリアメントの席を占むるもの實に五十餘人に達し、其の首領ジヨン、バーンス氏

は推されて內務大臣たるに至れり、此意外なる現象は頗ぶる各種の階級を驚かしたるが如く、富豪は勿論、中流階級の英國人と雖も、斯く勞働黨に勢力を得せしめて、社會主義を實施するに至らば、或は英帝國の結合を弱め、國家の基礎に危險を及ぼすも亦測る可らずとする憂惧を懷くに至り、從つて從來最も勞働黨の親友たりし急進黨すら、今や矛を逆まにして攻擊を開始し、曾ては勞働黨の機關新聞の如く思はれたりし『スタア』すら、極力勞働黨を攻擊し、英國の中流階級は恰かも富豪と連合の形を以て、勞働階級を疾視し、凡そ社會主義的政策といへば、一議に及ばず擧げて之れに反對せんとする傾向あるに至れり。

（四）

凡そ中流階級は、富まずと雖も亦甚だ貧ならず、最も常識に富み、愛國心公共心に饒かに、比較的に敎育あり、品性高くして國民中の最健全分子たり、國の基礎たるべき原子たり、故に富豪階級と勞働階級のみの社會は振ふと能はざるも、中流階級の盛大なる社會は極めて健全にして極めて多望なり。此の中流階級は、其の一種の俠氣と、聰明なる分別とに由て、從來多く勞働階級に同情し、寧ろ富豪を控きて勞働者を援護する傾向ありき。

然るに勞働者が漸くに其の地位を堅くするに甘んぜず、動もすれば分外の希望を顯はし、其の同盟罷工の大勢力を恃みて屢々富豪を壓せんとし、其の結果或は國の產業を阻害せんとする傾向ありとは、中流階級の一般に認知する所なるに似たり、彼等は素より富豪をして多く勞働者に讓步せしめ、勞働者を

して相當なる生活を得せしむるの必要なるを信ずるも、また過度に富豪を壓迫するを好まず、孰れか一方のみを增長せしむる結果は、必らず國家及び社會に不利を來すものなりと做す也、殊に近時社會主義の滔々として勢力を得んとするや、漸く帝國主義を把持し、所謂大英帝國聯合說に傾聽せんとする英國人は、社會主義的政策の大膽なる施設に危惧を感ぜざる能はず、況んや其の殖民地たる濠洲の一州に於て勞働黨全勝を占め、全く社會主義的改革を實施して富豪を苦むるや、富人等相率ひて他州に走り、而して風紀の著るしく墮落するの事實を睹るに至りしをや。

英米兩國に於て中流階級が漸く勞働階級と戰はんとするは、是れ勞働階級が漸く勢ひを得て、富豪階級と對立し、動もすれば富豪階級を侵さんとするに至れるが故のみ、然りと雖も中流階級は敢て富豪階級と握手して共の味方とするものに非ず、彼我の對戰は依然として持續す、富豪階級の勢力は尙ほ其を旺盛にして橫恣到らざる所なければ也。

且つ記臆すべきは、中流階級の主張の主として正義に在ると也、彼等は正義を以て富豪の强梁を挫くと共に、また正義を以て勞働階級の跋扈を抑へ、社會主義の勢焰を消さんとするのみ、而して其の目的國家及び社會公共のために外ならず、彼等は正理及び國家の權威のために、正義を標榜して一方には富豪階級と戰ひ、一方には勞働階級と爭はんとするのみ、此の點に於てルーズヴェルト氏の心事と行爲とは、共に英米中流階級の嘆美せざらんとするも能はざる所なりとす。

我が日本にも素より三個の階級あり、幸ひにして健全なる中流階級の勢力は偉大なるも、未だ大なる富豪多からずして、富豪階級の勢力著るしからず、而して勞働階級また微々として振はず、偶々社會主義者ありて、或は同盟罷工説を主張するも、未だ著るしき反響あらず、殊に古來族制主義を以て、上下一家族の如くなりし感情未だ全く澌滅せず、富人貧人強者弱者の間、自から一脈の温氣の相通ずるあり、歐米諸國の如く甚だしく相反目するに至らず、隨つて社會主義者の説も未だ傾聽せらるゝに至らざるのみ。

然れども英米の近勢は、頗ぶる我が鑑戒と爲すに足るものなきに非ず、富者彌よ富み。貧者益々貧しき傾向は、年月を經るに隨つて增大し、其の結果竟に富豪勞働者の兩階級を生じ、兩階級の反目、憎惡開戰を看るに至ると必無ならざれば也、是れ豈經世家の今よりして心を用ゆべき所ならずや、其の勢ひの未だ甚だしからざるに方つて、中流階級の深く意を注ぐべき所ならずや、吾人が記述して竟に玆に至る微志また之に外ならず。

公論

尙武論

文學博士　建部遯吾

尙武の二字は古來極めて慣用語として用ひられ、世人の耳も之を聞くことに熟し、論者の口も之を言ふに慣れて居る、殊に近頃所謂戰後經營の一つの重要なる事項として軍備擴張が政治家或は軍人の方面より策せらるゝに至つては、幾分政略的の機械として、多少の濫用を蒙むるの虞なしとせぬ、此時機に際して我輩身、文に從ふ所のものが亦其尻馬に乘じて尙武の說を唱ふるが如き頗る時勢を迎合するの嫌なしとせぬけれども、併ながら我輩の所謂尙武は世俗の所謂尙武と聊か趣を異にするのみならず、本來眞正の意味に於ける尙武の今日の時機に在つての適用として聊か世人の注意を促したいと思ふのである。

尙武は言ふまでもなく武を貴ぶことである、尙武は形式に非ずして實質である、尙武は事業に非ずして精神である、尙武は技藝に非ずして修養である、是は極めて簡單なる言葉であるか、併ながら略ぼ我輩が尙武に對して有する所の意見を總括するものと見て宜しからう。

若し一國が尙武の事を振はしめんとすることが軍備擴張に存するならば、若し個人が尙武の志を振はんとすることが擊劍、體操、ボート、ベースボールに存するならば、尙武は頗る其適用の方面の限られたるものであらなければならぬ、若し果して尙武にして此の如く狹隘ある意味を有するに過ぎずとせば、尙武を以て國家を經營し、社會を料理し、身を立て道を行ふの根底と爲さんとするが如きは、極めて御門違ひの見解たるを免れぬことになるのであらう、併ながら古來哲人君子の說に尙武の氣性の隆盛なる時は國家興り、尙武の氣性萎靡するに於て國家衰ふといふことすら屢々唱道

せらるゝを以て見れば、尙武や決して此の如く淺薄にして狹隘なるものに非ずとせねばならぬ、我輩初より尙武を以て更に重大なる意味を有し、更に深厚なる作用を遂ぐるものと見て、之に對して多少の解說議論を下さんとするのは是を以てゞある。

今や我邦は百戰强露を征し、最後の結末講和談判に於て多少の遺憾を留めざるに非ざりしと雖も、兎も角も世は再び平和を回復し、東亞の天地は此處暫く太平の間に社會百般文物の發達を遂ぐるであらう、我邦は維新以來着々社會上文明上の進步を爲し來つて、今や國力の世界に公認せられたる新時機を開きたると共に、諸般の平和的事業も亦欝然として興ることであらう、然るに此時に際して我輩が故らに尙武の振興を策するは一見甚だ奇怪なるが如くであるかも知れぬが、それには最も眞面目なる理由の存することとである。

世の尙武論者として我輩が旣に擧げたる軍備擴張論者が我邦の近き將來の爲めに渾身の熱血を灑いで軍備擴張を策するは寔に國家の爲めに歡迎すべく慶賀すべきことゝ信ずる、今日以後に於て複雜なる世局を觀じて今日の平和は暫定的のものであるとか、十年ならずして我邦は更に某國を敵に引受けねばならぬとかいふ高遠なる議論は暫くヌキとするも、武を以て買ひたる國家の地位を扞禦するは、必ずや亦其重大なる一要素として武力を缺くべからざることは言ふまでもなきことである然らば則ち軍備の擴張が今日以後の經世策として必ず其一項に居らなければならぬことは勿論の事である、併ながら我輩が玆に軍備擴張論者の注意を請はざるべからざるは軍備擴張とは、軍隊の數を增すことに於て存するや否や軍隊の數に於て增すことありと雖も、軍隊の編制にして其宜しきを得ずんば軍隊の原動力は頗る減殺せらるゝを免れざることは是れ黒ら人を俟つて知らざることである、軍備擴張は軍隊の編制を改良することに於て存するや、軍隊の編制如何に改良せられたりし雖も、軍隊を組織するの單位たる軍人其者の技能に於て進步する所なくんば軍隊の戰鬪力は甚だ恐るゝに足らざるものであること、又是れ亦黒ら人

を待て而して後に知らぬことゝてある、軍人の技能例へば射擊に於て、騎馬遠乘に於て、工兵作業に於て、輜重の取扱に於て精練せるに於て、軍備擴張の實は直ちに擧るのであるか、軍人の技能如何に進むと雖も、軍人の精神、品位にして向上進步する所なくんば未だ以て軍備擴張の實蹟を呈するに足らざることは、是れ往々黑う人に依つて閑却せらるゝ所のことゝてありはせぬかといふ疑を我輩は敢て玆に提出せざるを得ぬのてある、我輩が玆に尙武の氣性、尙武の精神として軍備擴張論者の前に敢て其注意を乞はんと欲する所は此點に於て存するのてある、尙武の氣性の伴はざる軍備擴張は寧ろ國本を經濟上民力上の點に於て弱むることありと雖も、國家の對外力を上進する所以ては斷じてないのてある。

併ながら尙武の精神は軍備擴張の一大要素として國家社會の經營に與かる意味てあらうが今日凱旋軍人の胸中を見れば所謂義士家に歸つて悉く欣然といふが如く、胸間には燦爛たる金鵄勳章の輝くあり、家に歸れば父母妻子の歡迎するあり、社會には則ち名譽を以て公衆の彼等を待つあり、是れ實に軍人の得意滿腹の時代と云はなければならぬ、此時に於て練武講兵其事たるや益々當局の熱心經營する所となつて、恐くは技能日に增すを見ることゝてあらう、併ながら此時に於て我邦軍隊の危機は無いことゝてあらうか、軍隊を組成する軍人各個、軍人各個を組成する心意上の機微に於て最も軍人精神、尙武の氣性と兩立すべからざる或物が湧き出づるが如きことはないてあらうか、曾て之を聞く、千八百七十一年の普佛戰爭に於て佛人の戰場に屍を曝せる者の懷ろを探るに、常に必ずコスメチツク、懷中鏡等の如き七ツ道具を蓄へざるはなかつたといふことゝてある、是は或は齋東野人の言業てあるかも知れぬが、併ながら佛軍の數十年來鍛へに鍛へたる技能と編制と軍隊の大さとを以てして、彼が如く苦み、一敗地に塗れたるといふ說明として斯かる流說が世に行はるゝといふことは是れ決して偶然たることを許さない

我邦の少壯軍人は斷じて世の戀愛論者、ローマンチシ

ズム、ミスチシズム等の傳染病の襲ふ所となる者はないことゝ我輩は信ずる、然れども名を成すは多く窮苦の日に在り、事を破るは多く得意の時に依ると、小學校に於て曾て我々が學べる修身訓は是れ亦移して以て忠勇誠實なる我少壯軍人諸君に呈すべき金言たるを失はぬかも知れぬ、今日の軍隊は言ふまでもなく極めて複雜なる部分より組成せらるゝが故に、軍隊其物の中には往々尙武の精神なき分子よりして執り行はるべき事務も多々あるのである、故に苟も尙武の精神なしとせば斯かる軍人は軍隊の中より放逐せらるべき者であるといふことは言ふまでもなく、文明の戰爭の何たるを解せざるの過論である、併ながら軍隊の軍隊たり、戰爭の戰爭たる其中堅を形造る所の分子は必ずや尙武の精神的修養に於て最も堅實なる造詣を遂げたるものてなければならぬ、苟も軍隊の首腦にして此造詣を缺くとするか、技術學識其他に於て如何に精銳ある成分に富むと雖も、其軍隊は甚だ多く憂ふるに足らぬ。

軍隊を組成する個人に對して此の如く說き來れることは亦直ちに移して以て軍隊以外の個人に向つて言ふべき所のことてある、今日國家を組成し、對外競爭の單位として國家の部分を形造る所の個人〳〵は、其業務の文たり將た武たるを問はず、同じく自己の國家社會に於ける位地、己の屬する國家社會が世界に於ける位地に付て深く且つ適當に覺知する所がなければならぬ、苟も此覺知即ち此覺悟を有せる以上、軍人ならぬ者も軍人と同樣の覺悟を有せなければならぬことは當然である、若し尙武其事をして技藝に非ず、形式に非ず實に實質たり、精神たり、修養たるものあらしめば尙武其事は是れ直ちに以て今日の時機に於ける國民的精神の本質とせなければならぬ、尙武の氣性精神の發揮するに於て最も一般に注意を要する事項は、我輩を以て見れば左の如くであらうと思ふ。

第一には文弱に對する戒心である、働いては休息を思ひ、醒めては眠らんことを思ひ、食いては飮まんことを思ふは是れ人性の常てあるが故に、玆に慘烈ある戰爭の經驗を經來れる國民社會に向つて、是れに正反對

なる歡喜逸遊のことを勸むる者が社會に出て來るは自然の勢である、是に於て乎戰爭の後に、否戰爭の最中に於て既に業に怪しき美術、怪しき文學等の發生を見る次第で、此事に付ては遺憾ながら我社會の今回の時局に於ても此例に漏れなかつた次第である、而して戰爭の事尙ほ繼續するに際しては其弊や未だ甚だ大なるに至らぬけれども、一度び戰雲既に收り、所謂天下の兵器を漢陽に銷するといふ時代に至つては、斯かる淫蕩的主張は時を得顏に猖獗なる勢を以て進み來るを常とする、是れ最も天下の世道人身に着目し、國家民力の運命を顧慮する者の警戒を怠るべからざる所である、大凡武强に反對するは則ち文弱である、此類の現象、此類の思潮、我輩は之を名けて文弱と呼ぶのである、文弱に對する戒心は尙武の精神を繼續するを第一の要件として擧げなければならぬ。

第二に貨財に對する警戒である、天下貨財を好まざる者は殆ど稀であらう、又貨財を好むことは國民發達の一個の動機として頗る重要なる人間の慾望である、併ながら人の貨財に對する慾望は未だ之を得ざるや甚だ盛なるものではない、旣に之を得るや愈々益々之を得むことを思ふものである、而して戰爭の如きは古代野蠻時代の戰爭よりは既に業に貨財との關係が周密なるものであつたのである、今日戰爭に依つて戰爭に從事せる者の手に落つる所のものは固より野蠻時代の戰爭に於けると全く其方法を異にする、併ながら戰爭が概して戰爭に從事する人々の嚢中を賑はすといふことは是れ隱れもない次第である、此時が即ち貨財に對する警戒の抑々必要となり來る時であるのであつて、固より貨財を好む其事は毫も尙武の精神を蠹蝕するものではないけれども、貨財を好むこと其度を過し、貨財を重んずること竟に武道に過ぐるに至れば、玆に尙武の精神は貨財の爲めに大なる侵蝕を蒙むるに至る次第である、我輩が今日に於て貨財に對する警戒を擧ぐるは正に斯る理由を見得たる所があるからである。

第三に機關の尨大を賴むといふことである、中古時代の戰爭を見れば、其歐羅巴に於けると、日本、支那に

於けるとを問はず、往々一騎打の戰爭がある、戰爭の發達として斯かる一騎打其事は全く幼稚なることゝして排斥せねばならぬといふけれども、尙武の精神を與隆し、從て發達せる近時の戰爭其物の精神的素地の修養として、此一騎打的精神は頗る亦推賞せねばならぬと我輩は考へる、今や其事の正反對として非一騎打的精神、即ち團體の尨大を賴むの精神は、是は軍隊の發達に取つて由々敷大事と謂はなければならぬ、今日の戰爭の方法は我輩素人なりと雖も聊か亦知る所なきにあらぬ、故に團體を以て戰爭戰鬪力の體とせねばならぬことは固より言ふまでもないことであるが、併ながら此所に所謂七分三分の兼合ひが存ずるのであつて、徒に團體を賴んで以て戰鬪に進み、否團體を賴むに非ざれば何等戰鬪の出來得べきことを見ざるが如きに至らば、此の如きは既に軍隊の發達に取つては澆季に屬ぬ」する者と嘆息せねばならぬ、此點は最も文明的に發達せる軍隊に取つて注意を要するとであらねばなら以上尙武の精神の涵養に關して軍隊に密接せる立脚地よりして看察を遂げ來つたのであるが、此事たるや必ずしも軍隊に限るに非ず、軍隊以外の方面に於て、社會に活動する人事に付ても亦同樣に言はるべきことである、唯併ながら其事たるや軍隊に於て之を見る程の痛切を感ぜないからして、我輩は姑く譬諭を軍隊に取つたまでのことであるので、強ち軍隊に尙武の精神の缺乏せることを云々せんと欲する者に非ざることを飽まで讀者諸君の注意を乞はなければならぬ所である。

今や我邦は所謂戰後經營の時機に在りて、經濟上に於ても乃至政治、敎育、宗敎等の方面に於て新しき民族的活動を見んとするの兆候の歷々たるものがあるのである、就中經濟的活動に對して其道の識者は頗る杞憂を懷きつゝあることは日々の新聞紙に於て我々の目擊する所である、今日盛に競ひ起りつゝある所の經濟的新事業は果して百が百まで皆其終を善くすべき運命を持つて居りつゝあるであらうか、經濟に對する識者の注意は亦移して以て我政治的企畫に適用すべてではないであらうか、又更に移して以て我軍事的企畫に適用すべ

きてはないてあらうか、我輩は姑く身に近き所よりして教育上の新活動に付て之を見るも、頗る大膽と細心との兩面を以てするに非ざれば新時代、新機運の要求に應ずるに足らざる者あるを深く自覺するのである、教育的企畫に於ける大膽とは何ぞや、曰く活眼を放つて世界最近の文明國の實施の規模を見て汲々として敢て或は之に及ばざらんとを恐るゝ如きに於て存ずる、教育的企畫に於ける細心とは何ぞや、徒に形式を以て先進國と相競ひ、イソップ物語中の牝牛の眞似をせる所の蛙の愚に陥るとなきやう、造次にも顚沛にも其企畫の眞個の目的を忘れず、常に其中心的要素を固く執りて之を逸脱せざる範圍に於て、規模の擴張を策すべき點に於て存ずる大膽と細心と兼ね具ふるに非らざれば、比較的奇道を有せざる教育事業の如きに於ても亦此の如きものあるを見るならば、政治、軍事等の如き奇道に富める所の社會的活動に於ても亦々此の如きものあるは明かなることとてあらう、今日に於て精神的基礎の一大事項として尙武の精神を賴むは亦此主意に外ならぬのである。

之を屢々實戰を經來り、彈丸雨注の間に幸運なる生命を全うして凱旋せる我輩の知己たる將校に聞く、彼曰く、大凡軍人の最も眞面目なる時機は如何なる時に在るかといふに、死を決して敵壘に吶喊するの時に於てある、此時に於ては誰しも論功行賞などを念頭に置く者はない、然るに敵壘既に陥り、聯隊旗は今や我軍の乘取つたる敵の砲壘の上に閃く時となると、直ちに我先登なり、否我は先登なりといふ功績爭ひが始まることてあるといふことてある、我輩は身實戰に臨まざるが故に此將校の言葉が果して如何ばかり事實を盡いて居るかは知らぬ、併ながら軍人も亦人である此說法が幾分か事實の眞相を髣髴せしむるに足るものあることは强ち拒否すべからざることとてあるでもあらうか、故に尙武論の最も必要なるは軍國多事の際に於て之あるにあらずして、平和克復天下泰平の時に於て在りと謂はなければならぬ、奇妙なる哉、世の學者先生は戰役の酣なる於に盛に武士道を說き、尙武の精神を論じ、

軍人の功績を賞賛し此の如き事に於て是れ日も足らざるの狀態であつたが、今日世の泰平となり、人心の楔子成は漸く將に緩まんとするに際して、此の如き學者先生の口より、筆よりして何等の警告に接することがないといふのは我輩の頗る遺憾に存ずる所である、今日農工商、學者、宗教家、政治家一般日本國民は申すに及ばず、即ち彼の軍人社會に至ると雖も今日に於て最も腹巻を締めて掛る、即ち尚武の精神を振ひ起して掛るといふことは極めて國運の長久を計る所以であらうと信ずる、故に此新春の時に際して天下の眞面目なる國士諸君と倶に此研究を始めたいと思ふのである。



社會主義と社會改良主義

法學博士　桑田熊藏

此頃は社會主義の聲漸く朝野の間に喧しくなつて來た。余の採て居る主義は社會改良主義といふのであつて、先年來大學の一派と共に運動して居るのは即ち夫れで、社會主義とは全く正反對に立て居る主義である余は今此社會主義と社會改良主義の區別に就て少しく論じて見たいと思ふ。

此問題に就ては余は拙著歐洲勞働問題に於て詳細なる説明をなし其後論文に講話に幾度も説明を試みた故に今更事新らしく述べ立るの必要を認めざるも記者の切なる要求は終に余をして茲に本題に就て私見を述ぶるに至らしめたのである。

本論に入るに先つて議論の順序として

社會問題

とはどういふものかと云ふことを明にしたいと思ふ、第一は廣い意味の社會問題、第二は狹い意味の社會問題である。廣い意味の社會問題とはどういふものかといふと、社會上の總ての問題を指すのであつて、或は宗教の問題、教育の問題、風俗の問題、慣習の問題等の如く、政治に關係のない總ての社會上の問題と考へればよからうと思ふ。此れが廣い意味の社會問題である板垣伯一派は此意味に於て社會問題を標榜して居らるゝ樣である私の先年來研究して居る問題は此廣い意味の社會問題ではなく、寧ろ狹い意味の社會問題である。それはどういふものかといふと、貧富の衝突、勞働者對資本家の問題を指すのであつて、歐洲に於ても、日本に於ても、近年盛んに社會に波瀾を起し、朝野の一大疑問となつて居るものである。貧富の問題、是れにも色々種類があつて、或は農業に於ける勞働者對地主の關係、又工業に於ける勞働者對資本家との關係、先づ大別して此二種類となる。社會問題即ち貧富の衝突は社會存在以來あるもので、上希臘羅馬より、中世を經降て近世に至つても世界各國に絕えず起て居る。併しながら歐洲では十九世紀以前、日本では最近二十年前までの社會問題は重もに農業に於ける地主對勞働者間の衝突であつて、近年即ち現今の社會問題といふものは、寧ろ工業に於ける勞働者對資本家の問題である。何故に近年になつて社會問題がやかましくなつて來たかといふと**工業的社會問題**が起て來たからである。農業の社會問題といふと、地主と勞働者の關係、其間には土著といふ關係がある。地主も永久に或る土地に住まつて居、勞働者も永久或る土地に住まつて居る。さうして勞働の目的は不動產である。そこで雙方の間に如何に不滿があつても容易に土地を去る譯に往かない。地主も亦然りそこで双方の間に多少波瀾あり、衝突あつても、圓滿に其局を結ぶのである、且又た地主、勞働者の間に情愛の關係が存し、殆んど主從の關係が存して居る場合多いのである我國維新前に於て、小作人は地主を尊敬して、封建

の君主の如く考へ、稱して地親と云つて居た地主は小作人を見ること自分の臣下の如く思て之を地子と云つて居た。そこで一方は服從する、一方は慈愛をするので、慈愛と服從の關係で結び付けられて居た。それ故に時には多少の波瀾や故障が起ても、元々情愛の關係が基礎に成て居るから、左程酷い衝突も生じない。然るに工業社會に於ては、土著の關係はない。資本家は資本を何所に持て往ても、自分の利益さへあれば宜しいといふことになる。勞働者も何所に住居を轉じても賃銀の高い所は自分の住居と思て、何所にても場所を轉ずるから双方の間に土著の關係は全くないのである、又情誼の關係もない、二者の關係は全く勞働の賣買の關係であつて一方は成るべく安く勞働を買はんとし一方は成るべく高く勞働を賣らうといふに過ぎぬのである、此等の理由によつて農業時代には社會問題が激烈でなかつたが、一國が進んで工業時代になつてから、社會問題が危險なる徴候を呈するやうになつた。現今歐洲に於ては學者、政治家、官吏等悉く社會問題に熱中して、是れが解決の方法に就て苦心慘憺たるものである。吾國にては幸にも未だ社會問題の形勢が切迫せぬから、社會の有識者も左程注意を拂はぬが、遠からず歐洲と同じことになつて、社會問題の形勢が危險なる徴候を示すことは爭はれぬ事實であらうと思ふ。否な其の徴候が已にあらはれつゝあるやうに見える。此社會問題を解決する方法について歐洲の學者、實際家の間に二派の意見がある。一は社會主義で、一は社會改良主義である。

社會主義とはどういふ意見かといふに、貧富の衝突を無くするには必らずや衝突の元を壞さねばならぬ、即ち凡ての土地資本を政府の所有にして私有財産を無くして、生産事業といふものは工業にもせよ、或は農業にもせよ、之れを官業にしなければいかぬ。さうして人民を悉く勞働即ち政府の工場に使ふ、勞働者とする。さうなると富者も政府の工場に往かなければ職を得る譯に往かぬから貧者と同じく皆勞働者になる。それで生産事業を官業にし、又

土地資本の私有財産を全く禁ずるといふと、貧富の衝突が起る譯がない。要するに私有財産と自由競爭なる二大原則に依る現在の社會制度を一變して、土地資本は官有とし生産業は官業とし、人民は總て勞働者となす所の新社會を建設しやうといふのである。矢野文雄君の「新社會」に在るあの理想が社會主義の理想である而して社會改良主義の理想とする所は全たく之と異なつて居る貧富の衝突は誠に社會主義の主張する如くに生産の凡てを官業にし人民を擧げて悉く勞働者となさざるも尙解決の餘地は綽然たる者である現社會の二大原則たる私有財産と自由競爭を存續し其範圍內に於て此問題を解決せんとするは即ち社會改良主義の理想である是く云へば或は社會改良主義は個人主義と何の異なる所あるかの疑問は起るであろう是には明瞭なる畛域がある個人主義は私有財産と自由競爭とを極端に迄擴張せんとする者であるが社會改良主義は事業の性質に依つては或範圍迄は私業を去つて官業に移し又公益の必要なる場合には或程度迄は自由競爭に放任せず相當の監督をなさんとするのである即ち私有財産と自由競爭とを絕對的のものとなさず制限的のものとなす點に於て社會改良主義は個人主義と異なることを認めねばならぬ社會改良主義は此理想に依りて社會問題を解決せんとするのである社會主義の如くに特に新なる社會を建設するを必要とせず現社會を存續して衝突の起る時に弊害の存する處に適當の方法を以て救濟を施すのである社會主義と社會改良主義との區別に就ては例へば玆に一つの家がある。社會主義に據ると、此家を壞して更に新らしい材料を以て、新らしい設計によつて、家の改築をしやうといふのである。社會改良主義は、現在或る家を其儘で保存して置いて、屋根が傷めば屋根を葺替へる、壁が傷めば壁を塗るとか、各個の事柄に付て修繕を加ふるのである。

社會主義といふものも餘程以前から希臘に初めて起て、それから羅馬中世に及び、歷史上餘程長い沿革を經て居るから色々な學說も理想もあるけれども、要するに現在の自由競爭と私有財産といふ、經濟組織の二

大原則を壞はして、新社會を作るのが其理想である。そこで

社會主義の沿革

を見ると十九世紀の半ば頃迄は社會主義者は只現在の社會を壞はして、之に代はるべき新社會の理想を示すことにのみ勉めて居た。所が千八百五十年の頃に近世社會主義の鼻祖カール、マルクスが初めて社會主義は唯吾々が新社會の理想を述べるのみではない、此現在の社會の經濟の進歩の趨勢が自ら新社會を作らしめたるものであるといふ說を立てた。其要旨を述れば工業の進歩、農業の進歩、總て生産業の進歩するに從て、大事業と小事業の競爭が生じて來る。其場合に大事業は小事業を打壞はして、小事業は到底大事業に勝てない。紡績の工場にしても一萬錘の工場と五千錘の工場と競爭すると五千錘の工場が一萬錘の工場に勝てない、そこで五千錘の工場は倒れて一萬錘の工場を吸收し、一萬五千錘の工場となる。而して大規模の工場も更により大なる規模の工業家には倒される。そこで段段と事業の競爭上小規模の事業は倒されて大規模のものに吸收されて仕舞ふ。若し極端の場合を推測して見ると終には社會の生産事業が一人の手に歸する譯になる。一番大きな仕組の事業が社會各般の事業を皆取て仕舞ふ譯である。之を稱して「事業の集注」といふが事業の集注するに伴て資本の兼併が生じて來る。大資本家は小資本家を壓倒して、大資本家は更により大なる資本家に壓倒されて、遂に社會の富が少數の者の手に歸して其少數の者の間に競爭が又生じて、一番大きい者が社會全般の富を皆取て仕舞ふ。そこで一私人の一番えらい、一番大きな者が社會全般の富を取るやうになるから、それよりは無形の團體即ち國家をして社會の生産事業を總てやらしたならば、それが良くはないかといふ決論である。此學說が出ましてから社會主義が長足の進歩をなし、從來はユートピア即ち空想として新社會の理想を述べるに過ぎなかつたものが、カール、マークスの學說以來、幾分か學理上の根據を得ることになつて、學者間にも實際家にも亦勞働者にも

社會主義が次第に勢力を得て、遂には社會民主黨なる一の政黨が成立するに至つた

社會改良主義の現況

についてはなか〳〵種類も多いし、沿革も長いから茲に詳しく述べる譯には往かぬが其大要をいふと社會改良主義の劃策に二種類あつて、一は個人的改良策二は國家的改良策である。

個人的改良策

といふのは、勞働者自身が組合を設けて、組合の事業に依て勞働者自身の地位を改良し幸福を增進するといふのが此の主義である例へば職工組合といふて同業の職工が組合を作て勞働者間に疾病或は災害、或は老癈等に對して保險をするとか、或は組合の決議に依て勞働時間を一定し、或は勞働の條件等を極めて、其條件を以て資本家に迫り、資本家と協議をして、組合の極めた條件に依て組合員たる勞働者を使はせるといふやうなことをするのである。歐洲に於て職工組合は頗る盛んなるので、英國に行て見ると職工の三分の二は組を合作て居る。組合員の總數を計算すると三百萬位ある。是れは世人も知るが如く我國の鐵工組合、又日本鐵道會社の火夫組合、活版工組合等は其好適例である。是等の組合は職工組合といふのが目的でなくして、職工組合を作て社會主義の宣傳をなす機關にするものがある、是は甚だ危險である。職工組合はどこまでも職工組合の目的を以て立て往かなければならぬ。然るに社會主義の傳道はやるが、職工組合の本來の事業は餘りやらないのは誠に困つた話である、それから消費組合、是も歐洲で隨分盛んである。是れは職工が百人なり二百人なり集つて一の事務所を設けて組合を作る。そこで事務所ではどういふことをするかといふと、職工の日常使ふ消費物、例へば食物とか、或は衣服とか、靴とか、帽子とか、石鹼とか色々の物を組合の事務所て買集めて、其物を組合員たる職工に賣るので、どういふ方法で賣るかといふに、其中にもいろ〳〵の種類がある。が通常行はれたるものは組合の事務所で物を買入れたときの原價で賣らなくて、並みの店屋で賣る

のと同じ價を以て賣り、其小賣より生じたる利益を組合員の貯金として保存して置くといふ方法である此方法に依ると組合員は安い物を買ふことは出來ぬが、一方に貯蓄が出來るといふことになる。凡そ貯金をするには、消費を節約して、一升の酒は五合飲み、十本喫む煙草は五本で我慢して貯金をするのであるが、消費組合を設けると、一升の酒は一升飲んでも、又十本の煙草は十本喫んでも、自ら貯金が出來るといふ便法である。此組合も英國が餘程盛んであつて組合總數もなか／＼多いが組合員の數も亦頗る多いのである、殆ど職工組合と數に於て相似て居る、此外個人的改良策の例は種々あるが職工組合、消費組合が其重もなるものであるから、先づ是れに止めて置く。それから

國家的改良策

の方に移るが、是れはどういふことが主眼であるかといふと、社會問題の解決即ち社會改良主義の實行については個人に任かして置いては十分に効果を得られない。國家即ち政府が進んで勞働者と資本家との間に立て、或は調停をし、或は干渉をし、さうして社會問題を解決しなければいかぬといふのが國家的改良策の主義である此國家的改良策の實例を擧げれば貧民救助法の如き其最好適例である。政府の費用を以て貧民を救助するとか、或は無告の鰥寡孤獨又は職業を失へる勞働者等を國費を以て救助するのである。彼の工場法の如きも、國家的改良策の最も好い例である。勞働時間とか、職工の年齡とか、いふやうなものは、勞働者、資本家双方の協議に任かして置いては到底其目的を達することが出來ぬから政府で法律を定めて何歳以下の職工は使はせぬとか、或は勞働時間は何時間以上に上るべからずといふやうな制限を設けて職工を保護するのである。此工場法と貧民救助法の外に尚ほ國家的設備が幾らもあるが主もなるものは此二種である。是れより

社會主義の理想學說に對する批評

を試みやうと思ふ。社會主義の理想とする新社會が果して實行せらるべきものかどうか。矢野文雄君の「新

社會」に書いてある理想の如きは殆ど說明を俟たない程嗤ふべき思想であつて、ユートピア即ち空想といふ一語を以て批評の餘地はないと考へる、生產事業が官業になり、人民が總て勞働者になるといふ社會が假りに出來たものと想像すると、第一の疑問は、職業の選み方に付てどういふ處置を執るであらうか、新社會に於ても生產事業の中で、或は精神計り使て勞力を一向使はない事業もあらう。或は勞力を非常に使て精神を要しない事業もあらう。同じ勞働の中でも、極めて容易のものもあれば極めて難いものもある。尙ほ進んでは新社會に於ても現社會と均としく政府も要る。又學校も要る。敎會も要るから官吏及び學校の敎師、宗敎家等の必要もある。そこで先づ假りに余が新社會に這入れば、どういふ職業を希望するかといふに、先づ官吏になりたい、或は敎師になりたい。どうも勞力をするのは忌やてある。外の者も亦さういふ希望を持て居るから官吏も敎師も宗敎家も澤山あるが工場には誰も這入らぬといふことになる。そこて職業を選むに人民の自由に放任して置いてはいけない。政府て貴樣は鑛山に往け、貴樣は紡績に往け、貴樣は官吏、貴樣は敎師といふ風に、政府の命令を以て職業を一々指定しなければならぬ、そこて指定をするにどういふ標準に依るかといふに、顏付きに依て指定も出來ない、又試驗をする譯にも往かない。ツマリ指定の標準がないから當局者が隨意に自分の見込に依てやるより外はない。其中て自分の親戚とか、友人をば成るべく官吏か敎師にし、或は緣もゆかりもない者をば勞働にやるやうな不公平も生ずる。職業の選擧を自由にすれば到底勞働者は無くなる。それから官吏の强制に任かして置けば甚しき不公平が生じて來る。是れが新社會の一大缺點てある第二に賃銀を極めるのはどうかと云ふと是には古來より社會主義は餘程苦心したることてあつて今に至るまて殆んど未決の問題てある現今獨逸社會主義の泰斗「カウツキー」の如きは之に就て種々の意見を出したが未だ滿足なるものはないのてある現在の社會ては賃銀といふものは雇主と被雇主との合議て極めるの

て、自ら勤勉なる者精巧なる者は高い賃銀を得るが、之に反して懶惰なる者、不熟練なる者は安い銀賃を得るのであつて、經濟社會の理法で極まるのであるが。新社會では凡て生産業は官業であるから政府で賃銀の準則を示めさなければならぬ。之を示すにはどういふ標準に依るか、一々人民を集めて試驗をして、貴樣は技術熟練であるから賃銀は幾らやる。貴樣は精巧でないから幾らしかやらぬといふ。技術の精巧、不精巧の區別を立つることは出來やうが、勤勉と懶惰の標準は見分けが附かない。假に余が新社會の工場の經理を委任されても、賃銀の極め方はどうしても法は附かない。それから第三には新社會では金持もない、貧乏人もない如何なる貧民と雖政府は之を養ふ義務がある、生活の最低限度迄は政府の費用を以て人民を養ふ義務があるのであるから誰でも遊んで居て贅澤は出來ないとは云へ、生活の最低限度迄の政府の補助を得るのである。さうすると何を苦しんで勞働をする必要があらうか勉强すれば人より幾分か多くの賃銀を得やうが、多くの賃銀を得ても迚も何百萬といふ財産を作る當てもないから財産競爭心は起らない。働いても詰らないから先づ遊んで居て政府の御厄介になつて賃銀の最低限度を得て遊んで居たいといふ者が澤山に出て來る。そこでさういふ者にどうして勞働をさせるかといふに、どうしても强制を加へなければならぬ、引捆へて惰けて居てはいかぬ、貴樣は工場に往けというて强制的に人民を工場にぶち込まないと生産と消費とが伴はないことになる。惰け者が澤山出來ては消費を充たす丈けの生産物が出來ない、故に社會の消費を充たす丈けの生産物を作るにはどうしても惰ける者を捆へて來て工場にぶち込まなければならぬ、さうすると監獄の囚徒と人民とどう違て來るといふと、囚徒は牢屋に居る、一方は自分の家に居るといふ差別こそあれ、自分の自由意思に背いて政府が强制的に日に何時間の勞働をせよといふのだから、丸で人民は囚徒と同じ事になる。かゝる社會に余は成るべく住みたくないと思ふ。

以上述べたる第一乃至第三の非難に對して社會主義者

の通常與ふる所の解答を聞くに彼等は新社會に於ては是の如きケチな卑劣なる不都合なる了見を抱く者はない新社會に於ける人類の性質は全たく現社會とは趣を異にし高尙純潔恰も神の如きものとなること必然である奈何んとなれば現社會の罪惡は凡て生活の必要に迫られて起るものであれば此必要を除去せる新社會に於て人類の性質は一變するとは明瞭であるのであると。思ふに社會主義は人類に對する觀念を胃腸に對する觀念と同一視し社會の現象を以て凡て麵包に對する欲望より生ずるものとなすのである「カールマークス」の如き極端なる唯物論者にして物質的に社會の組織を説明せる學派を奉ずる説を執るは固より奉ずる者と此説を執るは固より怪むに足らずと雖も人類なるものは只消化機關の奴隷なるか麵包に對する欲望は果して凡て社會現象の原力なるか是る極端なる唯物説は到底當今科學の研究と相容れぬものである吾人の常識の首肯する所でないのである此事に就ては卅三年の頃と覺ゆ余は天地人と題する雜誌に於て安部磯雄君と數回の論難をなしたることである玆に之を詳言せぬなり獨逸にて自由黨の名士「リヒテル」佛國にては前大臣「ギヨー」共に新社會に關する小説を著はし是等の點より新社會が到底成立する能はざることを述べた殊に「ギヨー」は之を一種の喜劇となし痛切なる批評を試るに喜劇なる哉喜劇なる哉新社會の理想を評するには此一語に如きものなしと余は信ずるのである。

それから第四に新社會の困難は生産と消費との平均を保つことが出來ない。假りに我國で此新社會の理想を實行するとせんに、五千萬の人口に對して米若干石、麥若干石、著物は絹が若干反、木綿若干反と云ふ樣に一日其消費物を豫算して置かねばならぬ此豫算を立ることは果して人力のなし得ることであらうか人口の增減もある生活狀態の變化もある嗜好も畫一ではない凡ての是等の條件を取調べたる上ならては此豫算は立てられない假令ひ無理に之を立てゝも實際に適合しない卓上の豫算である何の效もないのである今數百歩を讓りて消費の豫算は兎も角も立てられたるものとせんに

更らに之に伴つて生産の豫算を立てなければならぬそこで假りに米五千萬石を要するとすると、之を全國に割當てゝ何縣では何萬石、何縣では何萬石と分量を極めて生産をさせなければならぬ。然るに指定通りに生産が出來ればよいが、出來ない所もあるに相違ない、豫定通り平均を得て豫定通りの生産が出來ると結構であるが、それはさう往かない、年の豐凶もあらうし、水害風害もあつて生産額に變動を生ずるから米の生産にも過不足が出來る。足らなかつたらどうするか、輸入米を仰ぐ。剰つたらどうするか輸出する。さうすると政府は國際貿易の事業を營むことになるのだ政府は内に在つては凡ての生産業に從事し外に對して國際貿易の營業者となるのである勿論現社會に於て特定の事業を官業となせる場合には政府は此責任を果して居るのであるが是れが二三種の物品に止まるならば左までの弊害も起らないであらう去り乍ら新社會に於ては凡ての物品に就き政府は製造者たり又貿易商たる地位に立つのであるから其困難は非常である奈何なる靈妙なる手腕を有せる財政家と雖も其局に當ることは出來ないことであらうと思ふ是は到底人力の得て及ぶ可き所ではない社會主義の理想とせる新社會が一の喜劇に過ぎぬとの「ギョー」氏の冷評は眞に名言である

第五に社會主義の新社會を政治學上から考へて見ると實に危險なことである社會主義と政體の關係問題に就ては特に之を論ずるの機會もあらう又國體論の本據に依つて社會主義を攻擊するは牛刀鷄を割くの類で餘り大人氣なきことなるを以て余は玆に之を措かんと思ふのである去り乍ら歐洲に於ける社會主義者が新社會の政體に就きて奈何なる觀念を抱けるか又君主政體に對して果して好意を表するか否やの問題に關しては事實の證明を與へねばならぬ

古來社會主義者の政體に關する觀念を考へると、二三の例外はあるが殆んど悉く共和政體と社會主義の新社會と相俟つものであると斷定をして居る。君主政體に依て新社會を造るといふことは獨逸ではラッサルといふ人がいつて居る。此ラッサルといふ人はなかく

政治家である元と政治家であつて、中頃社會問題に足を入れて、勞働者の首領に成つたのである、元々政治家であるので、獨逸國民に向て社會主義を傳道するには君主政體に背いては勢力を得られないといふ所から君主政體を主張したものと見える。余が獨逸に行つたのは十年前であるが、其當時獨逸の國會に於て社會黨員の發案として刑法改正案が出て、其一項にカイザーベライシイグング（皇室に對する不敬の罪）の一項を削除するといふ議案を提出した。當時獨逸の社會黨員は皇室に對して不敬の行動をなし、禁錮罰金の刑に處せらるゝ者が往々あつたから、刑法の改正として皇室に對する不敬罪の條項を削除するといふ發案をしたのである。勿論此議案は通過せざりしが斯かる發案を憚らないのを見ても、社會黨員が如何に獨逸の皇室に對して不忠實であるかといふことが分る。それから余の獨逸に行く四五年前のことであるが、皇帝が議會に出御になつた時分に、皆帽を脱して敬禮したが、社會黨員は一齊に何の敬禮をも表しない、そこで議會に於て社會黨員を懲罰に附すといふ議もあつたが其時の政黨關係もあつたが爲めに懲罰には附せなかつた。皇帝は閉會の時に議員を招いて陪食の榮を賜はるのが例であるが、其宴會には社會黨員をお招きにならなかつた。此等の事實に就て見ても歐洲社會黨が國家の觀念に乏しく皇室に不忠實なることは學理上よりも寧ろ彼等の行動に明かにあらはれて居ると思ふ。以上述べた所で社會主義は到底一の空想であつて且つ實行すべからざるものであることが略ぼ明瞭であらうと思ふ。

「マークス」の現社會の趨勢が新社會の成立を促がすと云ふ所論に就ては余は拙著歐洲勞働問題の大勢に於て之に對する詳細なる批評をなしたのであるから玆には只其要點のみを掲げんに「マークス」の所謂工業集注の趨勢と云ふことは制限的のものである一般の工業に適用さるべきものでない工業の性質に依つて大工業の組織に適するものと小工業の組織に適するものとの區別があると云ふことを明かにせねばならぬ又工業の集注と資本の集注とは別問題である近時産業の發達に伴

つて組合營業は次第に盛大となる組合營業の方法に依れば大資本家も均しく工業集注の利益を受くることを得るのであるから工業が集注すればとて資本は必らずしも集注するものでないことは何人も疑を容れないのてある又「マークス」の立論より推すときは商業が進歩すればするほど貧民は增加する譯なり然るに歐洲各國の統計の事實は此結論を許さないのである要するに「マークス」の所論は從來「ユートピア」を以て滿たされたる社會主義の學說に於ては萬綠叢中紅一點の看なきに非るも世人が想像するだけの學理上の基礎鞏固なるものではない硏鑽度を進むるに從つて瑕疵百出するものと云はざるを得ないのである。

以上述ぶる所に依り社會主義は其の新社會の理想に於ても亦現社會の批評に於ても與に不當なる論據の上に立てるものである之を以て社會に對する不平者が徒らに奇言を弄して欝憤を晴らすの方法となすならばいざ知らず社會問題の解決は此主義に依るの外なしと云ふが如き結論は奈何に考へても起らないのである余輩は我國の識者にして苟も社會問題に意を注ぐの人々は宜しく此謬見を抱くことなく社會改良主義に依つて斯問題の解決を務むべきことを望む者である余輩社會主義者は貧富の衝突に對して之を冷眼に附し去る者ではない此衝突は或程度までは到底已むを得ない之をして激烈ならしめず穩かに始末を付けたいと望む者である又余輩は現社會は完全無缺なるものと云ふ者ではない種種の缺陥實に忍ぶ可らざるものあることは之を認むる者である之を救濟するに適當なる穩和なる方法を執ることを主張する者である而して業に調和の手段救濟の方法に就ては之を理論に照らし之を實例に徵し効力の顯著なるものあるのである何を苦んで社會主義の如き謬妄なる理想を奉ずるの必要あるか余輩は社會主義に非れば社會問題の解決は到底其目的を達すること能はずと云ふは極めて淺薄なる社會觀であると斷言するに憚からない鳴かぬなら殺して了へ杜鵑と云ふ句は善く社會主義の思想を現はして居る余輩は鳴かぬなら鳴かして見せよう杜鵑と主張する者である以上述ぶる所に

て社會主義と社會改良主義の區別及び其優劣は明瞭てあろーと思ふ。

減政主義

増田藤之助

吾れは未だ今日に於て無政府主義を主張するほどに大膽なるものにあらず、然れども敢て減政主義を唱道せざるを得ざるなり。無政府主義とて、主義それ自身は必ずしも左までに恐ろしきものにあらず、但だ是れ遠き未來の黄金世界を待つて始めて行はるべく、之れを今日に於て唱ふるは破壊論のみ。減政主義は之れと異なり、今日よく實行し得べき穏當にして健全なる實際説なり。彼れと此れと相距る啻だに千里の差のみにあらず、減政主義は却つて無政府主義を防ぐ所以の道たるなり。

吾が謂ふところの減政主義とは何ぞや。官府の仕事を減ずるなり、政治機關を縮小するなり、國家萬能主義に反對して政府の領分を狹むるなり、政府の爲す處は之れを其の當然の域に畫して好事的多事の弊を矯め以て政權の重を減じ民人の力を養ふべしといふに在り。是れ吾が二十年來の持論にして今ま猶ほ動かざる確信なり。而して近年國政の方針其の反對に出て世論の傾向それと逆行するを見ては、彌よ之を主張せざるべからざるを感ずる也。

久しいかな我が官僚政治(ビューロークラシー)の積弊や。我が政府は三十餘年來高く一國人民の上に坐しつゝ傲然として强大なる官僚政治を組織し、赫々たる官威を振ふて社會百般の施設に當り、以て盛んに其の規模を擴張し其權力を誇耀し、其の欲する所に任かせて命を下だし事を行ひ、縱横自在適くとして可ならざるは莫く、こゝに於てか社會の一機關たる官府最も重要の地を占めて傍ら人無きが若く、殆んど政治の一事を以て天下の萬事を併呑し去りたるの概あり。因襲の久しき今ま猶ほ之を脱せざるのみか却つて倍々甚しきを致さんとするが如し。憲法布かれ國會開かれたりと雖も、政府の實質は依然

として官僚政府なり。スペンサー氏曰く『玆に督制的政略の擴張あれば必らず玆に督制的機關の增加あり、即ち官吏の事務愈よ增し、官府の權力愈よ加はるなり。試みに、一は多くの彈丸を盛り一は僅かの彈丸を盛りたる二個の天秤盤を取れ、而して多く盛りたる天秤盤中の彈丸を取つて追々に僅か盛りたる天秤盤中に投ぜよ。頓がて其の相平均するを見るべし。而して斯くして進まば双方の位置轉倒し、輕かりしもの重くなり、重かりしもの輕くなるべし。若しそれ其の秤衡（ハカリザホ）を不平等に分かち、輕く盛りたる天秤盤を長棒の端に置かんか、彈丸は移す每に幾層大なる結果を生じ幾層速かに地位の轉倒を來たさん。被治者をして追々治者の社會に入らしむるの結果も亦た斯くの如し。之れが爲めに治者社會を強め被治者社會を弱むるの度は相互の數の變換に準ずるよりも遙かに大なるものあらんとす。何となれば、官吏の團體は互ひに粘着し、共同の利害を有し、中央の權力を奉じてよく統一せられ、民間には粘着なく、定固せる政略を有せず、統一すること容易ならざるを以て、彼れは數の割合よりも多くの力を有し、比較的少數を以て大によく此れに勝るを得ればなり。されば官府は一たび其の成長の或る度を過ぐれば漸く抗すべからざるに至るなり。世人其の證を得んとせば試みに歐洲大陸の官僚政治を看よ』と。然り、政治機關は廣大複雜にして有らゆる手段利便を所有するものなるが故に、一たび發達し確立すれば復た容易く抗抵すべからざるに至り、治者社會の增すに隨つて被治者社會の對抗力は幾何學的比率に減じゆくなり。日本の官僚政府亦た實に其の一適例といふべし。見よ我が官僚政府跋扈のため政治機關過重の病ひ既に膏肓に入れり。豈にいつまでも此の現象を續かしむべけんや。斯くの如くにして爭でか國運眞個の發達を期し得べきぞ。須らく早きに迨んで根本的に之れを救治せざるべからず、即ち更に遙かに政府の組織を簡易にして大ひに其の事務を減少せんことを當面の理想とし此の方針に向つて進まざる可からず。今ま其の廢すべき重もなるものを擧げんか

文部省宜しく廢すべき也（畫一好きは此省の特色なり、何者をも一定の模型に入れて御役所的に鑄造せんとするに汲々たるは此省なり、凡べての學校を官立にせざれば承知が出來ず凡べての人間を官化せずんば休まざらんとするは此省なり、有名無實の教科書檢定なるものを行ふも此省なり、自今小學教員は判任官同等と心得べしと令して「其職を完全に施こすものは大哲學者ならざる可からず」と云はるゝ兒童の教育者を態々刀筆吏の範圍内に引き入れたるは此省なり。之れを廢して其事務の一部分は内務省に屬せしめば足るべきのみ）

農商務省宜しく廢すべき也（保護と稱し奬勵と號して無用の干渉に陷ゐり、曰く何檢査法曰く何組合と動もすれば個人營業の自由を妨害せんとするの行跡あるものは此省なり、貸下金補助金等下付の結果着々失敗に歸し徒らに國財を耗消したるのみならず、反つて正當なる農工商業の發達を阻碍せること少なからず。之れを廢して而して其の必ず當さに爲すべきの事務は之を他に分配合併すべきなり。然るに何事ぞ全國農事大會は近日農務省獨立を建議せりといふ、愚なる哉此事の如きは徒だ事務の煩冗を來たし失費の増加を致すに過ぎざるのみ）

警視廳宜しく廢すべき也（人民の保護を第二に措きて主として「不名譽なる（インフエーマス）警察（ポリース）」―間諜を職務とし、事實上政府反對黨秘密探偵廳の觀ありたるは此廳なり、此れ專制時代警察政治の遺物のみ。内務省に警保局あり東京府に警察部あり、今ま絕えて之を存置するの要あらず）

樞密院宜しく廢すべき也（第二の元老院たる此の養老院は曩きに廢せられたる元老院と共に存在の理由を見ず）

此他、廢するを得ざる諸官省に就きても、梟眼ならぬ精透なる批評眼を以て觀れば、其の局課に於て其の事務に於て廢除すべきもの多々あるや必せり。苟くも減政主義の見地より嚴査せんには、總體を通じて著る

しく大減縮を加へ得べきことと疑ひを容れざる也。初期帝國議會の時に方りては稍や右に近き改革案民黨硬派によりて唱へられざるにあらざりしも、腰拔けの議會と意氣地なしの政黨とは終に其の目的を達せしめず、爾後空しく官僚政府の後塵を拜して、其の國家萬能主義の實行に謳歌するか、然らざれば之を默過するのみ。是に於てや一害未だ除かずして早く既に一弊を釀し、忽ち某の條例、忽ち某の企業、深慮無き政策流行して國民の負擔は非常の速力を以て增加し來る。生絲直輸出とか製茶廣告とか航路擴張とか公財を消費して一部富豪者の事業を特惠し助成するの弊あり。或は鹽官營、或は煙草官營、多數消費者を困しむるの外、何の効かある。頃者また砂糖官營酒造官營の議ありと云ふ、何處まで愚且惡を押し進めんとするか。

若し夫れ文部省を廢せば教育衰へんと謂ひ農商務省を廢せば實業振はざらんと謂ふが如きは日本國民自から侮るも亦た甚だしと云ふべし。日本人民は今ま尙ほ政府に依賴せざれば自から此等必需の事を成す能はずとなすか。文部省なしと雖も農商務省なしと雖も、眞個の教育眞個の產業は啻だに衰へざるのみならず寧ろ一層盛んに興らんこと疑ひなし。凡そ人民の經營すべき事業にして宜しく起る可くして起らざるは、多くは官府先んじて之れを占領するがためなり。需要あれば供給之れに隨つて起るは社會自然の大法なり、而かも若し人爲の供給を以て假りに之れに應ずるあらば則ち眞成本然の供給の起るを促がすべき刺衝の力を減殺せざるを得ず、是れ亦た人生動かすべからざるの定則なりとす。政府の國民に對する、宜しく之を無爲に放つて而して有爲に成効せしむべし。抑も官僚政治の常として、官僚各々其官局に割據し其所管の事務を擴張し權を振はんとするの弊あり。當局俗吏の輩みな各自の立案施設を以て必要缺くべからずと做すも、其の實多くは是れ餘計の贅事のみ。彼等區々たる小刀細工を施こしては敏腕と誇り、無用の長策を弄しては國家の爲めの妙計と稱し、而して政治上無爲は則ち大有爲なる所以を悟らず。庸人天下を擾るとは即ち此事なり

上の爲すところ下これに和す。政府に國家萬能主義の實行ありて、民間また之れに應じ同樣の思想感情あり。上より下に及ぼす此等の種々なる干涉に加ふるに、又た下より上に出づる樣々の希望請求を見る。讀者は近日新聞紙の報ずる所を聞かずや―

「近來農商務省に對して國庫補助を出願せる民間事業頻々として殆んど十餘種に及べる由、船主同盟會、ホテル設置組合、燐寸業組合、鐵葉事業會社等其の一部にして、民間實業家に獨立心の薄弱なる驚くに堪へたりと當局者は語る」

是れ此の太甚しき依賴心は當局者多年の干涉政略によりて養成せられ奬勵せられ刺戟せられたるものにして、官僚政治の賜ものなり。實に政治機關の督制多きを加ふるに隨ひ「我々は何事をも爲すべきにあらず、政府は我々の爲めに萬事を爲すべし」との思念いよいよ國民の間に生長し來り、斯くして世々相尋いで一個人若しくは私立會社の働きを信ずること薄くなり、官家の働きを信ずること厚くなり、遂に政府にあらざれば何事も成し能はざるが如く思ふに至る。先頃は帝國の首府に於てホテルの官營を政府に要求するの說さへありき、馬鹿々々しきにも程あるに非らずや。「實現の事實は想見の事實よりも其の勢力強し、佛人は久しく其の葡萄收穫の時節を政府より敎示せられたるが故に斯かる敎示をば必要不可缺と迷信して疑はず、從來蒸餠の製造發賣が官吏の手に成るを見たるものは遂に民間の私業にては蒸餠を供給する能はずと妄想するに至る」と識者の言吾れを欺かず。加之ならず帝國主義を叫ぶもの、國家社會主義を主張するもの、亦た皆な政權の擴張を促がし國家の事務を繁からしめんとす。斯くの如くにして、官家の事愈よ增し政府の費益々加はり重く租税を斂め輕々して國財を用ゆることあるも、多くは之れを歡迎するが如く、復た深く之れを咎むるものなからんとするこそ奇怪なれ。

蓋し國家に大自在の盤力あるもの丶如く思ふは古今何づくの國にも免かれざる迷信なり。政府を以て當さに社會の萬事を爲す可き者、又能く爲し得べき者と做

すは、誤妄これより大なるはなし。一國政府の本分は國民の生活營業を保護し國家の安寧秩序を維持するに在り、將た何ぞ他あらん。政府にして此の區域を逸し民業に侵入し彼れをも爲し此れをも起すとせば際限なかるべし。社會の事物には自然の法則ありて之れを管理し、整々秩序あり漸々發展す。故に其れをして自然の順路を追はしめ、其の前途を遮ぎることなければ足るのみ。例せば、政府は殖産、教學の事業を營む處にあらず、之れに關する政務を司どる處なり。所謂る産、教學に關する政務は自から農工商の役を演ずるにあらず、自から教育家となるにあらず、即ち唯だ其事業の妨害を除却するなり、其事業の便利を疎通するなり。要するに、人民をして此種の行動に不自由を感ぜしめざるやうの境遇を保持するにあるのみ。且つ夫れ社會の活力(人民の能力資力の結合作用)は時に應じて一定の限りあり。政府にして無より有を出すの靈力あるに非らざるよりは一毫も社會の活力を創造するを得ず。政治機關が社會に於て能くするところは唯々其活力の表現、方向、分配を左右するにあり。其のよく自から事業を成すの力あるが如く見ゆるは恰かも手品師の手品を使ふと一般にして、其實只社會自然の活力を使用して斯かる外觀を顯はすに過ぎず。故に政府自から手を下して事を行はゞ則ち其れ丈け人民活動の力を殺がざるを得ず、而して政治機關の過重過大は社會活力の源泉を涸渇するに至るべきなり。知るべし、政府に大自在力ありと想ふは啻だにギゾーの云へる如く巨大なる迷信たるのみならず、實に危險なる迷信たることを。

或は謂ふものあらん「今や國運勃興國事多端、諸々の經營を要するの際、政治機關を減縮し政府の職業を消極的に限らんとするが如きは陳腐の迂論なり」と。げに世の進步に隨ひ事物の複雑に赴むくは自然の勢ひなること吾れ固より之を知る。されど斯くあればこそ彌よ政府本來の職分を嚴守して諸般の事業を人民の經營に任かすことを要するなれ。一方に於て社會の進むに伴ひ、人事の繁雑になりゆくに從ひ、政府の必らず爲

さゞるを得ざる國民の生命財産保護の任加はると同時に、愈々他の一方に於ては自餘の點に似而非職分の試行を罷めざるべからず。世運の進捗とは決して政府膨脹の謂ひにあらず、社會の多事とは決して冗務多端の謂ひにあらず。曰く積極政策、曰く膨脹的經綸、斯かる浮誇なる名義の下に、好大喜功の地に誘はれ國利の增進を奇貨として本分外の目的を自任するの病ひ、深く戒しめざる可からず。事每とに政府の力を俟ちながら尙ほ何の膨脹ぞ。官權を以て民業を營んで大日本の大何づくにかある。唯だ宜しく害を除き道を開き國民自由の活動を安全ならしめ、十分に其の自然の力を發揮することを得せしめよ、此くの如くにして而して後ち眞正の文明富强得て望むべきのみ。

夫れ政府なるものは所謂る「不得已の害(ネセッサリー、イーブル)」なり、されば成る可くだけ此の「不得已の害」を少なくするやうに勉めざるべからず。エマーソン曰く「政府といふもの一の疑問にあらずや。何人も之れを愛するものあらず、多數は之れを嫌ひ、良心窃かに臣民としての服從に躊躇す、唯だ之が辯護となるべきとは政府無くんば社會壞亂の恐れありといふに在るのみ」と。人類若し圓滿完具の理想境に達せば復た政府を要すること無けん。吾人は無政府が理想的社會の極致たることを否認する能はず。所謂る無政府主義(アナーキズム)の開祖プルードンが「社會の眞狀態は無政府にあり」といへるは暴言として斥くるを得ざるべし。然りと雖も人間社會が現在の如くならん限り、政府を全く廢する能はざるや勿論なり。而かるに歐米の無政府黨なるもの敢て今の世今の時に無政府を主張し、且つ暴力によりて其の目的を達せんと欲し、時に爆裂彈を擲つて君相の肝膽を寒からしむるものは何ぞや。蓋し歐洲大陸の民、久しく苛重なる賦稅を强ひられ、武斷政略の要求に惱まされ、慢性的不平の狀態に居るもの甚だ多し。彼等の或る者は其の被むる所の疾苦が過大の政治に基因せるを知り、自國政府の政策の浮誇不謹愼なるが爲めに徒らに資財を殺がれ壯丁を徵せらるゝを知り、終に政府そのものを敵視し之れを廢せんと企つるに至るなり。此輩無知の

徒にあらず、政府なるもの丶必要なるを知らざるの理なし。惟ふに此の睹易き事實を認むる能はざるにあらざるべし、之れを認むるを欲せざるなるべし。乃ち過重なる政府の壓迫に堪へずして不平禁ぜざる餘り、斯く行ふ可からざる事を行はんとするに外ならざるべし。佛國政府の如きは、數年前の調査によるに、官吏の數六十萬人の多きに及び、政費は國民生産力の殆ど十分の三を吸收し、換言すれば人々毎年九十日の勞働を政府に徵發せらるゝ割合なりといふ（我が日本の政費の如きも今や六億に近からんとす、其の國民の生産力に對する割合如何は吾れ今ま手許に統計表を持ちあはさゞるを以て詳らかにせずと雖も察するに非常なる高率ならん）。斯くの如くにして行ひて變はらずんば、是れぞ益々此種の危險なる不平黨を養成する所以にして、前途頗る憂ふべきものならん。治安を本分とする政府、本分以外に出てゝ政を濫りにし民を疲かれしめ、遂に安寧秩序の大敵たる無政府黨を激成す。吾れ玆に至りて斷じて曰ふ、國家萬能政略は自殺的政略なりと。然らば則ち減政主義の實行は此種の不平を減ずる所以にして、やがて無政府主義の生長、無政府黨の蔓延を豫防するの道を準備するものたるを解すべきなり。

嗚呼減政主義なる哉、減政主義なる哉、國民の幸福を圖り社會の進步を望まば、減政主義を實行して民間に餘裕あらしむるより急なるはなし。此れをなすに於て我が議會の烏合賴むに足らず、我が政黨の無氣力賴むに足らず。あはれ斯主義の權化とも謂ふべき千古未曾有の大政治家世に出てよかし。吾れ平生常に想へらく、神の王國を此地球上に實現せんと期したるオリバー、クロンウエル其人の如き理想高邁規模遠大なる絕代の大英雄現はれて、鬼神また避くる底の非常なる大英斷を施こし、猛然として官僚政治を根柢より革め、減政の福音を厲行して好事的多事の宿弊を一洗するあらば何等の絕大快事ぞや、是れ實に政治的救世主の降臨、我が人民の福祉、我が社會の發展、それ如何ばかりならんと。然れども是れ millennium を望むの類耶、彌勒の出世を待つが如き耶。



英佛の接近と獨逸

『アウグスブルゲル、アーベンドツァイツング』

英佛の軍事同盟が獨逸に與へたる惡感情は「アウグスブルグ夕刊新聞」の所說によりてその一般を窺ふを得んか、今その大要を記せば即ち左の如し

抑も此度新に英佛間に締結せらるべき軍事同盟たるや、決して佛蘭西の主唱に係るには非ず、否寧ろ佛國は特更英國と軍事上の同盟を爲して、之と相提携すべき緊切なる必要を感じたるには非ず、唯英國の熱心なる主唱とその勸誘とによりて、敢て自ら進まぬ乍らも、さりとて又之と同盟するも決して自國に不利なるには非ずとの見地に於て、さてこそは今度の軍事同盟を締結せんとするには至りたるなれ、佛蘭西自身には此同盟に對して何等特別の期待はなきなり、同盟の深き意味は專ら英吉利の側に求めらるべきは又何人か疑はんや、バルフォールの言によれば、誠や英國は彼の爲めに歐羅巴に用なき兵を弄ふべき、或る强國を如何にしても大陸の一方に有せでは叶はじとよ、此同盟が目指すところの當來の敵の何者なるかは、吾人三歲の童兒に非る限り、又特更恍々然としていふの要あらんや、事情は十年前露佛同盟締結の際に於けると略ぼ同樣なり、否同樣にして同樣にあらず、當時露西亞皇帝は元より歐羅巴に數千萬の軍勢の豫備を要せしが爲に、支那佛蘭西との同盟を承諾せしなるべし、されど之と同時に彼は又、之によりて自ら戰爭的欲望を制禦し、併せて外部列强の平和を保障せんとの確固たる目的に出でしは爭ふべくもあらず、然らば今や英國も亦之と同樣なる戰爭防止、平和保障の美はしき役割を演ぜんとするにか、否此推測には絕えて毫然の肯定ありとも覺えず、恐らくは吾人によりて豫期せらるゝは却てその反對なるべし、何となれば獨和間の戰爭に於ては、英國は假令自らその戰爭の渦中に投ずるを得ざるに於ても、尙且つ之によりて絕大なる利益を獲得すべきは、彼の能く看過するところに非ればなり、されば獨逸の地位として英佛の軍事同盟の締結をば最高度の不信と最高調なる惡感とを以て觀測するの他なきなり。

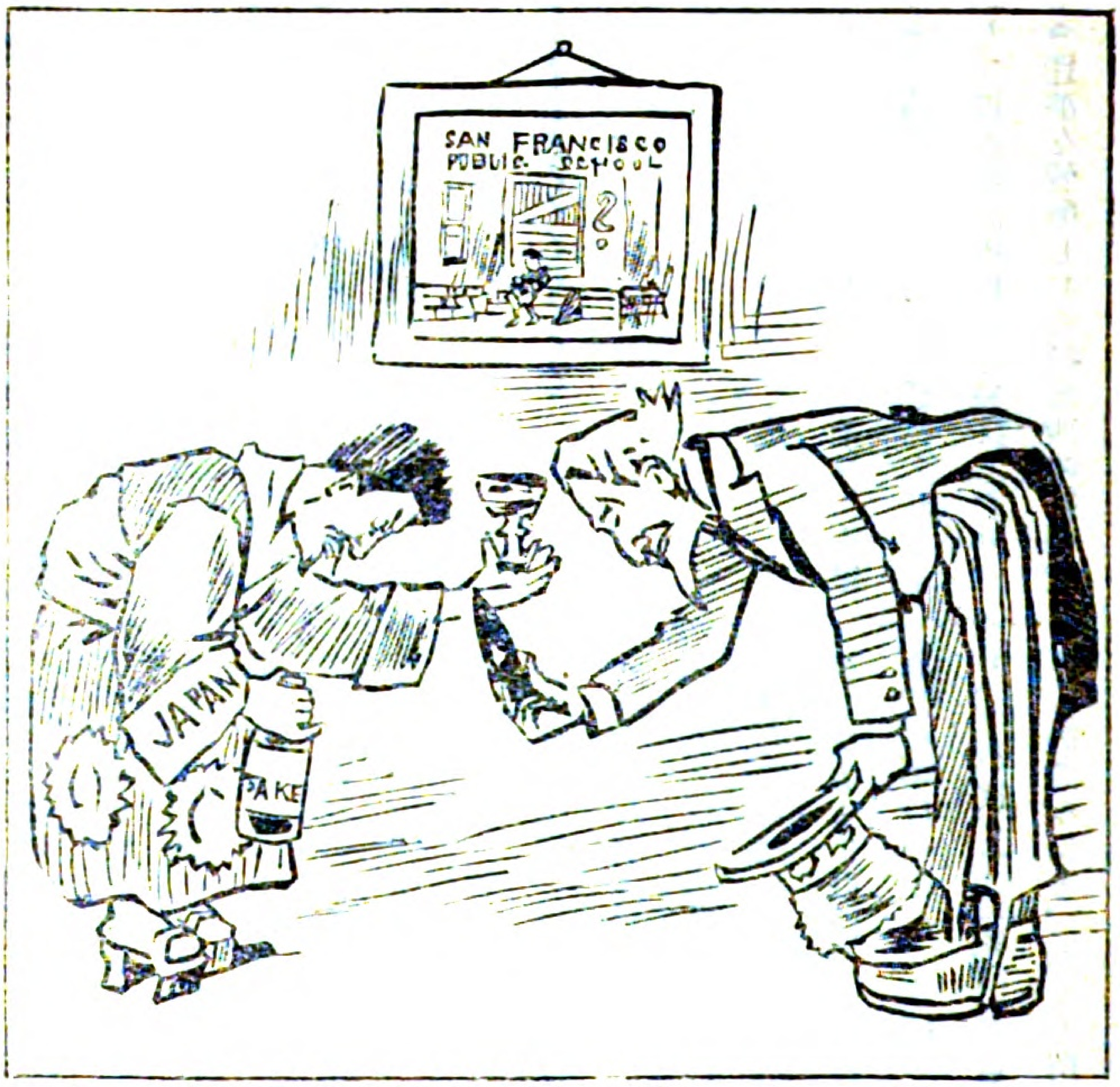
英紙の挑戰的態度と獨逸

『クロイツツァイツング』

左にクロイツツァイツングに掲ぐるところの教授シーマン氏が所說の

大要を記すべし、氏は獨逸皇帝に親しく謁見するの榮譽を有するの人なれば、その表面温厚にして極めて樂天的なる觀察も之を前項の記事と對照して熟讀玩味せば、即ち英國により囚はれたる獨逸の孤立的地位(例へばツークンフト紙上に於てハルデン氏が論するが如く)の、悲むべき眞相を益々明かに窺ふに足らむか。

吾人はナショナルレビュー誌によりて吾人に向けられたる毒毒しき敵意的評論に對しては、數週來何等の注意をも拂はざりき、何となれば海峽を隔てゝ彼我に疏通しつゝある幾多好意的盡力の結果、兩國間並に兩國民間に於て最も親善なる友誼的關係の樹立を期待し得ると共に、マックス氏ブレンナーハッセット氏等の機關が、動てはその勢力範圍たる讀者の間に於てすら、結局は彼自ら遂に斯かる益なき非禮の挑戰的政策を棄つるに至るべきを信じたればなり、されど悲むべし、吾人の希望と所期とは儚き一場の空想に終りたり、されどナショナル、レビュー誌の批難が直接に我皇帝陛下の一身に向けられざる限りは、吾人は尚ほその最後の挑戰的論議に對しても從順なる沈默を守るべし、同誌は第一に最近三個の戰爭の誘發者たるの責を、我が皇帝陛下の肩上に負はしめんとするなり、三個の戰爭とは何ぞや米西戰爭、南亞戰爭、日露戰爭、之なり、同誌の攻擊は尚ほ之に止まらず、第二には暹南、ファショダ、旅順港の危機を煽動したること、第三には一九〇四年十月ドッツヤーバンク事件(漁業地問題)の平和的調停を防害したること、凡て此等の責任を一切我皇帝陛下の双肩に掛らしめんとするなり、吾人は元より斯ゝる明白なる、然かも惡意ある虚妄の言に對して、一語たりとも辯解の必要を認めず、唯我新聞雜誌の溫厚なる感察と交情ある態度とが、再び往年の如く英國民に對する



BOTH TOGETHER—"Awfully sorry. Beg your honorable pardon."
—Rehse in the St. Paul *Pioneer Press.*

無實なる敵意を以て解せらるゝが如きの日あるに至らば、始めて吾人は之に對して答ふる處あるべし、蓋し英國が政治上の友邦たる關係に立てるのみならず、英國王とは肉身の關係ある國家の元首に對して、ナショナル、レビューが爲したるが如き斯ゝる大膽なる批難は、彼の往年兩國新聞紙の敵意的論戰の最も險惡なりし日に於ても、尙ほ且つその主題たることなかりしを思へば、英紙の大多數が概して英獨の關係に對しては貴ふべき友誼的態度をなしつゝあるのみならず、決して彼のナショナルレビュー誌の論調に雷同するがごとき事實なきの事實を注意するを怠らざるべし。

日本と米國

『ブロード、アロー』

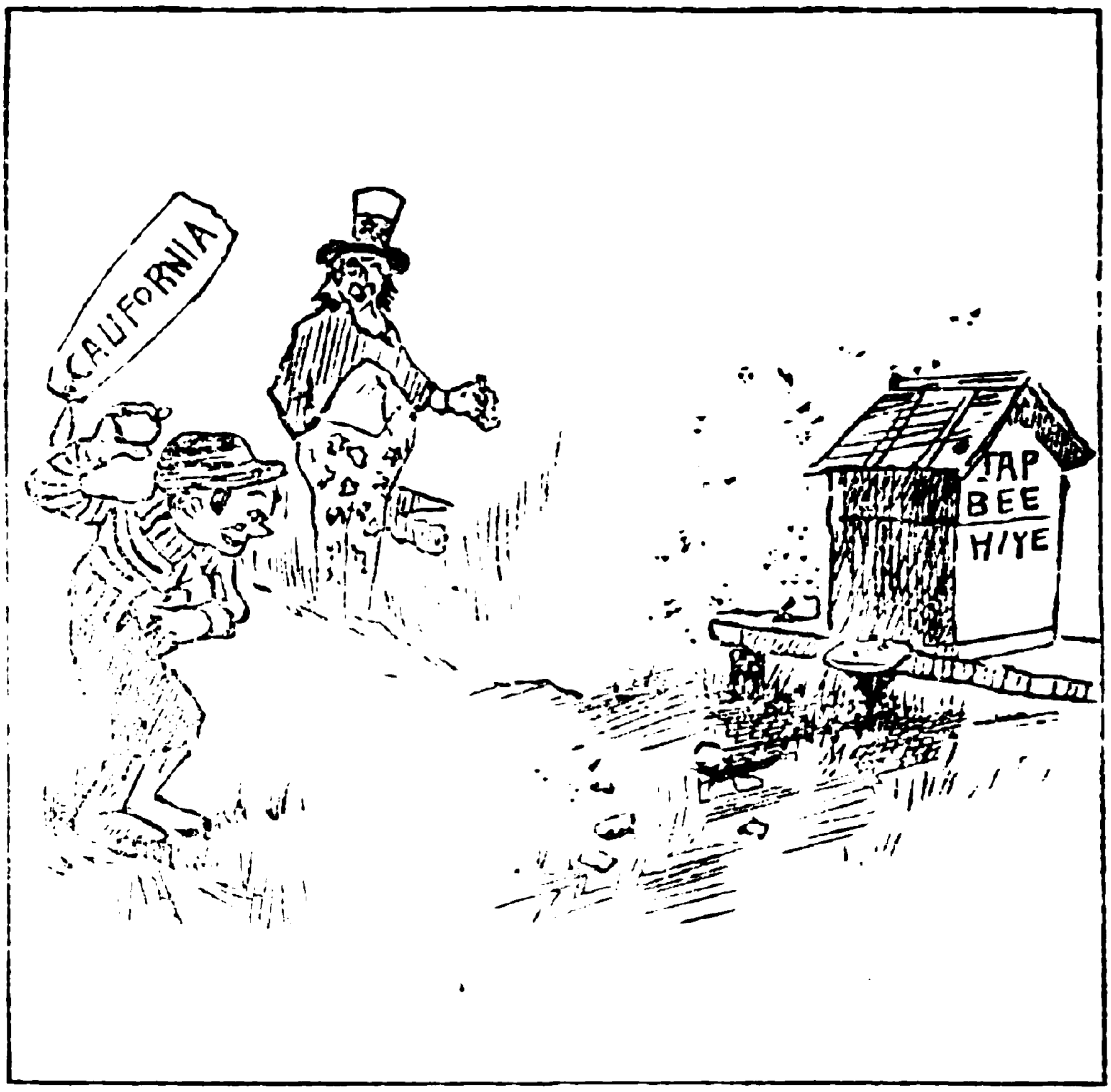
日本は偉大なる人民と呼ばるべき卓越せる資質と勇氣とを有す、全歐洲、特に彼の鐵血宰相ビスマークすら、露西亞の後影にも恐れたりしものを、彼れ絕東の島帝國はそれに對して彼が崇高の精神を發揮したり、夫の「金城湯池の露國」といふ忌はしき迷夢を覺醒したるは泰西の基督敎國にあらずして日本なり、今又新大陸に於ける條約の眞型を主張して動かざるも亦日本なり、建國以來亞米利加合衆國は諸列强と對等の際交を修めしが、而かもその國內の事情によりて己が負へる職務を推行し能はざることあるや、常に辭を卑うして州政府を說服し兼ぬるの事由を友邦に訴うるを事とす、米國との外交史は、或は辭令を以て或は文書を以て、幾多無視せられたる條約の殘片を亂點す、吾人は刻下の事件に於て米國民に到底辯護を許されざるべき諸多の難點の存するを見る、伊太利匈牙利も亦彼と等しき狀態に在り、米人が支那人に對する處置を見よ、彼等が米大陸にて支那人に與へたる薄遇は其の本國に於て所有る歐洲列强の侵掠よりも更に一層の憤慨を起さしめき、露國が他とは同一尺度にて計られざるが如くに、米國も亦、其處に多少の理由こそ逆へ、其常規を以て律すべからざるや一なり、左れど日本は決して左る外交政策的辯解を許さず、彼が露國との戰に當り、國際の正義に據りて起ちたるが如く、今此米國との紛議に於ても等しくその正義の爲に抗爭せり、ルーズベルト氏は靑木伯の通告に接して、そは異常の事態なりと書けりといふ、吾人は吾が英國の政治家が夫のニューフアウンドランド協約に對し巧妙なる言語を弄したるが如くに、暫く之を信じ能ふとせんも、日本は決して去る生眞面目一圖にはあらざるなり、すはといはゞ彼は確然たる布法の手段の下に、米國の商業に大損害を蒙らすべき權力を有するなり、されば㸃華盛頓政府に異例なる外交上の謙抑的態度は示されたる、斯くも敬意を保ち、斯くも明かに要償にも報ゆべき存慮を以て應ぜられたる事件は實に空前の事なりとす、此事全然ルーズベルト氏の責任を重んずる性格の上に歸すべからず、そは兵略上に將た商略上に、極東に於ける米國の大損失と日本が不撓の精神によりて得たる强大なる勢力とに想

到したればなり、而かも加州人民の風議や疑ふべし、されば米國は一面强懸し得ざる條約上の義務を負ふよりして已むなく因循の態度に止るべきかな、殷鑒懸かりて昭明なり、這回の事態は深く他列國によりて肝銘せられざるべからざるもの、その事局の進行は中に多大の意味を包含す、日本は實に世界の尊敬を集む、そはヘンリー、カムプベル、バンナーマン流の外交手段によるにあらず、彼が武裝の際に公示したるが如く、常に背後に全國民の勢力を輾めばなり。

露西亞政府と農民問題

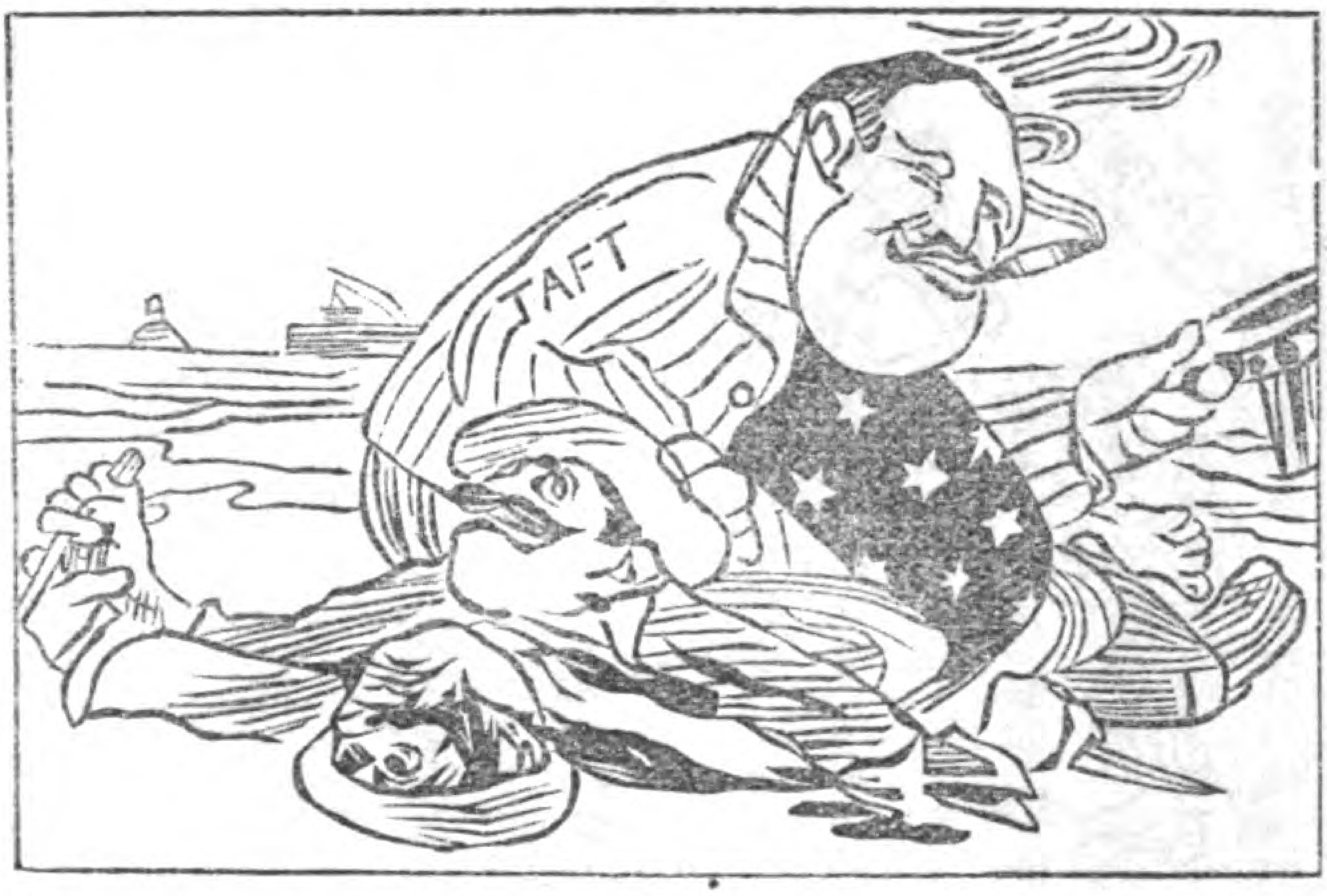
『ドイッチエ、タイゲスツアイツング』

目下露西亞政府はその最も焦眉の急を感じつゝある重大問題の解決に着手せり、重大問題とは何ぞや、そは云ふ迄もなく農民問題なり、露西亞政府は今度新に組織すべき國民議會の召集前に、所謂農民問題が假令その全部の解決を見るに至らざるまでも、切めてその一部たりとも滿足に解決せられ、而かもその改革の要旨が來るべき國民議會によりて、根本的修正を加へらるゝが如き不面目に終ることなき樣充分愼重なる態度を以て之が調査を爲し、その成果をして善美に近からしめん事を期せるものゝ如し、此目的の爲に目下露西亞政府は、第一に露西亞全體の國家的制度を通じての農民の離隔的地位の廢棄、第二には之と同時に農民をして一切の他の階級の公民と對等なる權利を享有せしむること、此二ヶの根本的改革に關する問題を熱心に討議しつゝあるなり、然して此二個の問題の解決に對しては既に有力なる幾多の材料は遺憾なく蒐集せられて、今や政府の手中にあり、そは大臣ストリヒン氏が指揮の下に、最も秘密に任命せられたる委員等の



UNCLE SAM—"Get out o' ther, ye fool!"
—Donahey in the Cleveland *Plain Dealer*.

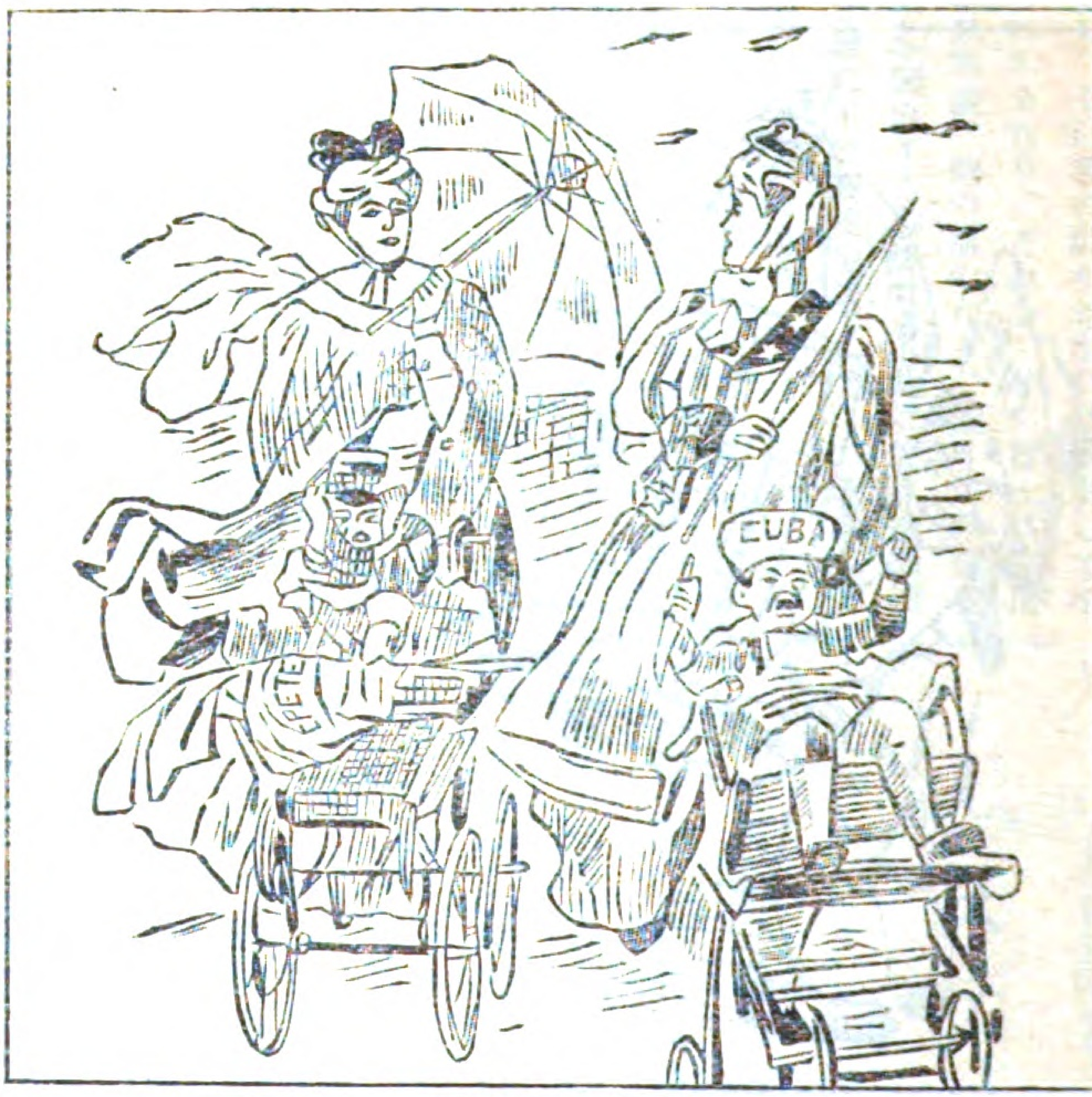
調査に係れるなり、委員等が調査の結果によれば、農民問題の解決に缺く可からざる種々の方策は、同時に行政各部の改革並に新法律の制定と關聯する所あるを以て、政府は此種の方策を實行する爲には、適當なる法律案を起草し、普通立法の方式に從ひて之を起草せん事に決せり、之に次で來るべきは農民に對する一切の離隔的制限の除去に關する方策なり、その方策の實行せられん曉には、農民は自由に大學校に入學する事を得べく、又何等の制限なく任意に官職に就き、又はその他の公務に攜はる事を得べく、最早從來の如く此等の地位を獲得するが爲に、自ら農民組合を脫したるとの證明を必要とせざるなり、尙ほ又農民は その欲する が儘に、何時たりともその身分より脫することを得ると共に、農業には全く關係なき他の任意の職業を選定するを得るのみならず、又地方に於ては農民の階級に ある者にして、自己の敎育上の材能、官界における地位、又は勳功等によりて、格別なる特權を獲得せるものと雖も、自ら欲するに於ては兼て農業に從事するも亦差支なく、更に進んではその農業と關聯せる一切の權利義務を保有し、併せてその從來の農民組合に依然として歸屬することも亦無條件に許容せらる、之によりて露西亞政府は、從來の露西亞の成法によりては、絕體に且つ無條件に農民社會には賦與せられざりし種々の榮譽ある希望ある地位職業を彼等の前に提供して、以て在來の壓制に苦みつゝ鬱勃として憂愁なる生活を續けつゝある彼等が前途に、永遠なる慰安の影と希望の光とを投ぜんとするなり、要するに露西亞政府が農民に對して爲さんとする根本的の改革は、今日特に農民が困みつゝある幾多の壓制的法規を全然廢棄するか、左なくは根本的に之等の嚴律を輕減せんとするにあるなるべし、而してそは單に農民社會に止まるにはあらず、施いては他の一切の階級にも及ばんとするは勿論なり、加之露西亞政府は又、從來納稅の義務あるものと義務なきものとによりて爲したる階級の區別を廢止し、從て亦之によりて生じたる種々の法律上の差異をも一切廢棄すると共に、露西亞國內の各所に尙ほ行はれつゝある、夫の人頭税並に相互質なるものをも一切廢止せんとせり、



IT WAS NO TROUBLE AT ALL FOR MR. TAFT TO SQUELCH THE CUBAN RIOT.

—*Kladderadatsch* (Berlin).

斯ゝる改革は實に露西亞の農民に對して空前の重大事件といはざるべからず、何となればそは民事、刑事、その孰れにも亘れる彼等の法律上の地位に、破天荒なる變更を加ふるものなればなり、即ち露西亞政府は農民をして獨立に且つ任意にその相續財産の分配その他の民事的行爲を爲し、併せて又行政的手段によりて、之が解決を爲すこと能はざらしむべき包括的改革を期圖せるなり、而して又露西亞の國法によりて支配せられず、區裁判所の任意の裁決に服すべき農民の犯罪行爲に對しては隨時に成立したる判決例の効力を生じたる後にあらざれば、之が所罰を爲すを得ざるの方針を採用せんとするは又政府の所期なり、以上述ぶるが如く、農民に對する現存の幾多の制限を單純に廢棄し、以てその成果を有功に實現せしむべき方法として、各行政機關に對し、適當なる命令又は訓令を發して、如上改革の方策を實行せんには、必ずや露西亞下民の腦裡に善良なる印象を與へ、彼等をして慰安の境地を得しむるのみならず、又彼等をして政府に對する好意的感情を抱懷せしむるの導因たらざるなからんや、露西亞政府が能く此點に留意したるは、蓋し多とするに足らん、唯吾人は斯ゝる有望なる改革が、單に一個の空しき約束に止らざらんを祈るのみ。



A PRETTY PAIR.

NURSE EUROPA—"I've got a nice handful!"
NURSE COLUMBIA—"Well! Look at mine!!"

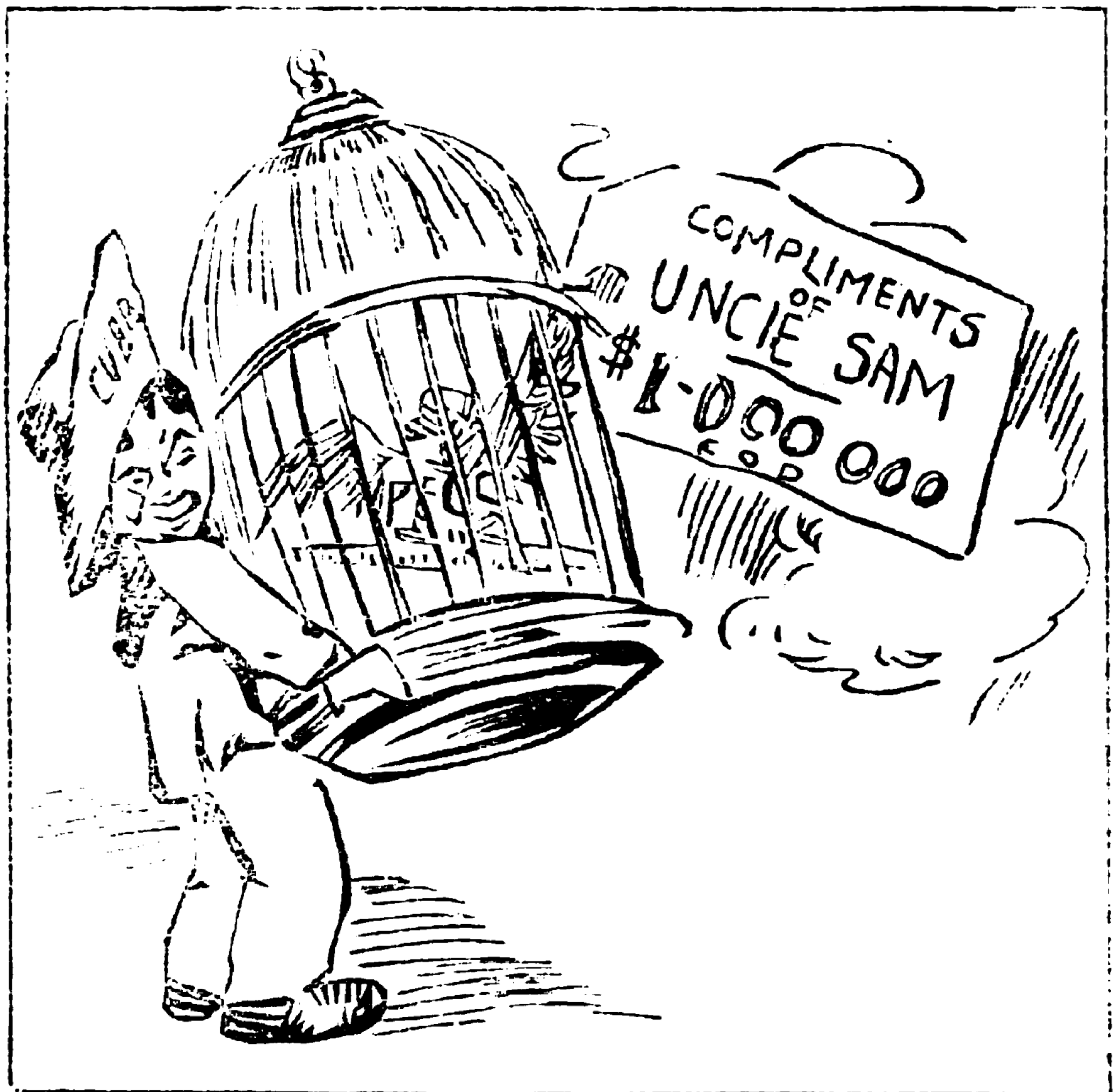
—*Punch* (London).

和蘭と日本

『ダス、エヒヨー』

羅馬發刊のギオルナレ、デイ、プブリチは、和蘭領ジヤバ島に向けられたる日本の野心に就いて、頗る神經的なる報知を齎したり、その大要は下の如し、目下日本各所の造兵廠並に造船所に於ける作業の繁忙は實に豫想の外なるものあり、現下の日本の事情に照して斯ゝる急速なる兵器の準備がその軍事關係に要ありとも覺えず

何ぞ測らん日本政府はジャバ島に對して大々的野心を有するなりき、數多き日本の間諜密使は島內の到る所を橫行して、既にその足跡を印せざるはなし、ジャバの重要なる都府に於ては、日々日本の野心を窺ふに足るべき徵候的事件は續續として發生しつゝあり、日本の水兵は和蘭の警吏と屢次爭論を爲し、果ては暴力に訴へて毆打を事とするなど、常に挑撥的態度を以て悶着の發生を期せんとするものゝ如し、バタビヤ其他島內の大都府に伏在せる斯かる日本の間諜密使は、その全力を盡して東京政府に對する輿論の傾向を探知せんことに努力しつゝあり、蓋しジャバ島の占領は、一にはその海上權を獲得し得べき地位と、二には同島が有する絕大なる富源との兩面より、日本政府をしてその財政的關係より泰西諸國の羈絆を脫せしむるに足るべきは、恐らく何人も疑なき所なるべし。



"Sapristi! What a lovely and expensive gift from my dear uncle!"
—Mahoney in the Washington *Evening Star*.

將來の硝子

『リテラリー、ダイヂエスト』

從來作り得たる量よりも更に多量の石英硝子を製造する新方法はワシントンのカーネーギー、ゼ、オフイシイカル、ラボレートリーのアーサー、エル、デー博士に依て發見せられたりと、之は市俄古市發行ゼ、テクニクル、ウオールド、マガヂンの十一月號紙上に右の方法に關する論文を寄書せられたるレネ、バツへ氏の所說に由るものなり、此新發見はデー博士が電氣熔礦爐に於て石英を取扱ひ居る際に偶然にも發見したるものにして頗る有用なるものに屬す、石英硝子は單に熔解せられたる石英にして、別に再結晶法を用ふる事なく其儘直に放冷せらるゝなり、左れど此石英なるものは、曾て電氣熔礦爐の說明なき以前迄は、全く不熔解物と見られたるもの、否此電氣溶礦

爐の有力なる助を以てだに、尙ほ今日までは極めて少量なる硝子の製造を得たるのみ、此發見の有益なる事は、如上の硝子の、從來は唯一小球の形にて得られたるものにて、其價は左の誇張なく、全く金を同一位にありし事實よりしても確めらるべし、それ等の群小球を共に熔解して小なる器物並にレンズ等が製造せられたるなり、それを、テー博士は高度の熱と壓力とを用ひて熔解し、淸朗明徹、些の泡のなき、長さ六吋廣さ二吋、厚さ四分の三吋なる石英硝子を製出するを得たり、此は電氣熔礦爐內部の墨鉛箱中に、一吋平方に五百磅以下の石英を置き、之に二千度以上の熱を生ずべき交互電流を通じて熔解し得たるなり、

普通の硝子は七百度の熱にて熔解し、石英硝子は二千度の熱にも抵抗す、石英硝子器中にては金も銅も將た銀の如きも些の容器を損傷することなくして熔化し得られ或は滊化し得らる、故に若し耐火鋼鐵製金庫に石英硝子製の窓を嵌め之を猛火炎々の中に曝すことありとするも、其金庫は大燒害を受くるとも窓は依然として存すべし、普通の硝子は熱に逢へば容易に膨脹するが故に破損を招く、然るに石英硝子は全然膨脹することなし、故にその白熱狀態にある時にても水を注がれたる爲に破壞する等の事あるなし、去らば未來の洋燈のホヤには果して如何なる物質が用ひらるべきぞよ、

石英硝子に就いては更に有益の點あり、そは普通の硝子には殆んど全く不透明とせらるゝ極菫色の光線が此石英硝子なば自由に透過し得ることなり、此長所は又此硝子が寫眞器のカメラのレンズの材料としても普通のものに優り、又此助を假りては天文學者も從來よりは更に一層遠距離の觀象を遂ぐるを得べし、左れど唯その價の一段に至つては、そは多分尙ほ暫く非常なる高價を持續すべければ、非常なる抵抗力の要せらるる處にのみ、疑もなく速に普通の硝子に代用せらるゝに至るべきか。



ステッキの話

德富蘇峰

私は久しい前からステッキのコレクションをやつて居る。即ち杖を集めて居る。どういふ動機で杖を集め出したかといふに初めはたゞ偶然に集めたのである。少し集つて見たらだん／＼面白くなつて、ます／＼集めたくなつた。何の爲めに集めるかといへば何の爲めでもない、集むる爲めに集むるのである。けれどもこれが爲めに多少の利益はある、其利益といへば運動をする時は直さに杖屋の前に立つ。旅行でもする時は何處にか珍らしい杖がないかと探して見る。それで杖は丸で自分の自傳（オートバイオグラフヰ）になつて居る。杖は別に何等の演說もせぬが、如何なる場合に得たか、如何なる場所で求めたか、將た又如何なる人から貰つたか、一々說明して

與れるのである。恰度杖のコレクションは昔の人が繩を結んで日記を書いたにも相當する。それに書いたものならば人が讀む恐れがあるが杖はよく秘密を守て與れる。極めて安全である。私共でも生きた時代に日記を書いたら、よし世を騒がす程の大波瀾を起さなくとも、茶呑茶碗に波が立つ位のことはあるかも知れぬ、けれども杖は如何なる場合にも沈默の義務を守る。大變便利である。

それて私の持て居る杖にはいろ〳〵の歴史的のものがある。その中には自分が獨逸て買てそれて歐羅巴を一ぱい廻つたものもある。それをついてトルストイ翁を尋ねたら翁は之を握て之をついて日本から廻つて來たかといはれた。日本から買て來たといへば面白いかも知れぬが嘘をいつてはいかんと思つて獨逸から買て來たといふた。それは殘念な事をした、なぜ日本から持て來なかつたかといはれて成程殘念な事をしたと思ふた事もあつた。

それから最も私の貴重する杖の一つはメキシコて出來た杖て極めて素朴な木に彫物をして居る。時のメキシコ公使杉村君が朝比奈知泉君に送り、朝比奈君が兒玉大將にやつたが(與れたか貸したか)兒玉大將が再び朝比奈君に返して、朝比奈君が私に與れたのてある。即ちこれは兒玉大將の片見である。それは私の持て居る中の最もよい部のものだ。

杖を集めるについては私もなか〳〵苦心をする。東京通信社長五十嵐光彰君が二十七八年役に旅順から持て來たものは支那の天秤棒を杖にしたものだ、それを内閣書記官長鮫島武之助君が持て居た。私はそれを欲しいものと思うて居たが先生にいふのも如何かと思うて控へて居た。處が鮫島君は日本銀行の幹事になつたので。そんな天秤棒のステッキなどを持て行くと門番にとがめられ相だ。それて五十嵐に返してやつた。で私がとう〳〵五十嵐に談判を初め、數度の談判の末、永久貸すといふ條件で貰ひ受けた。私は其れに代ふるに都筑馨六君から送られた櫻の杖を以てした。杖のよしあしは兎も角も、此一本の杖の爲めに前後四年の星霜

を費やした。

ステッキの中で私の一番に好きなのは西洋の所謂 Oak 即ち槲の木である。英國に於て五十錢以内で買た槲の杖も持て居る。私は非常に槲の杖を愛する。嘗て北海道から槲を一束送て貰つたことがある。皮を剝いて杖をこしらへて見たが、思ふ樣に行かんで漸く二本を得た丈であつた。

ステッキにもなか／＼面白いものもある。留岡幸之助君が呉れた中には、ステッキの。中をほつてガラスの管を入れ、之に酒を入れるやうにして居る。ステッキにウヰスキー位は入れて歩ける。酒飲には極めて便利である。又酒の代りに氣付を入れてもよい。高山などに登る時に便利である。私は面白いので之を飾て置く。

ステッキで失敗した話を申すと、或時汽車で池邊吉太郎君と逢て杖の話をしたら、池邊君は英國の Jersey の島に出來たキャベツ（玉菜）のステッキを持て居るから、それをやらうといふ話だ。私は非常に嬉しくつて其晩は碌々眠られぬ位であつた。明くる日に池邊君から手紙が來て、杖をやるといふ約束をしたが、少し事情があつて取消すといふて、其代り詩集を送て呉れた。詩集は有難かつたけれども、どういふ事情があつたのか殘念に思うた。せめて見る丈けでも見たいと思ふ氣がした。しかし其れが爲めに煩惱の心を生じた譯ではないが。貰ふことの出來ぬものはナホ欲しいといふ氣がした。

夫れから私は銀座あたりのカサヤあたりによく行く、どこにどういふものがあるか必らず知て居る。必らず買ふといふ譯ではないが、前を通る時は必らず寄て見る。

今私の處にある杖の數は正確にはいへぬが恐らく二百本の上を超して居ると思ふ。

私の友達が昨年私の處に來て、玄關のステッキを見て、君はエライ防禦をして居るねーといふた。眞面目にいふたのである。私のステッキを愛するといふことを知らぬのである。燒打事件にステッキに護衛させて居

るものと思うたのであらう。若し防禦の點よりいへばステッキは二百本あつても、一挺のピストルに及ばぬ。杖にも大きくても輕いものもある。桐又は葵の乾したものなどはそれである。大きくして輕きこと恰も燈心の如きものである。それでは防禦も六つかしいだらうと思ふ。

ステッキの道樂は刀の道樂に較ぶれば鑑定の興味がない。然し第一は廉價なる點に於て、第二は危險の少い點に於て刀よりも優て居ると思ふ。刀ならば氣まぐれに切ることもあらうが、ステッキは毆る位が關の山である。（完）

清國に於ける民間信仰概觀

本多文雄

一、序言

一、孔孟鄒魯の道、老莊荊楚の學、さては大小權實聖淨頓漸の教の如きは本論の與る所に非ず。本論記述の對象は彼のDragon, Image and Demon. の著者、宣教師ハムプデンが罵て以て妖怪視せし現代清國の民間信仰其者なり。

二、清國は宗教の博覽會場なり。儒教あり佛教あり道教あり喇嘛教あり回教あり耶蘇教あり天主教あり。然れども喇嘛は本部支那の宗教に非ず、漢人の宗教に非ず。蒙古西藏の宗教なり。滿人の宗教なり。回々は本部支那の宗教に非ず。支那人の宗教に非ず。所謂回部地方の宗教なり。所謂回民の宗教あり。耶蘇天主の如きに至ては、外觀の盛は則ち之れあれども、眞個に心靈界の勢力たるに至ては未だし。之を以て本論の記述は喇嘛、回々、耶蘇、天主に涉らず。

三、凡民間信仰なる者と、今日吾人の所謂宗教なる者との主要なる異點は、其統一的性質の有無如何に在り。いづれの宗教にても其教義、儀式、組織の上に多少教權の威嚴を認めて、其下に統一せられざるは莫しと雖も、所謂民間信仰なる者に至ては然らず。宗派な

る一典型の内に約束せらるゝに非ず、教權なる一準繩の下に統一せらるゝに非ず、唯各人個々の想念中に盤据して、其解釋の如きも必ずしも規矩繩墨を以て律せらるゝの窮屈を見ず。此の故に民間信仰に屬する或一個の想念は、時に應じ機に處して、變態せられ異色せられ、千態萬狀多くの異れる模樣を取りて、廣く社會人心の表裏に隱見して來る者なるを以て、之を確實に把握せんとするは頗る難し。之を外形に見て成立宗教の如く爾かく統一的なるには非ず。之れに對すれば如何にも散漫渺茫の思あり。組織なき歴史なき統計なき民間信仰なる者に對して、吾人は先づ其の何處の邊に觀察の眼を向け、以て研究の出立點と爲すべきか。

二、臺灣を透ふして見たる支那の民間信仰（支那人は何を拜むや）

漫に抽象的理論の基本より出立して、却て事實の眞相を逸するの憾あるは、歴世の學者に於て見る所なりとす。予輩が此に現代清國の民間信仰に對して一場の觀察を試みんとする上に於ても、亦た此點に注意を拂はざる可らず。先づ民間信仰が或形體を具へて眼前の事實として現はれたる或者を得て、之を研究の基本事實と爲し、之れに多少の分析、綜合を加へ、其結果として何等かの結論を導き得べしとせば、そは尤も安全なる研究方法なるべし。

予輩は此に研究發程の事實的對象として、寺廟一百を調査したる結果の一部を發表するの適當なるを信ず。

予輩が調査したるは臺灣臺南城内外に於ける一百の寺廟なり。而も予輩の調査は數年前の事に屬す。讀者よ、予輩が此に數年前の陳腐の材料を提げて、事新しく讀者に見えんとするの迂濶を咎むる勿れ。此種の研究に關しては、數年前の調査たると、今年今月今日の調査たるとに依りて、此價値を異にする者には非ず。數年前の調査の結果も、今尚新しき研究の材料として吾人に役立つ。

現今我國の領土内に在りて、而も支那民族に關する

有力なる研究材料としては、臺灣は正しく其最なる者なり。殊に臺南府は開臺以來の都城たりしだけありて、流石宏壯なる建築物に富み、從つて宗教的故址の頗る參考に供すべき者多し。臺灣は少くとも福建、廣東の縮圖なり。福建、廣東は少くも支那本部の縮圖なり。予輩が本項に於て、一臺灣を透ふして支那民族の心靈界を窺はんとするは、さまで無謀の擧にも非らじ。

支那民族心靈界の一小縮圖として、臺南府は吾人に告ぐるに次下の事を以てす。」

禮拜の性質、	其名稱、	寺廟の名稱、
イ、日月星宿風雨雷霆に關する者	北極祐聖眞君 風神 三官大帝 玉皇上帝、雷公 玄天上帝 七星娘々 風雲雷雨山川諸神	元帝廟 風神廟 三界壇、三官廟 天壇、玉皇宮 靈佑宮 開隆宮 風雲雷雨山川壇
	海神 龍神 媽祖(天上聖母)	海神廟 龍王廟 天后宮、小天后宮
ロ、水に關する者	禹、伍子胥、屈原、王勃、李白	海安宮、媽祖廟 温陵祖廟、 水仙宮
ハ、火に關する者	南極大帝(火神)	火神廟
ニ、山嶽に關する者	東嶽大帝 巾山神、明山神 獨山神	嶽帝廟 三山國王廟
ホ、國家都城の鎭護に關する者	社神、稷神 城隍爺 關帝	社稷壇 城隍廟 關帝廟(武廟)
ヘ、武事に關する者	靖海侯施琅 鄭成功 李哪吒(唐武將)	施將軍祠 延平郡王祠 毘沙宮
	此種の廟多けれども他は略す	
ト、文事に關する者	孔子 朱子 文昌上帝 呂祖	孔子廟(文廟) 朱文公祠 文昌閣、文昌祠 魁星堂
チ、現世未來の福利に關する者	觀音 三寶佛 釋迦	淸水寺、觀音亭 大士殿、慈雲閣 彌陀寺 法華寺

る者

	福德爺 五福大帝	福德祠 白龍庵
リ、疾病、醫藥に關する者	純陽呂祖	呂祖廟
	保生大帝	開仙宮、眞阜宮、興濟宮、
	郭聖王	西羅殿
ヌ、出產、育兒に關する者	臨水夫人	臨水夫人廟
ル、死人に關する者	無祿亡者	郡厲壇
ヲ、農事に關する者	先農神 芒神	先農壇 田祖廟
ワ、權威勳功に關する者	靖海侯を始め清朝の功臣殊に多し	五忠祠、忠義孝悌祠等
カ、德行に關する者	烈女節婦孝子	烈女節婦祠、精忠祠、西來庵等
ヨ、祖先に關する者	祖先に關する塑像木碑	家廟と稱する者、其數極めて多し

大略右の如し、以上は極めて疎漫なる分類なれども、如何なる者が支那民族の信仰對象たるかを知るに於ては十分の便宜あるべし。尙以上の禮拜物即ち本尊の外に多數の附屬的禮拜物即ちお脇立ちとも稱すべき者ありて、いづれも其れ〲の信仰を博し居れり。今其主要なる者を擧ぐれば左の如し

イ、孔子を本尊とせる文廟の副禮拜物

四配（顏子、子思、曾子、孟子）

十二哲（閔損、冉雍、端木賜、仲由、卜商、冉耕、宰予、有若、冉求、言偃、顓孫師、朱熹）

先賢先儒百二十三位

ロ、鄭成功を本尊とせる延平郡王祠の副禮拜物

田川氏、寧靖王及五妃、鄭克壓及夫人陳氏、殉難將士一百十三人

ハ、城隍爺を本尊とせる城隍廟の副禮拜物

文武判官、臨水夫人、七星娘々、土地神、速報司爺、註生娘々、知府將元帥像、觀音、十八羅漢、地藏尊、

ニ、關帝を本尊とせる武廟の副禮拜物

周倉、關平、裕昌王（關羽曾祖父）、光照王（仝祖父）成忠王（仝父）、觀音、十八羅漢、三官大帝、伽藍神、達磨、

ホ、三寶佛を本尊とせる彌陀寺の副禮拜物

保生大帝、三官大帝、觀音、十八羅漢、關帝、達磨、哼將軍、哈將軍、監將神、閻羅天子、註生娘々、註死娘々、

へ、釋迦を本尊とせる法華寺の副禮拜物

觀音、阿難、迦葉、監齋神、達磨、八菩薩、彌勒、四大金剛、十八羅漢、文衡聖帝、南極大帝、

ト、東嶽大帝を本尊とせる嶽帝廟の副禮拜物

彭祖、甘羅爺、韓德、廣濟、牛頭將軍、馬頭將軍、功德司爺、護國尊王、天醫眞人、速報司爺、痘疹公、福德爺、地藏尊、月老公、註生娘々、觀音、

チ、玉皇上帝を本尊とせる天壇の副禮拜物

普化天尊(雷神)、北斗星君、南斗星君、天醫眞人、司命灶君(竈神)、天師爺、王靈天君、虎公、

リ、釋迦、藥師、彌陀、觀音を本尊とせる開元寺の副禮拜物

十八羅漢、達磨、三界公、玉皇上帝、護法神、彌勒、四大金剛、註生娘々、十二婆、把門大將、地藏尊、王谷王、

右の崇拜物は獨り臺灣の一隅に於てのみ勢力あるには非らず、予輩が南清及北清に於ける經驗もまた其然るを證す。唯鄭成功の臺灣に於ける、保生大帝、臨水夫人の福建に於ける、三山國王の廣東潮州に於けるが如き特殊なる地方的關係よりする崇拜の場合は此限りに非る事勿論なり。予輩は現代清國の民間信仰研究者として有名なる宣教師ハムプデン氏が其著『三教問答』の中に列擧せる崇拜物の名稱を此に引用して、支那民族の信仰對象に關する讀者の概念を今一層明白にする事の必要を感ず。

一、佛教系統の崇拜物(其主要なる者のみを擧ぐ)

釋迦
觀音
阿彌陀
閻羅
地藏

二、儒教系統の崇拜物

天　太陽　月亮　魁星　雷祖　電母(霍閃娘々)
風雨師　山川
孔子
關帝
文昌　天聾、地啞
祖先
龍王、門神
城隍

三、道教系統の崇拜物

三清（元始天尊／靈寶天尊／太上老君）
玉皇上帝（宇宙の主宰）
斗　姆（北極星）
紫微星
福祿壽三星
六十花甲子
吉星、凶星
七十二司
十三部
芒　神（農神）
財　神
灶　君／東　嶽（生死の神）
三　官（天地水）
天上聖母（天后―海の神）
火烈大帝（南極星―火の神）
瘟將軍（疫病の神）
魯　班（木工の神）
賭　神（賭博の神）
五　聖（色慾に關する神）
馬王、牛王、蛇王、瘟瘋大王、虫王、蝎子王　蝗虫娘々、霧花娘々、
床公、床婆、金神、銀神、針神
茶神、煙神、藥王、
純陽呂祖（醫神）
華　陀（仝前）
眼目司（目の神）
痲痘神、痘花司

吾人よりして之を見るに、卑近なる多神教、及汎神教的思想の癮浸を被りし彼等人民は、目の觀る所、耳の聞く所、手の觸るゝ所、情の馳する所、四方八面に崇拜物を構成して獨り自ら悅ぶ者の如し。試に彼等の祠廟に入れば、如何に雜多の玩弄的崇拜物が處狹きまで陳列せられたる事よ。試に坊間に行る彼等の宗教書を繙けば、如何にも知られぬ神佛の名稱が、見目狂はしきまで羅列せられたる事よ。彼等の信仰觀念が依て以て寓托せらるゝ所の者は雲の如く簇り、雨の如く繁げしと雖も、要するにおもちや箱の轉倒せられたる

の觀。予輩は一々此等の者に係はりて、途上に路草を食ふの遑なければ、本項の記述は此邊にて筆を擱かざるを得ず。

三、信仰狀態の不統一

崇拜物に其れ〳〵の屬性あり。或者は山を管し、或者は海を管し、天文を管し、地文を管し、人事を管す。かくして崇拜物の各自に一往は分業的司職あり。從ふて各特殊の性質を具備するが如く見ゆれども、實は大に然らざる場合多し。即ち崇拜物の或者は他の多數の崇拜物に屬せる他の多數の司職をも兼管併有せるが如き場合もあり。又た或者は天地人三才に於ける百般の事物を統括し、一切處に於て、一切時に於て、一切事物に於て管せざるが如き場合もあり。又た或者は崇拜者の信仰狀態の如何に依りて各其れに順適すべく異れる性質司職を取るに至るが如き場合もあり。之を例せば城隍の司職とする處は偏に都城郡邑の鎭護に在れども、更に又た商賈繁昌、無病息災、立身出世などの擁護にも任ずる事あるが如き、或は彌陀佛、釋迦佛、玉皇上帝、關帝等が幽界の萬能君主たる性質を持して、神的王國を指揮統御するの結果、彼等の職權が一として人間百般の事項に係らざる莫きが如き、或は觀音菩薩は現世的福利の保全者として拜すれば以て其要求にも應ずべく、來世的得脫の指導者として拜すれば以て其註文にも副はるべく、如何なる請要、希望に對しても、請要者希望者の意のまに〳〵、適應せる對象と成り得るが如し。此の故に甲なる崇拜物は時に乙なる崇拜物の司職を犯し、丙なる崇拜物は時に丁なる崇拜物の屬性を盜むといふ如き有樣なれば、崇拜物の性質を截然として規定するは頗る難し。されば予輩が前陳せし崇拜物の性質的類別の如きも素より一往の配當たるに過ぎず。是れ實に崇拜者其人の信仰狀態が未だ圓熟統一の境に至らずして、動き易く移り易き者あつて存するに依らずんばあらず。要言すれば彼等の信仰觀念が明確と統一とを缺ける證據に非ずや。而して內に明確と統一とを缺ける信仰觀念は、外に投影せられて雜多の崇拜物となりし者なるが故に、彼等の崇拜物が明瞭な

る個性を有せざるは素より其處なり。

此の如き怪物的崇拜物が雜然として壇上壇下に立ち、あのもく〳〵其顧客を呼びつゝある支那寺廟の奇觀はいかばかりぞや。怪物的崇拜物の雜合より成れる支那寺廟は更に大なる一種の怪物たり。

宣教師ジョンストン氏曰く

人、佛寺もしくは道觀(道教寺院)に到るとせんに、明かに其佛寺たるか道觀たるかを敎へられざる限りは、其孰れに屬するかを判別する事能はざるべし。其孰れに於ても、まづ賽人の眼前に立てる三大塑像あり。佛に在ては三尊と名け、道に在ては三清といふ。いづれも其周圍には數多き偶像並び立てり。時には五百の多きを算す。香煙漂渺、諷誦喃々、一群の沙門道士が執行せる修法の樣の業々しきなど、いづれも同樣なり。釋迦も老子も此樣を見ては、我が眞諦を失へりと做して似而非(えせ)信徒の偶像いぢりを憎しとや思ひ給はん

(China and Formosa 六〇頁)

此評決して誣言に非ず。正しく支那寺廟の實況なると同時にまた其信仰狀態の眞相なり。

予輩をして一層之を確かむる爲めに、前項に記述せし副禮拜物の條下を回顧せしめよ。而して讀者は其の八、ニ、ホ、ヘ、ト、チ、リ、の內に於て、隨意に其一つを取り來て一考せば、思半ばに過ぐる者有らん。誠にこの場合即ち關帝を本尊とせる武廟に就て見るに

關帝 裕昌王
周倉 光照王
關平 成忠王 } 儒敎系統崇拜物

觀音 十八羅漢
伽藍神 達磨 } 佛敎系統崇拜物

三官大帝……………道敎系統崇拜物

かくの如く異種、異質、異系の崇拜物は一建築物の下に遠慮なく陳列せらるゝこと勸工場の賣品に異らず。而して買手たる崇拜者は同一なる信仰觀念を捧げて關帝に往き觀音に往きはた三官大帝に往く。かくして個の無頓着なる崇拜者の前には關帝も觀音も三官大帝も同種、同質、同系の者と成り了る。是れ實に宗敎的

動を感受する所の彼等の信仰神經が未成、半熟、もしくは痳痺の狀態に在りて完全、健康ならざるの依て致す處なり。

以上の如き信仰對象の散漫、及び信仰狀態の混雜は、統一ある宗教思想に養成せられたる者の到底忍び得る處に非ず。今之を我國眞宗一派の寺院に見るに、本尊阿彌陀佛の外に宗祖、七高僧、聖德太子、法主、寺主の塑像、畫像などありて、門外漢又たは木佛畫像を見るに馴れざる耶蘇敎徒等の眼には隨分業々しく映ずれども、其壇上に奉安せられたる崇拜物に、一種の離るべからざる系統、條理ありて其間自ら井然たる者あり。之れに對向する信徒の信仰狀態にも又た自ら一種の離るべからざる系統、條理ありて、些の散漫と混雜とをも許さず。眞宗の敎義は最も能く眞宗の崇拜物を說明し、眞宗の崇拜物は最も能く眞宗信徒の信仰狀態を反映す。

眞宗の如き統一ある崇拜物、及び其信仰狀態よりして、翻て散漫、混雜、浮動、含糊、彼れが如き支那民間信仰の崇拜物及び其信仰狀態に想到すれば、奇はます〳〵奇、怪はいよ〳〵怪なるを覺ゆ。

要するに彼等の間には唯渾沌たる所謂民間信仰の幻象を認め得べしと雖も、統一ある宗敎的信念に至ては、其片影だも留めざる者といふも可なり。

四、民間信仰の內容を論ず
（『太上感應篇』の敎義）

他方來の者は所謂土地子なる者と懇親を結ぶを以て自家に便利多き手段と爲し、其所謂土地子なる者も、他方來の者の才能と威嚴とに怯ぢて之を疎外するの却て自家に不利なるを知り、此に相互の提携は成る。提携既に成る、日を經、年を歷るに從つて彼我終に渾然として一鄉黨の人たり。かくして儒釋道の提携は成り、かくして儒釋道の混同は起り、爾來三敎一致は唐代以後現代淸朝に至るまで、支那の思想界を一串せる勢力なりき。道冠儒履佛袈裟（傅大士）の如き、道意修一身、功德被萬物、爲賢爲大聖、是名佛菩薩、（司馬溫公禪偈）の如き、以佛治心、以道治身、以儒治世、（宋孝

宗帝御製原道辨）の如き、儒療皮膚、道療血脈、佛療骨髓、（無盡居士護法論）の如き、佛日也、道月也、儒五星也（李士謙）の如き、甚しきは老子尹喜、欲化胡成佛、遂變身爲釋迦文殊、而後胡人受化也、と說く王浮の胡化經の如き者すらあり。明に劉學士あり、三教平心論を作て其卷初に曰く

儒敎在中國、使綱常以正人倫以明禮樂、刑政四達、不悖天地、萬物以位以育、其有功於天下也大矣、故秦皇欲去儒而儒終不可去、道敎在中國、使人淸虛以自守、卑弱以自持、一洗紛紜轇轕之習、而歸於靜寂無爲之境、其有稗於世敎也至矣、故梁武帝欲除道而道終不可除、佛敎在中國、使人棄華而就實、背僞而歸眞、由力行而造安行、由自利而至於利他、其爲生民之所依歸者、無以加矣、故三武之君、欲滅佛而佛終不可滅。

淸に世宗帝あり、雍正十一年二月十五日、三敎一致の詔勅を發し廣く天下に諭して朕惟、三敎之覺民於海內也、理同出於一原、道並行而不悖と說けり。

此の如き思潮が流れて民間の信仰と成り、下て民間の道德と爲るに及んでは、果然『太上感應篇』一流の思想を蘊釀せずんばあらず。

『太上感應篇』は何時の頃何人に依て作られたるかは、未だ考證せざるも、其相當に古き以前より世に流行せるは、古今其註釋書を作りし者の頗る多數なるの一事に徵して知り得べし。而もそは現代民間信仰に於ける無二の聖典として、恐くは四書五經以上に多くの讀者と信徒とを有するなるべし。感應篇は素と道家者流の手に出てし者ならんかと思はるれど、一篇の趣意は全く儒釋道三者の秩序なき雜採より成れり。現代淸國の民間信仰の內容は、約し得て悉く此の俗的聖書の中に含れたり。『感應篇』はまづ其劈頭に於て一篇の綱領因果禍福の說を提げて曰く

禍福無門、惟人自召、善惡之報、如影隨形、

次に多神觀の見地よりして天地神明の監察を說きて曰く

又有三台北斗神君、在人頭上、錄人罪惡、奪其紀算、

又有三尸神、在人身中、毎到庚申日、輙上詣天曹、言人罪過、月晦之日、竈神亦然、

次に善行と其報酬とを說きて

是道則進、非道則退、不履邪徑、不欺暗室、積德累功、慈心於物、忠孝友悌、正己化人、矜孤恤寡、敬老懷幼、昆蟲草木、猶不可傷、

と言ひ、一千三百善を立つる者は以て天仙たり得べく、三百善を立つる者は以て地仙たり得べしと爲せり。次に惡行の種類を羅列する最も詳密、大は人天に對する背戾的罪惡より小は魚介器物に對する惡意的行爲に至るまで一網打盡して餘す事なく、更に轉じて其應報の恐るべきを說きて

司命隨其輕重、奪其紀算、算盡即死、死有餘責、殃及子孫、

と爲せり。次ぎに全篇の歸結として左の語あり

夫心起於善、善雖未爲、而吉神已隨之、或心起於惡、惡雖未爲、而凶神已隨之、其有曾行惡事、後自改悔、諸惡莫作、衆善奉行、久久必獲吉慶、所謂轉禍爲福也、故吉人、語善視善行善、一日有三善、三年天必降之福、凶人語惡視惡行惡、一日有三惡、三年天必降之禍、胡不勉而行之、

以上の全文は僅かに一千二百七十七字より成り、文章平易、暗誦に便なるが爲め、多く四字一句の句章を用ゆ。其惡行を羅列する邊りは文字健勁にして字々飛躍し、一讀覺へず肺腑を衝くの感あり。但し其の說く處卑近なる通俗的道德に止り、其の言ふ處往々にして荒唐不稽に流るゝは、そが民間信仰の產物たるが故なり。

今茲に感應篇一篇の內容を歸約し、其の由て來りし系統を案ずるに、予輩の見る所を以てせば

一、佛敎系因果說
二、道敎系宇宙觀
三、儒敎系現世道德

の三者に外ならざるが如し。是れ實に感應篇一部の內容なると同時に、又支那現代の民間信仰の內容なりとす。凡萬法生起の原則たる因果法に於ける抽象的、理

致的、哲學的說明は佛教其者の特色なり。宇宙に對する人格的、具體的、神話的觀察は道教其者の精髓なり。道德に對する現世的、實踐的、常識的鼓吹は儒教其者の生命なり。感應篇の教訓は兎にも角にも此三者の錯綜より成り、以て民間信仰の中軸を爲せり。之を以て現代支那の民間信仰なる者を、道德としての方面より觀察すれば、そは佛教的因果說に著色するに道教的宇宙觀を以てし、其根底の上に儒教的道德を建設せんとするに在り。

然れども所謂民間信仰なる者が、既に正當なる思辨の領域を離れたる墮落的思想を意味する以上は、予輩は更に進んで此等の三教系の思想が民間信仰の中に入て、如何樣なる墮落的狀態を取りしやを吟味せざるべからず。

因果の理法と神明の賞罰とは元來別樣の意義を有す。之を喩ふれば因果の理法なる者は物品を受領すべき權能ある金錢に比し得べく、賞罰の天意なる者は、金錢に應じて物品を交附する店主の意志にも似たらんか、此場合に於て吾人は唯金錢其物の物品を受領すべき權能に信賴して店主の果して物品を交附するや否やを顧慮するの要なきなり。而も民間信仰は金錢の權能に信賴するよりも寧ろ店主の意向を顧慮するに重きを置く者なり。即ち民間信仰に在ては常に因果なる者を以て賞罰と同意義と解せんとするの傾あるを以て、自己に屬する權能に信賴するの情は、一變して一向他に向て其好意を望求するの念と爲らざるを得ず。是れ實に因果說の墮落的狀態にして、因果說が民間信仰の中に腐蝕して、却て佞神佞佛の風を馴致せし所以に非るなきか。

更に又た何事に就ても報酬要求の念に富める彼等人民は、神佛に對しても亦然り。彼等は信仰の報酬として眼前の福利を求め、一言一行の信仰的態度にも、必ずや其後へには報酬の要求附隨し來る。「有求必應」とは彼等が神佛を讃ゆる常套語にして、此語尤も能く此情を現はす者といふべし、是れまた腐敗的因果說が彼等の心靈上に及ぼせし惡感化の一なり。

道教の宇宙觀に至りては秩序なき多神觀なり。似て非なる物活觀(ヒロゾイズム)なり。野卑千萬なる目的觀(テレオロジー)なり。宇宙は全然神怪を以て覆はれ盡せり。民間信仰に於ける荒唐奇怪の思想が最も多く其系統を道教に引けるは、殆と議論を要せざるまでに明白の事實にして、泰西の批評家が道教の信仰を目するに魔族崇拜なる語を以てするは蓋し故なきに非るなり。今之を感應篇の中に就て見るに、三臺北斗神といひ、三尸神といひ、惡星といひ、竈神といひ、天仙といひ、地仙といひ、其惡行を數へては、埋蠱厭人といひ、呵風罵雨といひ、晦臘歌舞といひ、朔旦怒號といひ、對北涕唾といひ、唾流星といひ、指虹霓といひ、指三光といひ、久指日月といひ、對北惡罵といひ、殺龜打蛇といふが如き總て系統を道教に引きし信仰にして、而かも此の如き宇宙觀の結果は宇宙を以て恐怖の對象たらしむる外何等の効なきなり。之を以て彼等は其れに向ふて信頼と感謝の情を捧ぐるに非ずして、常に其譴怒に觸れん事を是れ恐れ、一に阿諛的態度を以て信仰の貢物を呈しつゝあるに似たり。即ち是れ民間宗教の信仰が一の滿足、安靜の狀態を有せずして、常に動搖、諛媚、甚しきは欺騙(崇拜物に對して)の傾向すらある所以なり。

儒教的現世主義の惡感化は高遠なる宗教的理想の驅除是れなり。現代の淸國に釋迦出て基督出て老莊出て、彼等人民に告ぐるに「涅槃の妙境」「永遠の生活」「還元歸本」「高義に於ける長生不死」を與ふべきを以てするも、彼等は頭を掉つて辭し去るべし。彼等は却て言はん、我等の欲する所は百年三萬六千日の間に於ける長生のみ、無病のみ、功名のみ、富貴のみ、子孫繁榮のみと。一言すれば其理想は全然物質的にして、野卑なる快樂說(ヘドニズム)の範疇を出でず。支那內地に入りて彼等人民の日常生活を觀聞せしまじめなる旅行者は、歸來其國人に告げて曰く、「支那人に宗教なし、彼等は總て物質論者なり、無神論者なり」と。『支那及臺灣』の著者ジョンストン氏之を解して曰く「然り、唯其れ最も疎大なる迷信は最も疎大なる物質主義なり」と。是れ即ち彼等が神仙佛爺の重圍中に在て、日夕宗教的動作に

取り作ら、其理想の淺薄にして殆ど物質的快樂の外精神的生活の何たるを解するの能力を缺き、現實を超越したる絶對境に逍遙するの趣味を有し得ざる證左ならずや。そも〳〵また儒教の現世的教訓が彼等の宗教的理想を控制して、高大深遠、世と相距る百千由旬の際に優游するの氣魄を銷耗せしめ、徒らに人生百年の間に跼蹐せしめし罪に因由するに非ずや。之を要するに支那現代の民間信仰は、異系異種の濁血汚精を以て混成せられたる雜種的畸形兒なり。從て此畸形兒的信仰の依て以て寓托する幾多の崇拜物も畢竟するに鵺的なり。其性質及由來の比較的明了なるべき道教系の玉皇上帝、儒教系の關帝、文昌、及佛教系の彌陀、觀音の如きに於てすら、尙且つ相互に混雜淫浸して本來の面目を失ひ、滔々相率ゐて凡情俗意の玩弄に上れり。此に一篇の結語として宣教師ドーリットル氏の語を引用せんか。

讀者よ、諸君もし支那の民間に於て珍重せられつゝある無義、無用の説及び迷信的奇習の如きは、既に見るに倦み、聞くに飽けりと爲し給はゞ、更に一考を煩し度き事こそあれ。そも〳〵支那人民は古今二千年の久しき、孔孟二子の經典及釋老二氏の教の爲に拿へられて其楚囚たりしなり。むべなり今日禹域の全土に謬說臆說迷信の累々たるや。之を以て今日其國民に取りての最大急務は、淸新自由なる一道の勢力を輸入して、以て灯明となし以て規範と爲すに在り。そはバイブルなり。

（Social life of the Chinese 序文）

バイブルが果して能く支那現代の民間信仰の中に在て淸涼劑たり得るや否やは別問題として、佛教徒の見地より見るに聊か面憎き言ひ分なれども、淸新穩健なる一道の勢力を輸入して人心の防腐劑たらしむる必要は、何人も齊しく認むる處なるべし。

（完）

通信 ニユーヨーク知事選擧の夕

戸川秋骨

御送附の中央公論正に入手仕候多忙にて未だ閲讀不致候が其内太西洋を横斷致し机上の讀ものと致度くたのしみに致し居候當ニユーヨークにはすでに二十日ほどとまり居候色々目新らしき事に接し候が何れも俗塵中の尤も俗塵を被れる事物のみなれば何も申上べき事もなく候只昨夜ニユーヨーク州知事の選擧に關する騷ぎは中々愛嬌あるもの故一寸申上候

當州の知事候補者はレパブリカンの Hughes とデモクラットの Hearst にて小生の當市へ到着の頃より競爭激甚を極め居り候ひしがいよ〳〵昨日が選擧の當日にて市中は一斑に此の日を休日（ホーリデー）として日曜日同樣商賣をやめ酒屋も店を閉ぢ居候ひしが（但し酒屋の店を閉づるのは裏口より入れるからて實際は開店致し居候事と存候）夕方散歩に出で候處町の角々に喇叭を吹き澤山の喇叭と羽根のさいはいの樣なものを賣り居候なほ或る店には千代紙を小さく切りこま裂きし樣なものを山の樣に積み居候ひしが何のためとも少しも了解出來ず異樣に感じ居候ひき尤も喇叭は選擧の確定致し候時各吹き立てるものと察しられ候ひしが羽根のさいはい、千代紙の屑の如きは何とも想像致しかね候やがて四角（スクエア）(square)に參り候處選擧の運動者は運動の手段として活動寫眞を公衆に見せ居候小生も馬鹿な顏してそれを見て居候處後ろよりさい前の喇叭を小生の耳の處へあてゝブーと〳〵吹き立てしもの有之候驚きてふりかへり候處二三人の小娘どもがキヤッ〳〵笑つて逃げ行き候暫らくする内だん〳〵人がふえ互に長い喇叭を知らぬ人の耳にあてブー〳〵とやらかし候小生も其後幾度かやられ候が此れは十二三の小娘も四五十のシルクハット連も等しくやらかすので至極滑稽に又無邪氣なものに候ホテルに引きかへし暫らくして外がさはがしく候故再び街に出んと思ひ出入口を出て候處、コハ如何に街上は人の山にて到底小生等の如き

田舎ものには出られず丁度東郷大将歡迎の時のやうに人波をうち居候が、此の連中は皆手に〳〵例のラッパを持ちブー〳〵とならし歩き候此の時初めて宵に見た羽根のサイハイの所謂が分り候女も男も此のサイハイを持ちて他人の顔をなでまはすのに候お花見かお正月のやうに「お目出たう」といつたやうに羽根を以て他人をクスグルのに候。ホテルの入口に立つて見て居り候と小生の前に三四人組をなしたる男が立ち居り此れが通る婦人にからかひ時には手を持つて引つぱり込み候すると婦人はキャー〳〵と叫びながら逃げて行く引つぱる押しかへす實に大さはぎに候中には女の方から例のサイハイでからかう男の顔や咽喉をくすぐり人込の中ににげ込むのもあり、ワッハッハ……、オッホッホ、……、ヘッヘッヘ……、キャー〳〵、ヒッヒッヒ……と云ふ笑ひ聲は喇叭其他の聲と和して騷がしき事驚くばかり、忽ち花の雪のやうなものが降り下り候此れ則ち前に見たる千代紙の屑に有之候則ちかれ等は又此の綺麗な紙片を他人にあびせかけて笑ふのに候、平日眞面目な男、殊に女はイヤにすまして居り候が此夜に限りてかれ等は思ふ存分ふざけ散らし候其光景見て居りてもあまり心持わろからず候、何時まで見て居ても果てしなければ引きかへしホテルの内に入り酒場に入り候處此處にも群集ありて、此れはホテルの男が黒板に選擧に關する各地よりの報告を書くのを見て居るのに候暫らくして十時過ぎになり候と一齊に歡聲が起る、多分選擧の結果が分明したのと思ひ黒板の方に參りてながめ候と

Hughes Elected
Buletin closed

と有之候果してレパブリカンの勝利に歸し候事に屬しスルト忽ち二三人が小生を取りまき候は恰もアービングのリプヴアン、ウインクルが山から下りて來て選擧場に顯れ貴樣は何黨だと問はれる時の光景に有之候ひき、尤もかれ等は意外にも余に向つて「萬歲」と申候余も何となくけしきばみ候間思はず「萬歲」と叫び候萬歲の語は實に到る處にて耳に致し候が又々此の選擧場裡

に於てきく事になり候此の語は最早世界の言葉となり候と申すべきか、かれ等二三人と何だかわけの分からぬ事を話して居り候時又横合より一人の紳士顯れ片手に小生の手をとり片手に小生の肩をおさへ此れも萬歳と申候小生も先方の背をたゝきて萬歳と申候實に何の事やら分り不申候へども勝負と云ふものは兎角勢のつくものにて、小生も知らぬ國の知らぬ選擧を一處になつてさはぎ申候愚圖〱して居ると酒豪の方に引つぱられさうになり候故良い加減にして人込の中に入つて仕まひ候、こんな有樣でかれ等は殆んど徹夜を致し候事と存じ候今朝早く街上に出て見れば昨夜の名殘なるラッパのこはれ、羽根のちぎれ例の千代紙の屑、所謂落花狼藉の體にて散り居り候、それを掃除人が寒風に吹かれながらはきよせ居り候處を昨日ふざけたらしき婦人が例の通りイヤニスマシて行く光景頗る異樣に感ぜられ候

列國議院會議

竹越與三郎

此頃列國議院會議に出席すると云ふ事に就て、我上下兩院の間に確執がある樣に見受けるが、若し果して然らば實に遺憾の事と謂はねばならぬ。元來列國議院會議なるものは、列國の間の平和を計る事を主とするものである。然るに其平和を主とする會議に出席することが、我上下兩院の間に確執の本となると云ふことでは、最早平和と云ふ事が、其歩み出しから壞されて居るのであつて、甚だ遺憾と云はねばならぬ。余は上下兩院が互ひに和協して、若し旅費を國庫より出す事が惡いと云ふならば止すがよし、又是とするならば、互ひに和協し握手して出席する樣にしたいと思ふのである。兎に角予は旅費問題に就ては餘り多く重きを置かぬのであつて、成べく上下兩院の和協せん事を望むに外ならんのであるが、併し此列國議院會議なるものは予が初めての出席者であるが故に、其經過の大略を

陳述して、大方の參考に供し、又之に就て種々間違つた考を持つて居る人がある樣であるから、其誤謬を正したいと思ふ。

抑々列國會議なるものは、其初めは志士仁人の集會に過ぎぬので、今日の如き勢力は無く、初めて會した時は、或は狂氣染みた人々で、一種の夢想を描いて居る連中であるなどゝ攻擊を受けた位である。然るに今日は最早其第十四次會を開く樣になつて、年々歲々勢力を增加して、二三年前に露西亞の皇帝が發起となつて、萬國平和會議なるものを催した事があるが、此平和會議なるものは、其實列國議院會議が刺激した結果であつたのである。斯の如きものであるから、今日は國際間の一大道德上の勢力、更に仔細に觀察すれば、政治上の大勢力となりつゝあるので、決して之を等閑に看過する譯には行かぬのである。此會議が如何にして今日の如き勢力を得たかと云ふに、其論ずる所が列國の平和を計り、人道を重んずると云ふ事が、實に高尙偉大なる問題であつて、列國の志士仁人の心が是が爲め燃立つ程の力があるのと、又も一つは、列國が互ひに平和を重んずると云ふ名義を得たいが爲め、即ち志士仁人の決心と、列國の政略と相合して、此會をして盛んならしめたのであるが、如何なる理由であるか。從來は日本へ招待を遣こさずして來つたのであるが、今年は幸にも我同盟國なる英國に於て開會せらるゝと云ふ事であるので、我倫敦の大使館を經て、日本帝國議會に加入を勸める事となつたのである。然る所此會議に日本から出席する程の遑がないので、唯斯の如き會を開くが、日本帝國議會の加入を望むけれども、本國へ照會して返事を取る暇のない事を甚だ遺憾に思ふが、若し帝國議會の議員にして歐羅巴に居る人があるならば、出席する樣に計らつて吳れぬかと云ふ事を申込んだのである。幸に予は其時倫敦に在留して居つたので、代理公使陸奧伯から「斯の如き照會が來て居るから出席しては何うか」と云ふ照會を受けて、而して出席する事となつたのである。併ながら予は一個の議員であつて、議院全體を代表するものでないから、斯

う云ふ事は後日間違ひがあつては面白くないから、自分は唯一個の議員に過ぎぬ、出席するも唯自分だけの出席に止まると云ふ事を明白に大使館から先方へ通告して貰ひたいと云ふ事を云ひ、而して陸奥代理大使より、此旨を先方へ通告して置いたのである。

而して此會議は七月の廿三日より始まつて、廿五日迄續いたのであるが、予が出席すると云ふことを、會頭ウエヤデール卿に通告した處が、「ウエストミンスター宮まで來て呉れろ」と云ふことであるから、予は時間を違へず參つた所がウエヤデール卿はウエストミンスター宮の入口の石階の上に立つて、予を待つて居て呉れて、予の顔を見るや否や挨拶する間もなく、手を取つて奥へと進んで、列國議院會議の委員室へと導かれたのであつた。此委員室は皐宮陛下が貴族院へ臨席せらるゝ時、衣服を更へらるゝ更衣殿であつて、其更衣殿を委員會に使はせると云ふ事は、既に英吉利の政府が、如何に列國議院會議に重きを置いて居るかと云ふ事を示すに足るべき大なる事實であるだらうと思ふ。此委員會を初めとして、會議は總て佛語を用ゆるのであつて、此委員會は各國の委員が集まつて居る所て、委員以外の者を入れぬ所であつたが、予は絶東の珍客であるから、委員ならざるも此委員會に居つて議事を傍聽する事を許されたのである。さて此委員會議も略々終つて、本會議へと臨んだ。本會議のある所は宮殿中のローヤルギャレリーと云ふ所で、貴族院に陛下が臨席せらるゝ時、通御ある大きな室であつて、其室は左はネルソンがトラフアルガアの戰に討死する所を壁に書き、右はウエルリントンがウオーターローの戰に打勝つて、獨將ブルッケルと握手する圖を壁に書いてあつて、英吉利の凱旋に就ての名譽の歴史を書いたものである。此繪は凡そ幾百年の間英佛の間に惡感情を流し、又幾十萬人の血を流して出來た繪であるが、此繪の間に於て世界の平和を重んずると云ふ列國議院會議が開會せらるゝと云ふことは、實に歴史的の大事實と謂はねばならんと、皆々が大に感動を起したのであつたが、此室に入つて、會頭ウエヤデール卿が私の

名を呼んで、斯の如き紳士が日本から來て臨席するのであると云ふことを報告した時は、滿場殆ど總立てあつて、非常なる勢を以て拍手喝采し、或者は予の近傍まで來て予を取卷いて握手し、名刺を求むると云ふことて、如何に彼等が、戰捷の外餘り解せられて居らざる日本より、其一議員を送つたと云ふ事に就て感動を起したかゞ、之に因てトさるゝのであつた。而して尙ほ一種の忘るゝことの出來ぬ事は、予の直ぐ前には日露戰爭の時、露西亞の遞信大臣として西伯利亞鐵道を巧に運轉して、苦しい中から兵隊と糧食を滿洲に送つて、兎に角彼れだけの戰爭をせしめたのは、クロパトキン以上の働きであると謂はれたキルコフ公が、直ぐ前に居つたのである。又其左右には露西亞のデューマの議員たるアラジン及びパーッマバルブスキー又「政黨及び議員と」云ふ著述を以て有名なるヲストルゴルキー、及びバシフールなどゝ云ふ名家が並んで居つたので、自分の右の方には佛蘭の前大藏大臣カイヨー有名なるデロンクル。バロン、デスクネール、ドコンスタン等の居つた事で、昨日迄は互ひに敵と思ふた人々が、今日一堂に會して居ると云ふ事は、單り自分のみならず、其處に集會した者の總ての心に起つた感動であつたらしかつた。

扨て會頭ウエヤデール卿、此人は元とスタンホープと云つた人て、多年英吉利に盡した爲め貴族になつた人てある。此人の演說が終るや、英吉利の總理大臣カメルバンナーマンが一場の演說を以て議員を歡迎した。其歡迎演說は、唯一個の政治家としての歡迎に非ず、英吉利の總理大臣としての演說であつて、予は陛下の名に依て此に諸君を歡迎すると云ふ句を其中に附加へたが爲め、非常なる感動を議員に生ぜしめた。又其内に露西亞の議員が居られるが、露西亞の議員は不幸にして解散せられた。露西亞議會は死せり併ながら露西亞議會は萬歲であると云ふ言葉を述べた。是は佛蘭西の路易十四世が死んだ時、或歷史家が之を評して、路易十四世は死せり然れども萬歲なりと云つた。それは王は死すると雖も其流風遺韵永く國民を支配すると

云ふ意味てあるが、其句を用ひたものであつて、是亦非常の歡迎を受けたのてある。是より連日の討論に因て種々なる議決をしたが其重なる事は左の如くてあつた。

一、海牙會議の平和事業に關し一そう永久的勢力を同會議に與ふることを利益なりと認む

一、列國の海牙會議の定期集會を設定することに同意すべきこと

一、列國は第二海牙會議に列席せしむべき委員を撰定するに當り國際法の編成及び發展の企畫を委任せられたる常設評議會を組織するの方法を研究するの任務を其訓令事項の內に加へられたきこと

一、仲裁條約には列國が必ず左の條項を編入することを望む

倘し訂約國間に於て本條約の規定により仲裁々判に附すべき限にあらざる事項に關し異見の生じたるとき訂約國は先づ事件の狀況により協同に又は各自に國際調査委員會の組織若くは一國又は一國以上の隣國の仲裁を求めたる後にあらざれば如何なる性質に拘はらず戰爭の手段に訴ふるを得ず此規定は必要の場合は國際紛爭平和的處理に關する海牙條約第八條に準據して行はるべきものとす

一、海牙會議は次回の會議に於て中立國の權利義務に關する問題を審査すること

一、本會は軍備の制限を次回の海牙會議に於ける問題となすことを希望する故に本會の各國部は直に此決議を自國の政府に提示し且極力各自國議會の注意を喚起すべきこと

一、海牙會議は次會の會議に於て(一)條約に依りて戰時禁制品を限定し(二)戰時禁制品を運搬する船舶並に如此船舶が搭載する他の非戰時禁制品を何れも破壞するを得ずとの原則を確定し(三)交戰國と雖も海上に於ける私有財產は陸上に於ける場合と同じく侵すべからずとの規定を確立すべし

扨て廿五日の正午を以て、此會を結了したのてあつたが、其會議が終ると共に、皇帝陛下よりウエストミンスター宮に於て直ちに午餐の饗應に預りました。而して關係各國の大使、公使、及び英吉利の內閣大臣、樞密院議員等は皆之と一堂に招かれて饗應を受けました。それから其饗應の間には、宮中の伶人が樂を奏して列國の平和を謠つたのてあつたが、右の饗應が終ると同時に、議員一同は特別列車によつてウヰンゾル離宮の拜觀を仰付けられて。此に於て英吉利皇帝陛下の風采を望むことを許されたのてあつた。それから又翌日は水晶宮に於て饗應を受けました、是は夜食てあつたが、前の總理大臣バルフォール氏が、王命に因てテ

ーブルの座長を務めました。中々善美を盡した饗應でありましたさうだが、予はウエストミンスター宮の饗應も、ウヰンソルの拜觀拜謁も亦水晶宮の饗應も、皆他に約束があつた爲めに行く事が出來なかつたのを遺憾とするが、聞く所に據れば悉く壯麗、偉大、且つ丁寧な事であつたと云ふことである。

扨て此會議に就て觀察すれば、直ちに分る事であるが、無論此會議は列國が其權謀術數を戰はすと云ふ伯林會議の樣なものでもなければ、又萬國郵便會議の如き事務的のものでもなく、一種道德的の會であつて、之に斡旋する人も自づから志士仁人であつて、所謂唯の政治家でないと云ふことが分るのである。例へば、白耳義のバロントケルショーグとか、エキサセードとか、白耳義のイグワールアンシールであるとか、伊太利のブランズ、ラスポリーであるとか、又ギユルシロセーイであるとか、佛蘭西の前大藏大臣カイヨー及びデロンクル及び元老院議員バロンデスツールネール、ドコンスタン及び英吉利の陸軍大臣ハルデーン、我國で其著書を能く讀まれて居るロードアルブレーとか、皆有名なる出席者である。是等は無論第一流の雄才と云ふことは出來ないが、併し又第二流と下らぬ卓識家である、第一流の豪傑と云ふことは出來ないが、併し又其思想の高尙なる君子としては第二流に落ちぬ人である。是等の人々の中には無論列國の平和を重んずる志士仁人が多いのであるが、併ながら同時に又、他人の財產も我財產も共通にすべしと云ふ樣な共產黨の人々でもないのである。然れば此會議を以て單に列國の平和を重んずる社會黨か何ぞの樣に思ふのは、是は井蛙の管見と言はねばならぬ。予は出席して自ら其事を目擊して、而して出席した人々と話をして、之を實際に知つて居るのである。或は又一種の輕薄子は此會に出席する者は多くは田舍者であるなど丶云ふ者があるさうであるが、予は未だ嘗て此會議を名けて、田舍漢會議など丶云ふ程馬鹿々々しき人が歐羅巴に在ることを見聞せぬのである。要するに其處へ出席する人は、列國の總理大臣となるべき人でないと云ふことは確かで

あるが、同時に又列國の議論感情を支配するに足る道德的勢力を有して居る人々の會合と云ふことは出來るのである。此會合は右の如く道德上の會合に過ぎないが、併ながら自然の勢、一種の政治的の意味が這入つて、自づから英佛に關係ある人々に、政治上の一種の武器とならんとする傾きがあるのである。是は何人も言ふことを好まぬ所であるが、併ながら同時に慧眼なる外交家は之を看過してはならん事である。予は此會に出席して、初めは甚だ面倒なる事と思うて出たのであるが、出席して後は實に予は自國に對して一分を盡す事が出來たと思うて、甚だ愉快に思つたのである。それは何故かと云ふに、日本は殆ど成吉汗鐵木眞の如き國民であると思はれて、戰爭と他人の秘密を探偵するの外、平和を重んずると云ふ事には、寸毫も考へが無いかの如く思はれて居たのである。然る所予が偶然なる事情から、此平和を重んずると云ふ會議に出席して、日本も亦歐羅巴諸國と共に孳々として平和を愛するものであると云ふ事を示すことが出來たことで、甚だ滿足に思ふのである。扨て以上の會議は、私立であるから、議員であれば何人と雖も之に會合することが出來るのであつて、又一度之に出席した議員は、議員を廢めた後と雖も、尚ほ之に出席するの權利がある。又各國の議員が議院の決議に因て之に加はると云ふことは、自分の知る所では露西亞の外は無い。其外歐羅巴では皆上下兩院の間に一の私立團體があつて、列國議院會議英吉利部若しくは列國議院會議伊太利部と云ふ樣に私立團體を作つて、此團體を以て直ちに列國議員會議の支體となつて居る。而して其支體の名譽書記名譽書記長、評議員と云ふ樣なものが出來て居るのである。而して外國の代議士の名刺を見るに、皆其支體に屬する自分の役目を名刺に書附けて居るのであつた。若し日本に於ても、右の列國議院會議に會合すると云ふことになるならば、先づ兩院共同志の士が集まつて、私立の支部を作ると云ふ事が、一番先きの急務であると思ふのである。旅費云々の如きは第二の問題であつて、予は何れに歸着するも以て意とするに足ら

ぬと思ふ。

右は十二月四日の衆議院の午餐會に於て、予が演説をする約束てあつたのであつたが、不幸にして此會議に出席する事を忘却して、我が同僚に話すの機會を失したが爲め玆に中央公論を藉りて顛末を述べるのである。幾分の參考となる事が出來たならば、幸と思ふのである。

明治闇黒史の著者に呈す

長友木下尚江君は、同志と別れ事業と別れて飄然として伊香保の山中に入れり君を知る者皆嘆惜せざるはなし、余獨り其の擧を快とし君が異日の爲に窃に之を喜べるなり。十月下旬、余は将に衣服を改めて小石川指ケ谷町附近を往來す。帽を阿彌陀に冠り、古き洋服を纏ふて、とぼ〳〵此方を指して歩み來る者あり。近づけは即ち君なり相見るや、君は余が平常に似げなき破格の服裝を注視して、如何したのだといふ、余哄笑して、其の近狀を質せば、いよ〳〵明日は都落だと、慨然たり、余風聞の實際と爲りしを喜び、其の前途を祝して、更に余の爲に明治闇黒史に一文を囑して玆に袂を別てる也。約を履んで伊香保の山中より送り來りたるは左の一文と爲す。

嗚呼君や風清く人穩かなる山中に入りて、靜かに著述に從事す、余は生活の途に迷ふて舊態依然たり。特に明治闇黒史を年内に終る能はざりしは、余の最も漸づる所なり。玆に木下君の文を掲げて、反省社主と讀者とに謝意を表す、然かも余は明治闇黒史の筆を中途に廢する者にあらざるなり。（三十九年、極月十四日夜、（有礒逸郎）

伊香保山中にて　木下尚江

明治闇黒史！　何ぞ其の名の深刻なるや、世人往々「文明」を尊んで「闇黒」を嫌ふ、然れども人の世の實相は常に闇黒の深き底に埋沒して容易に人目の觸るゝ所とならず、故に我が日本の如き、其の唯一の誇りとする所は祖先の歴史に在りと雖も、彼等の稱して自國の歴史となす所のものは、ホンの表面の淺き枯殼に過ぎずして、歴史を貫流する人生の眞髓に至ては未だ曾て味ふ能はざる也、僕常に之を以て遺憾となす、

僕の往年始めて君と銀座街頭に握手したる時、胸底窃に一個の經書を抱けり、「日本叛逆史」の編纂即ち是

れなりき、當時國法學者なるもの盛に帝王神權論を唱導し、而して其の學理の基礎を日本國史の事實に置きぬ、然るに彼等が引據する所の日本國史なるものは、決して日本の國史に非ずして、全く彼等が捏造の蜃氣樓に過ぎず、虚僞の國史を基礎として諂諛の學說を構造す、其の罪決して鮮少なりと云ふべからず、僕の見る所を以てすれば、國史の事實は常に叛逆に在り、而して其の不斷の叛逆の底を通じて人の世の生命は着々として進化發展し來れるなり、僕此の志を抱いて今に至るまで遂に果すと能はず、早くも君の「明治闇黑史」其成を告ぐるの報に接す、自ら省みて我が怠慢を耻ぢ、君が忙中能く此の大業を成せるの勤勉と勞苦とを謝し且つ稱せざるべからざる也、

遠景は描き易く近景は寫し難し、歷史に於て亦々然りとす、況んや一點の松火地底深く其の闇窟を探くるに於てをや、僕先づ君の苦心に對して敬意と同情とを拂ふに吝ならざる也、然れども君は到底人世の探檢也、人生の探檢は君の天職也、明治闇黑史の成る、君に在りては寧ろ負債の一部辨濟に過ぎざらんも知るべからず、闇黑の鐵門、君の手を待つもの極めて多し、僕は謹で君の益々勇健ならんとを祈る（明治三十九年十二月）

英國議會破天荒の現象
二十五年間宿題の解決
阿片貿易廢止案の通過

法學博士　和田垣謙三

諸君、演題が三位一體的で、即ち三題で一題で、一題で三題でありますが予が玆に携帶し來りしものも亦三にして一、一にして三である、是は昨夕發行になりましたる報知新聞、是は Friend of China 云ふ英文雜誌。其から今一つは此れで「支那阿片煙廢止論」と云ふ書—是三つてす

偖て此の禁亞片煙問題に付きましては余は特に諸君の前に之を御話する權利があり又義務を負ふて居るの

である少し大袈裟の樣であるが五千萬の日本國民中此く申す和田垣謙三が此權利義務を專有して居る次第です、其理由は此れから御話すれば分るですが先づ此書物は永野耕造立案の支那亞片煙廢止論——是れは明治廿八年十月七日發行の本であるが其内に「阿片煙の流害を論す」と云ふ一章がある其論の内に「余之を和田垣氏に聞く明治十七年の頃君英國に滯るの日倫敦に於て禁阿片煙協會の擧あり閉會の當日相會するものカーデナル、マンニング、カンタバレイ僧正テーッを初めとして朝野知名の士數百人マンニングの如きは千古の快辯を振ふて英國政府が其歲入を減ぜんことを恐れて其不正の阿片煙貿易を止むるとをなさゞるを慨し、テーツも亦此不正の貿易を廢せざる可らざるを痛論し大に來會者を感動せしめたり殊に和田垣博士の如きは當年勇心勃々たるの時なりしを以て大に該貿易の不正を論難し左手毒を捧げ右手文明を與へんとするの愚を說きて大に來會者を激昂せしめ滿場紛擾を極めたることあるも云々」とある。處で是は年月が少し間違つて居る余は明治十七年には既に歸朝して居つた余が英國に居つたのは明治十三四五年の交である當時余は此書に記載してある禁亞片協會 Anti-Opium Socity など云ふものあることは夢にも知らなかつた其之に赴く前夜倫敦の或會堂にて一場の演說を試み東洋に於ける英國の政策を大に罵倒してやつた、蔭て彼是惡口を言ふことは善くないが本人の前でやるのは男兒の本領に背かないと信して遠慮なく罵倒してやつたが其演說の内に亞片政策に關する意見をも挿入して斯う云ふ事を述べたのです、夫は今日英領印度政府は亞片を官營とし支那國に向つて年々歲々多大の量額を輸入し四億萬の人間に毒藥の强賣をやつて居る其癖一面にはやれ泰西の文明を東洋に齎らすのやれ支那を啓導するのと云ふて居るが是は恰かも右手に毒、左手に藥と云ふ鹽梅で究竟する處支那を害せんとする惡意か將た之を利せんとの善心か余は其判斷に迷ふのである察する處自家の「ポケット」さへ重くなれば仁義も道德も眼中に置くに及ばぬと云ふのが御主意で御坐ろう——いや斯くまでは言切

らなかつたかも知らぬが可なり手强く遣つ付けたとは遣附けた、回顧すれば今より廿五年前の事で余も恰度其時分は本書著者の所謂少壯血氣の……と云へば今ては余程老人の樣に思はれるか知らぬが未だ〱左樣てはない、何しろ廿五年前蕞爾たる東洋島帝國の一學生の一場の演說に過ぎなかつた併し流石に英國である少數者の說であると云ふて決して輕蔑はしない余の右の演說は聽衆中に之を稱讚せられたものも少くなかつた中には非常に感動嘆息して居つた者もあつた兎角する内に或る一人が余の傍に來て「御前樣の樣な空論家の爲には幸ひ・Anti-Opium Society と云ふ協會があるから夫へ行つて其處で演說するが宜かろう明日その會がある筈だ」と注意して呉れました乃て余は其の翌日非亞片協會へ行つた、前に朗讀したのは其時の事柄を書いたものであります。此 Anti-Opium Society にては社會の各方面から色々の人が來て演說するのであつた「カンタベリー」の大僧正も遣つて來る舊敎派の大立者も來る政事家も來る醫者も來る各演壇に上り續々非亞片說に付て辯論した、尤も其席に於ても多少の反對論を吐く者がないではなかつたが兎に角斯う云ふ事を遣つて居ますからして英國人も其亞片の害毒に付ては少しは考を持つて居り其不可なることは誰も默認して居るのみでなく少數ながら熱心なる君子人の流石に英國には少くないと云ふことを知りました夫から後處々を漫遊して歸朝し明治十七年から今日迄引續いて老書生で居るのでありますが此間に嘗て高等商業學校に關係し校長の事務を執つたこともありました乃て圖らずも當時の生徒中或一人の青年を見出す機會に遭遇したが其人は學業の成績が優等であつたのみか阿片問題に頗る熱心であつた即ち此書を著はしたる永野耕三氏だ同氏は阿片間題に付て色々熱心に研究して居つた、處が其内に日清戰爭が始まり又程なく收まりまして李鴻章の來航となり平和談判が開かれ其結果下の關條約が出來調印も濟み遼東半島と臺灣が我に隸屬すると云ふことになつた乃て支那の一部分の土地と共に支那國民の一部分が我國民とならなければならぬ、處て此の新しい

臣民は申す迄もなく阿片の吸煙者である左樣なると阿片問題は最早對岸の火災でない我一家内の事件である乃て永野氏が相談に來た「扨日本は臺灣と遼東半島を領有することとなつた、附ては此等の新領地に於て阿片問題に付て政府は如何なる制度を布くてあろうか掛念に堪へぬ」と余の之に對する意見は兎も角も從來研究し來つた結果を打出したが可かろうと云ふことで永野氏も余の勸告の儘に遂に明治廿八年十月に愈々此書を出版することになつた處が世間の人々は餘りに此問題に注意を拂はない時に恰も好し大鳥圭介翁が前きに支那公使てありましたから余は此稿本を携へて同氏を訪ねまして序文を乞ひたるに次の如く書いて呉れられました是は漢文てありますが訓讀すれば先づ斯ふてす

鴉片之慘毒盈于全域魔殺四百餘州之生靈釀成亡國之禍源殆有不忍言者清廷不今而禁之則欲不自亡豈可得邪然而彼則伏病未救積弊未革不止漠然不講禁船齎鴉片之策猶且至使縱民蕃殖之于內地矣夫物愈多則價愈廉價格廉則需用茲滋是以其極至擧寒士貧民使得恣其嗜好何其不仁之甚乎

永野子有慨于此纔述其輸入之由來以窃期防遏荼毒播四方也仁人之意洵知可嘉庶幾清廷當路之人讀之有所深猛省而可得其所得則挽廿一省之精氣于倒瀾救四億之生靈于塗炭可得而望也此爲序

と云ふ序文を書いて呉れられました又余も當人を社會に紹介する爲め一篇の序文を書きました之を讀みますれは余の本題に對する精神を知ることが出來ませう

支那阿片烟輸入廢止論の序

甚し矣阿片の害個人を害し一家を害し延て一國を害す宜なる哉貿易上之か爲に莫大なる直接の利益を收得する英國に於てすら晩近禁阿片協會の設立あり志士仁人之に贊同する者年一年より多きを加へ自國不正の利は斷然之を減殺するも海外幾千萬の生靈を救助せんと熱中するや想起す今を去る十餘年予の英國に在るや偶々禁阿片協會の大會あり幸にして出席することを得たり盖し予は唯一の東洋人代表者なりき政黨を問

はず宗派に論なく知名の士四方より雲集し正議讜論予が心を動したるもの少からず就中予が今尚ほ目前に見るが如く記臆し瞬時も忘れ得ざるは舊教派第一流の名士カルヂナル、マンニングが非常の熱心を以て英國が阿片貿易に從事するを罵倒し去り而して終に臨み勵聲一番「抑々英國が印度を占領する所以のもの幾億の東洋人種を文化の域に誘導するの天職たるを覺認し能く之を實行するの確信あるか故ならずや苟も之なからんか吾人は何の面目ありて、仰て皇天上帝に對し俯して絕東幾億萬の生民を見ることを得んや」と痛快に論辯したることにぞある國敎派に在ては時のカンタベリー大僧正臨席登壇せしが傍聽席に在りし或る反對論者が「英領印度政府の歲入中その七百乃至八百萬磅は實に阿片貿易の收入たり一朝阿片貿易を廢止せんか政府は右の如き巨額の歲入不足を告げざるを得ず而るを先づ之を補充するの策を講ぜずして漫に阿片禁止を唱導す此れ事の前後本末を誤るもの豈に無責任の極に非ずや」と云へるに對し勇氣勃々之を駁論して曰へる樣「予は政治家に非ず又財政家に非ず此等問題に就ては更に定見あるなし假令之あるも恐くは半文にだも價せざるべし然り然れども予は茲に予が良心に訴へ且つ予が無似を以て叨りに汚す所の神聖なる敎職に付帶する重且つ大なる責任を以て左の一義を斷言するに躊躇せざる者なり何ぞや印度政府財政上の結果は奈何なる運命に立至らざるを得ざるかこは吾人の問ふ所に非ず否な顧るに暇あらるざる所なり吾人は我邦自身に取りて奈何なる不利益を來すも此の不正不義なる貿易は斷じて之を禁止せざるべからず時來れり今は一日も猶豫すべきに非ず」と流石は天晴れ大僧正の一言重さ千鈞難者沈默す當時の兩傑今や已に亡し而して阿片の耕作貿易消費は未だ少も衰退せざるのみかは愈々益々增長し來らんとす二士果して瞑し得るや否や噫吁。

東西相距る幾千里利害相容れざる氷炭啻ならざる英國にてすら商利を鴻毛より輕しとし正義を泰山より重しとして上に謂ふ所の如き一大美擧あるは予の感激に耐へざる所なり支那に對しては鄰國たり同文國たり又

人種上幾分か親戚たる大日本帝國に在ては却て未だ嘗て這般の義氣ある者なく從て此種の美舉なきは頗る愧づべきの事たり予亦一箇の老措大世を動し鄰邦の爲め國家百歲の長計を畫策するの手腕なきを嘆ずるや久し過歲偶々高等商業學校の囑託を受け大學公務の餘暇を以て古今東西商業の沿革を講ず學年の末所謂學年試業なるものを行ふ試業の成績予に滿足を與ふるもの少からず就中一學生の答案議論文章共に大に見るべきものあり頗る予の注意を惹けり學生數十名予其名を知て而して其人を知らず同級生某予の素と知る所予語るに前陳の事を以てす某曰く「渠の答案我師の注意を惹く怪むに足らず渠固と常儕に非ず且つ渠は阿片廢止に熱心にして之が調査に從ふこと已に年あり」予之を聞て益々その人を見んことを望めり數日の後其人來れり本編著者永野耕造君即ち是なり予固と阿片廢止を冀望する者而して有爲なる青年學友中同感の士あるを見るその悅知るべきなり予は試に何ものか氏をして阿片廢止の事を發念せしめたるかを問ふ蓋し一商業學校の學生にして此かる思想を懷抱すること稍々異とすべきものありたればなり當時氏が予に答ふる所本編第一章序論に謂ふ所の如し且つ曰く「生の之を念ふや久し然れども一介の書生未だ天下に向て之を公言する能はずたゞ時機の來るを待たん」と予益々その用意の着實なるに服し飽く迄此美舉の爲に盡力せられんことを望み且つ予の微力の許す所のものあらば喜て之を助けんことを約せり氏は其歲好成績を以て學校を卒業せり卒業の後職を外務省に奉ず蓋し大に期する所あるなり

昨歲日清の事起り今年四月に至り下の關媾和條約の調印成り遼東半島及び臺灣我版圖に入らんとするに當り氏は突然一書を予に寄せて曰く

「嗚呼先生危機は迫れり幸運は來れり我國將に臺灣及遼東半島を占領せんとす此時に當り阿片制禁の事如何せんとするか我政府之を等閑に附し去らば危機茲に破れ禍害測られざる者あらん我政府にして嚴重の制禁をなし占領地內清人の喫烟を禁絕することを得ば阿片煙廢滅の好例となり支那政府をして我例に倣

ひ國民の阿片煙を用ゆるを止めしむるを得べし此れ豈に幸運に際會せるに非ずや此際當事者の意向果して余輩と同一に出るか……（中略）……生昨年、支那阿片廢止論」を草し之を公にして世論に訴へんとせしも該問題は至重至大……（中略）……他日素志を貫き……（中略）……親く實見し後大に輿論に訴ふるの胸算なりしも今や該問題の爲め失ふべからざる好機會に際したるを以て拙著の不完を顧みず之を出版して孤衷を發表せんとす先生以て奈何となす」云々

予一讀氏が終始その宿論に熱心にして又時機を見るに敏なるに感じ欣然同意を表し遂に今日本書の出版を見るに至れり

内外の新誌近者下の關媾和談判伊藤全權辨理大臣と李中堂との問答を掲載すその第四談判に於て臺灣讓與の事を議するに當り談偶々阿片廢止論に及ぶ予は之に依り滿天下の人と共に伊藤全權大臣の意見は阿片廢止にあることを知れり此れ余か本編著者及び天下同感の士と共に大に悦はさるを得さる所なり伊藤全權大臣の意見は即ち伊藤總理大臣の意見伊藤總理大臣の意見は即ち帝國内閣の意見なることと此れ予の信して疑はさる所希くは我政府先つ臺灣に於て斷乎として阿片廢止を決行し依て以て清國をして早晩之に傚はしむることを本編著者の熱望する如くならんことを此事にして果して成らんか義俠なる我大日本帝國は不幸にして一度は敵視したる東洋一大帝國の爲にその一大强敵を斃すの榮譽を博し以て何所迄も仁義の師たる精神を貫徹することを得又清國に在ては幾億萬の償金臺灣島の割讓を賠償して尚ほ餘りあるの實益を獲得すへし蓋し此くの如くして初めて阿片禁止に熱中する泰西志士仁人の美擧と青史に比類少き帝國今回の義戰と兩つながら能くその最大最終の目的を達すと云ふべし。

是は既に十年前のことである歸て英國に於きまして余の歸朝後禁亞片運動の成行きは如何であるかと云ふに流石は英國である爰に Friend of China 即支那の友と云ふ雜誌があります是が例の非亞片協會の機關雜

誌てある本協會は英國流の Slow and steady 倒れて已まざる決心にて Anti-Opium の運動を繼續して居る數數議會へ本問題を提出しましたが議員等は之に耳を傾けない唯々之を一笑に付し去つたのである此間に此問題に熱心の諸氏は前後相踵いて死んで行く者も不少て兎角事が捗々しく運ばれなかつた併しながらテニソンの句にもある通り men may come, men may go, but I go on forever. である由しや人は來去するも禁亞片の主義精神は衰へない否な年々歲々盛になるのみである、此雜誌は余が前にも述べたる樣の關係からして余の許へ來ますが之を見ると我々の目的の前途は尙甚だ遼遠てある彼の保守的なる英國の輿論を動すは中々難いと云ふて悲觀せざるを得ない此主義たる獨り議會に於て容易に採用せぬ許りではない London Times でさへ此問題に對し甚だ冷淡であるそれは證據がある、其れは斯う云ふ事です即千八百九十一年に Professor Legge と云ふ人是は有名なる支那學者で四書五經左氏傳などを英譯したことがあり後 Oxford 大學の教授であつたが支那に於ける阿片の害毒の慘憺たる光景を目擊し大に同情を持ちましたから一篇の論文を草して「タイムス」紙に投書したこれ蓋し氏が Professor の聲望は確かに世論を動かすに足ると信じて爲した事と思はれる然るに無慘やな「タイムス」は之を沒書にして了つたと云ふことである、レグの禁亞片問題について熱心であつたことは近頃になつて同人の孃の Helen なるものか故人の傳記を書いた其内の一部分を見るに「レグ」の筆に成りたるものを掲載してある余は三十年間支那人の間に生活し阿片の害毒を目擊せり而して世人が吾吾阿片反對者を嘲て Sentimentalist 或は Fanatic と謂ひ又は goose 即馬鹿者と云ふ此等の名稱は勿論吾人に取りて有難く甘受する理ではない併吾々は道と云ふものを知りて居る正道を渴望する吾々に取りては此等世上の批評は孔子の言を假りて云はゞ As a fleeting Cloud (如浮雲)であると流石は支那學者丈けありて支那の古聖人の言を假りて言つて居る尙又次の事を書いて居る「レグ」が支那の高官に面會せるときは其高官は公使

の職にもありたることある人なるがその云ふには嗚呼「ドクトル」よ君は永く弊國に滯在し殆んど支那人と謂ふても宜しい仍て玆に一つ御尋ねすることがあるが何卒うか腹藏なく貴説を聞かして貰い度い、如何でせう我國と英國と比較したならば何れが優つて居るだろうか「レグ」は直ちに答へ得たのであるなれど故と思案らしく少時間を經過せしめて後「御無禮ながら英國を優れりと云はなければならぬ」と答へた處が件の支那人は御説も尤も併し其れは實業上實力上例へば鐵道が何萬里あるとか軍艦が何百萬噸あるとか云ふ如き物質的の側から言はれたのでありませう余が御尋ね致したのは其點からではない道徳上の點からである此點から二者の優劣を問ふのである乃て「レグ」は左ればて御座る其點に於ても拙者は矢張り英國に軍配を揚げますと斷乎として答へた其答をするや否や支那の大官は大に驚愕した彼は華麗なる居室を走り廻り眞倒か面當てにした理ではあるまいが其所に裝り附けてあつた金鍍したる椅子を室の一隅に抛け付けて破壞した稍暫し茫然たる後元の座に居直ほり扨「レグ」を顧みて云へる樣噫予は之れ如何これ如何と是れには「レグ」も一言半句「グー」の音も出ないで只冷汗が背に浸み渡る樣に感じた云々と書いてある「タイムス」なるもの須く右の文に餘白を貸し或は多少の Comment を加へて世に紹介するのが禮である當然である然るを無造作にも沒書として了つたのである乃ち英國議會の多數者が冷淡であるのみではない英國の社會が冷淡であるのである社會の耳目たる「タイムス」が餘白を貸さないのは畢竟之れが爲めである然らば此問題の解決の難いと云ふことは甚た明瞭である尤も英政府は之れが爲め調査委員を設けて其結果中々浩瀚なる報告が纒まつて居る其内には彼の支那地方には一種の病毒が傳播して居るから阿片は其れに對する豫防藥として必要であると云つて居るものもある又は由しや多少の害があるとしても倫敦市に於て勞働者又は女子の輩迄が「ビール」を飲み「ブランデー」を煽りつゝあると餘り異なつた事もなかろ

う先づ〳〵東洋の片隅の事を見て餘計な苦勞心配をするよりは自國の禁酒會にても力を入れて見る方が宜かろうなどと云ふものもある、左れば此れに對し益す其異論を維持し輿論を啓導すると云ふのが英國的精神てあるけれども其目的と云ふものは中々一朝一夕に達せらるべきものでないと予は信じて居た然るに玆に一つ驚愕すべき事柄が出來した回顧すれば余が英國にて演説をやつたのは明治十四年のことで即ち今より二十五年前てある爾來一世紀の四分一を經過した。所が此二十五年と云ふものは一國の歴史に於ては何でもない尤も諸君中には未た其頃生れて居なかつた向もあるでしようう又人生五十とせば右は人生の半分に當る次第であるが一國の上から云ふと漸つと二十五日間位である處が二十五年目の本年は如何なる年てあるか丙午の年て以太利の噴火、桑港の地震は申すも更なり又米國西部の「カリホルニヤ」州にては日本人の權利に關する一大問題が起つて居る併し是は必竟するに人道問題てあつて決して條約書や國法の明文を振廻して彼是議論すべき問題てはないのてある夫故に若し米國の各州に人道と云ふ者があれば此の加州に起つて居る樣な問題が起らない筈てある若し米國人が人間てあるならば此の如き問題は些々たる法律の明文を措て人道にて論議をせなければならぬです實に米國は物質物の進歩は中々著大のものてあるけれども悲しい哉米國は新開地てある恰かも本邦にて云はゞ橫濱や神戸の樣な新開地てあるからして隨分草莽々たる所も少くない位てある其間を通過する道路は切り開かれてあるけれども未た〳〵日本の東海道や Roman road の如き立派なものてはない有形の道路既に然りてある況んや人道に至つては殆んど無いと云つて差支ない出し之あるも細く又は曲つて居るので broad and straight なる Roman road の如きは絶て無いのてある或は個人としては道を辨へて居るものが無いてはなかろうが米國全體としては金力と權力と腕力に支配されて居るから道義とか道念とか云ふもので Ruling されて居る者は極めて少い、處が轉て英國を見よ此災害累に抵る不吉の年に於て玆に最も大な

る吉事、破天荒なる人道談。個人的でもなければ國家的でもない即ち國際的人道、對外的人道、四海同胞と云ふ精神より起りたる人道により十露盤の上で打算するときは中々に解決の出來ない一大問題を單に人道の點より解決した、余が英國に於ける演説からは二十五年を經過して居るが尚古き沿革を求むれば林則如か阿片燒却の頃より阿片輸入廢止の意見と云ふもの。は幾分か顯はれて居つたのであるが兎も角最近に於て禁阿片協會が出來て二十五年と云ふ月日を費し本年に至り立派に英國の議會を通過した然も其通過の際には一人の反對者もなく全院一致で通過した其際一の古參の代議士が出席して居たが全會一致一人も反對者ないと云ふことは空前の例であると謂つて驚いた、決議文に曰く印度支那阿片貿易は德義上辯護の餘地なきものなり故に某等は英國政府が一日も早く之を廢するに必要なる手段を執らんことを希望すと云ふのである政府の方は「ジョン、モーレー」が代表して同意を表した實に大決心である、處が支那にては如何であるか輸入が減ずれば自國で耕作すると云ふ有樣である左すれば只英國にて之を止めたりと云ふのみにては支那國內の阿片培養者を喜ばすのみである故に先以て支那自身が消費を制限しようと云ふ議なれば英國政府並に英領印度政府は如何なる方法を取るも之が禁止に同意せん而して財政上の犧牲は甘して之を受けんと斯ふ答辯した是れは二十五年前に「カンターベリー」僧正が言ひたることが今日「モーレー」に依つて繰返されたのである、此禁止の結果は即ち三千萬圓の喜捨である三千萬圓と云ふ額は決して少くない金高である日本の財政を見よ今でこそ二億の三億のと云つて居るが日清戰爭前には只た八千萬圓に過ぎなかつた右の三千萬圓と云ふものは此三分の一以上に當つて居る決して少い金高でない然り一年に三千萬圓十年には三億圓である回顧すれば英國は嘗て奴隸解放の爲めに何億圓と云ふ金を喜捨した事がある當時世間では之を空前の美擧として稱讃措かなかつた併し其何億と云ふは單に一度限りである今度のは今後決して三千萬四千萬に限らないので年々歲々連續

する收入を喜捨することであるから計算上今度の方が高額である實に大々的人道より割出したる獻身的犧牲的、殺身成仁的の美談である世に英國は日既に沒せる國であると云ふものもあるが過を見て改むるに憚からざる處實に日輪未だ沒せざるの證である道義、道念の太陽は英人の胸を照して居るのである世人は又た英人を「ブル」であると冷評するが若し「ブル」であるとせば英人は光明赫々たる天地の「ブル」である實に今回の事たる我同盟國たる英國に取り又印度に取り又直接の被害者たる支那に取り誠に目出度い事である敢然高尙なる精神にて慈地に進んで行かば如何でせう德孤ならず必ず隣ありて或は今回の喜捨を償ふて尙ほ餘りあるの國利民福が英人の頭上に降り來るでありませう、二十世紀の今日に於てゝ正義、人道と云ふものは決して時勢後れてはない是は實に二十世紀の世界の歷史に朱書し特筆大書すべきものである、併し諸君是は單に議會の通過であるが是がいよ／＼實施され現實に實行されて初めて百里の長途を全くしたりと云ふことが出來るものである今日の處先づ九十里許りの所まで漕ぎ付けたのである百里の半なる九十里まで漕ぎ付けたのは上出來である英國の方は先づ此の通りである、翻つて支那の方は如何であるかと云ふに是亦余が喜ぶ處である……是は二十三日の夕刊の報知新聞て北京特電を登載してある

▲阿片禁制令。本日阿　禁制に關する法令出づ親任官吏の吸煙者は六ヶ月間停職を命ず、爾後禁煙するにあらざれば復職するを得ず但し六十五歲以上の吸煙者は殊に之れを許可し其の他は一切嚴禁するに決す

即英國政府の反響が昨日に至りやつと初めて顯はれた但し日本が臺灣へ施したる政策の如きも間接には今回の支那阿片政策を幇助したと云ふことは勿論言ひ得るのです兎に角支那が猝然自ら起つにあらざれば外よりワイ／＼言つても到底之れは行はれないことである兎も角禁制令が出た而も現任官吏の休職……是は餘程宜しい官吏と云ふ頭株を捕へたのは支那帝國近頃の

出來てある扨此禁令が出た以上は願くは眞面目に勵行して貰いたい左すれば我隣國も強固になる道理である隣國が弱くて常に世話が燒けるのと強盛てあるのと何れが利益てあるか素より多言を俟たない從來西洋人が常に東洋の事を心配して與れた翼くば東洋人も亦漸々立派に自立し今度は却て西洋人を救ふと云ふ時が來らねばならぬ

道近きに在り諸を遠きに覓むといふことがある、高尙なる學術論は無論必要ではあるが吾々人間亦同時に能く足下を見て歩かなければならぬ併し又二十世紀に於ても日月は天に懸つて居る宜しく時々之を仰ぎ見るが宜敷い世は物質的に進歩すると同時に又精神上の進歩もせなければならぬ今や日本の强くなつたのは單に物質的の側てあるが只是のみにては祖先に對し後世に對し未だく誇るに足らないのてある、單に Quantity 即ち分量の點許りでなく、Quality 即ち性質に於ても改良して行かなければならぬ或識者は英國は大英國たると同時に好英國たれ (greater and better Britain) と云つて居る英國は既往及び現時に於て强盛てある抑々盛なるものは必ず衰ふる時期ありや否や、否なく盛なるものは必ず亡びなければならぬと云ふ道理はない苟も moral Pulse の打つ間は一國の命脈は永へに繼續するのてある吾々日本國民も亦之に負けず劣らぬ樣に遣つて行かなければならぬ

次號の本欄に寄稿の豫約ある人は

內田魯庵氏
佐々醒雪氏
畔柳芥舟氏
金子喜一氏

等にして、尙ほ他に續々依賴中也



トラスト風

『東京朝日新聞』

大資本の大事業は小資本の小事業より一般社會にとりて利益多きを常とすれども、其事業が獨占的となるに至れば大資本の大事業の弊害は實に異常なり。近年米國に於てトラストが盛に流行し、遂にロオズヱルト氏をしてトラスト征伐を始むるに至らしてめたるも、亦實に其弊害の默視す可らざるものあるに因る。蓋しトラストは元々事業主の利益の爲に造らるゝものなるが故に、其市場を支配するの力大なるに隨ひ、自ら其利益の爲に一般社會のそれを犧牲とするに躊躇せざるなり。假令トラストが事業を獨占せざる迄も、此の如き傾向は決して免かる可らず。完全の獨占事業に非ざるものは、只其暴戾貪婪に聊か限りなきを得ざるのみ。日本にも近來大資本の大事業漸く起らんとす。而して是迄小會社が合同して大會社となりたるもの、亦尠からず。未だ米國の石油トラスト又は鋼鐵トラストの如き偉大の勢力を有するものは有らざれども、多くの事業家の期する所は即ち此邊に在り。曰く事業の發達は勿論、海外輸出を容易ならしめ、廉價に社會の需要を滿すには、事業は大組織なるを要すと。成程こは尤も至極の言。然れども事業の大組織となるに隨ひ、其結果の往々反對に出づること、米國トラストの如きものあるは、勢の免かれざる所。東京市の三電車合同の結果の如き亦其實例なり。英國の如き自由貿易の制を守る國に於ては、トラストも其特有の橫暴を擅まにすること能はざる事情あれど、好んで保護政策を用ふること吾國の如きに於ては、獨占事業の經營者は、國家の保護の下にトラスト的亂行を敢てするを得ることゝなる。此點に於て吾國情は米國のそれに酷似す。米國にてはトラストの弊既に大に現はれ、日本にてはトラストが是より起らんとするの差はあれど、そが愈日本に流行するに至れば、其結果は必ず米國の如きものあるべきなり。渺たる電鐵の跋扈すら東京市民は既に之を奈何ともし得ざるに非ずや。大事業の勃興は善し。會社の合同も善し、トラストの成立も善し。唯此等に伴ふ必然の弊害を如何にして防ぐべきかが問題なり。事の表面に現はれ、明かに法令に違反するものは、當該官廳に於て之を檢擧糺彈するを得れども、其祕計隱謀、黄白を以て人を毒し世を動かすが如き所業に對しては、法令ありといへども或は及ばず。事業の經營に嚴重なる命令條件を付するが如き、亦取締に必要なるに相違なけれども、是亦隱密惡むべき運動を全く防ぐには足らず。最後の制裁は矢張り國民の道理的正義的觀念ならざる可らず。近頃英國の石

險屋某、同業者を糾合して資本一千數百萬磅の大トラストを作り、其勢力市場を獨制するに足るを見て、密かに是迄買ひ貯めたる石鹸包の定量を減じて販賣し、即て其奸計が世間に知れ渡るに及びて、忽ち世論の大攻撃を受け、遂に其石鹸包を定量に復するの止むを得ざるに至りしことあり。こは社會の健全なる制裁力に對しては、トラストといへども、容易に反抗し得ざることを證するもの。此くの如きは固より英國にして始めて之れ有り得べく、米國や日本に於ては、必ずしも然るを得ざれども、法令及び當局者の監督以外、社會の道理的正義的觀念が常にトラスト的大事業に對する最後の制裁者たらざる可からざるは、日本も米國も英國も異なる所無し。獨占事業の跋扈を制せんと欲するものは、思はざる可からず。ロオズエルト氏といへども、米國民の後援なくんば、トラストの征伐は出來ざる也。

新聞の論文

『讀賣新聞』

我儕の見解によれば新聞記者は、辯護士にもあらざると共に、代議士にもあらず。新聞記者は新聞記者にして、彼等の外、別に立脚の地を有す、其職分は雄辯、辯護にあらずして、人生の批評にあるを信ず。而して批評の本義は其眞實を報道するにあるが故に、人生を在るがまゝに報道し、人をして人生の眞實を感得せしむるは、其行文の第一義なるを信ず。然るに新聞紙の論評は、多く辯難攻撃を主とし、或は主張辯護に專らにして、殆んど政治家の演説を聞くと云はんよりは、寧ろ辯護士の辯護を聞くの思あるもの少からず。公衆をして其辯論に瞞過せられしめ、或は黒を見て白となし、或は利を見て害を見ざるに至らしむ。思ふに其堅白同異の辯才に至りては、即ち之あらん。然れども果して忠實に人生を批評し、社會を寫し得たりと云ふことを得べきか、我儕之に惑ふ。

漢文を學習したるものは何人も其年少氣鋭の時にありては、蘇老泉の縱論を喜び、東坡の史論を悦ぶを常とす。然れども其識見成熟の後に至り、始めて賈誼の過秦論の及び易からざるを覺ゆ。夫れ過秦論の一篇、徹頭徹尾、議論を着けず、史實を排列し、形勢を陳述し、最後の一句僅かに斷案を下すに至りて、千萬言の妙ありとなす。私かに近日歐洲に於ける大作手の論文を見るに、多くは皆な過秦論と其の揆を一にせざるものなく、必ずしも獨斷の鋒鋩なく、必ずしも老吏宣告の嚴なく、唯だ多くの事實を蒐合し、各種の顯象を説明するの間、讀者をして自から自家の意見を作るのヒントを得せしむ。故に歐洲大新聞の論説は、辯論にあらず、將た雄辯にあらず、事實の説明、報道の註解に止まる。然れども其公衆に對して其見解を信認するの力は、風霜獨斷の論文に勝さるもの數等なるを覺ゆ。而して我儕は我公衆が、最早や此の如き論文を要求し、此の如き論文を賞味するの用意あるを信じ、彼等は新聞記者が、社會を其在るがまゝに寫し、あるがまゝに批評し、事實を排列し、左右兩端を叩き、判斷に至りては、僅かにヒントを與へ、公衆をして自から意見を作らし

めんことを欲するもいなるを信じ、私かに之を以て自から期せんとす、知らず我公衆は何を以て我儕に教へんとするか。（拔萃）

余の食物衞生法

『實業の日本』　醫學博士　高木兼寛

食物衞生法といつても別にむつかしい事でない。又決して面倒な料理法とか、高價な材料などを要するのでない。上流でも下流でも上下一般に實行することが出來る方法で、却て餘り簡易な爲に、即ち勿體らしくない爲に、之が實行に躊躇する者があるほどである。

自分の信ずる所では、滋養物といふのは、決して多額の代價を拂はねば買へないような食品をいふではない。普通世人の考では滋養物といへば、牛乳とか、鶏卵とか、牛肉鳥肉とかに限るものと思ふて居るが是れは大層な誤解であらう。所謂滋養といふ點からいふと穀類の如きは最も滋養に富て居る、豆類も亦非常な滋養がある。第一が大豆、次に小豆。從て味噌なども中々營養分が含て居る。而して穀類では米の飯よりも麥飯の方が一層滋養がある。病人が食ふ食物は別であるが健康體の人であれば、此等の食物を適度に食して居れば、牛肉、鶏卵、牛乳、などに匹敵する滋養分を攝取することが出來る。それで自分は此確信により、毎日麥飯と味噌汁だけは決して缺かしことはない。即麥と米と半々位の割合で二十年來繼續して居る。尤も鶏卵も、牛肉も、牛乳も用ゐるが、決して重きを此方に置て居るわけではない。初めて此意見を世上に發表したのは明治十八年であつたが、今日は殆んど此說に一定して了つて專門家仲間に反對論者はないのみならず、豆腐が非常なる滋養分に富て居るといふような說がなか／＼盛に唱へられて居るような次第である。明治十四五年の頃から我海陸軍人及學生の健康が頗る不良に赴き、脚氣病の流行を始めとし漸次憂ふべき狀態に進て來た。當時若し暑中に戰爭でも起つたなら、我軍人の多くは到底戰役に堪へることが出來なかつたであらう。學生も亦然りて、休學となり、退學となり、死亡となつて、健康不良の爲に學業を中廢する者が、到る處續々として現はれた。當時自分は海軍衞生の當事者であつたから、大に心配して種々研究の結果、遂に食物の不良に原因することを認め、それには從來の米食を變して麥飯となし、毎日必ず味噌汁を食はすことが救濟の最良方法であると信じて、食物改良の意見を提出し、明治十六年の際、陛下に拜謁を仰付けれた節、此事を言上し奉り、遂に十七年から海軍全體にこれを實行するようになつて、麥と米と半々の飯を與へることになつたが、十八年になると脚氣病患者がガタリと減り、十九年には僅かに三人を出したのみで、二十年には一人も出ないようになつて了つた。一時はさしもに猖獗を極めた脚氣患者が、食物改良後僅に兩三年中に全く跡を絕つに至つたといふことから考へても、誠に恐るべきほど著るしい効驗ではないか。尤も其後とても、多數の兵士の事であるから、中には、脚氣患者の發生したこともあるが、其原因を調べて見ると、大抵入營前の不攝生による者が多かつた。

然らば脚氣はそうとして、一般の健康狀態はどうであるかといふと、是れも着々改善の痕が見えて、總體に於て以前よりもよき成績を示すようになつた。其後緒方惟準といふ人が陸軍にも麥飯を應用し、又堀内利國といふ人が監獄にも麥飯を應用し、いづれも良好なる成績を得て居る。次で學生社會でも麥飯黨が出來て、脚氣に罹る者が割合に少くなつた。（拔萃）

海外音樂の見聞

『音樂新報』

下田次郎

家庭の音樂　一體西洋人は音樂が好きで、單り之を聽くみならず又出來る人も少くない、殊に唱歌は大抵の人が出來、殊に紳士淑女には音樂の嗜好はなくて叶はぬ資格である。一日の仕事が濟んて、夕飯を食べた後などの慰みには、能くこの音樂が出るそれも極つて一人がするのではなく、例へば妻や娘がバイオリンをひき或はピヤノを彈じ、主人や子供が唱歌をして、一家總がゝりて樂しむことをする。日本ては家庭に人を招待しても、食べたり談したりすることはあるが、家庭の者が、音樂を以て招いた者を慰めると云ふことは少いようである。それて我國てもこの家庭の音樂と云ふものを發達普及させたいと思ふ。日本ては一日働いて戻つても、夜分何にも心を慰めるものが無い爲に、ツイ夫が家を飛出して、妓と戯るゝといふようなことが少くないが、若し家庭に音樂の趣味が解せられて、妻でも音樂が出來たらば、夫を家に引付けることも餘程できると思ふ、妻は善い意味に於ての藝者であつて欲しいのである。併しそれは單り婦人に注文するのみならず男子も音樂趣味を有し自らも音樂が出來たならば。餘程樂しみで、是までの惡風弊を無くすることが出來るであらう。人間は職業の外何かの嗜みが要るもので、善い嗜みが無いならば、下品なる下等な嗜みを有たればならぬから、斯かる下等なものを驅逐するには、音樂が一番好い。

市民の音樂　市民の間にも亦有志者が音樂の團體を作つて、時々素人音樂を催すことがある。ナカナカ素人でも侮れぬ人がある。敎員又は市民の音樂會を指導する人には、音樂學校の有名なる敎授などがなつてナカナカ長い音樂が聽かれる。しかし多くは唱歌である。村でも音樂會の組織されて居る所が少くなく、時に演奏をなし、又は音樂祭りといふべきものを催し、リラ等の樂器の印ある旗を押立てゝ行列をすることもある。巴里では「通俗大學」が盛んで方々講演會が夜分に催されて、各方面の專門家の、專門の話を通俗的に公衆に聽かす外、日曜には能く會員の音樂會を催して慰むことである。その時には唱歌も器樂もあり、又朗讀、芝居こともある、藝のある人が多いから會員の連中で結構斯かる催しが出來るのである。（拔萃）

此廣告により御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 藤岡作太郎校及著

異本山家集 附 西行論

定價八拾錢 郵税八錢

異本山家集は從來流布の山家集と異り流布本は後人の選に成て不審の處多く此書は**西行自筆の**書を**傳寫**せし者に依り最正確なる山家集也此書世にありと知られて而も世に出ざりし者今茲に始て刊行し西行論は山家集選集抄等の是非を論じて西行研究の方針を示し進て其經歴性質和歌を解く其崇德天皇との關係を述るが如き先人未發の言也此集あり此論あり茲に歌聖の眞面目は暴露せらる

文學士 小山内薰著

夢見草

定價金三拾錢 郵税四錢

此小冊子は夢の國に生れて夢の國に死したる廿五歳の一靑年が書き遺したる夢の如き文反古の集也收むる處の詞藻廿篇夢より現に遊び現より夢に歸る而も人生の一角に觸れて或は驚き或は悲み或は喜びし其折々の告白いと〳〵正直なるに似ず壓花を翳し脂粉裝ひたが如き態あるは此靑年の「若さが故」なりと見許し給へ。

文學士 佐藤芝峯 英獨對譯

小倉百首評釋

定價金四十錢 郵税四錢 本書は美文研究好材料

文學士久保天隨著 評釋

日本絶句選

定價金三拾錢 郵税四錢

與謝野鐵幹……與謝野晶子合著 ○訂正增補

毒草（四版）

定價五拾錢 郵税六錢 暫く品切之處製本出來

山川とみ子 增田まさ子 與謝野晶子合著

戀ごろも（三版）

定價金四拾錢 郵税四錢

文學士 小原無弦譯 **西吟新譯** 定價二十錢 郵税四錢

同 **ユーゴーの詩** 定價三十錢 郵税四錢

同 **花の詩** 定價五十錢 附錄として花言葉 郵税六錢

文學士 上田敏 藤島武二 畫 **海潮音** 定價壹圓 郵税八錢

歐洲詩壇最近の思想と聲調とを紹介し、之を新體の國詩に移植したるものか、荘麗にして婉美なる詞華に奇想幽思を歌ひいでたる象徴詩人の作最も多し○彼邦の評界今なほ之に就いて詳細なる論議に乏しく吾邦の藝苑素より未だ之を傳唱することと無き清新の聲に樂まむとする人よ來てこの集に聽け。

文學士 尾上柴舟 **金帆**（二版） 定價四十錢 郵税四錢

蒲原有明 **春鳥集**（二版） 定價七十錢 郵税六錢

文學士 越廼背山 **滑稽笑話** 定價三十錢 郵税四錢

横瀬夜雨 **花守日記** 定價六十五錢 郵税八錢

文學士蜷川龍史 工學士渡邊清江 **滑稽笑話** 三十錢 税四錢

押川春浪の著

冒險奇譚 **絶島軍艦** 四十五錢 郵税六錢

冒險小說 **怪雲奇星** 價四十錢 郵税六錢

冒險世界 **少年譚** 三十錢 税四錢

發行所 東京本鄕區東片町卅六 **本鄕書院**

賣捌 東京堂 上田屋 前川 至誠堂 大阪 吉岡 杉本 久留米 菊竹

諸専門家講述 ◉ 全部約拾巻

早稲田通俗講話

（一編）理學博士 石川千代松述 **動物講話**

（二編）理學博士 松村任三述 **植物講話**

第五編

歴史講話

（新刊）

池田晃淵、浮田和民講述

此書は内外歴史中の大人物にして一世を代表するに足るべき者若干を選びて委しく其言行事蹟を講述したる者なれば讀者は之に依て史上有益の智識を得ると與に終生の指針たるべき重要の教訓に接すべき也

全一冊
總洋布製美本
正價金六拾錢
郵税金拾錢

第六編

地理講話

（新刊）

農學士志賀重昂講述

此書は地理の研究法と内外地理の一斑とを述へたるものなり其説く所固より事の詳細に亘らずと雖も乾燥なる事實を捉へて之を他の事實に較べ或は過去を忍び未來を想ひて紙上に活動せしめたるもの實に本書獨特の長所とす

全一冊
總洋布製美本
正價金六拾錢
郵税金拾錢

第七編

國語漢文講話

（新刊）

文學士横地清次郎、岡田正美、久保得二講述

此書は初學の爲めに國語漢文の研究方法を示せる者にして或は書籍の選擇研究の順序を論し或は文法上初學の注意すべき要點を示し或は初學者の一般に讀誤れる文字を列ねて其誤を正す等その用意最も懇到なるものなり

全一冊
總洋布製美本
正價金六拾錢
郵税金拾錢

（三編）横山博士 石川學士述 **地文鑛物講話**

（四編）糸左近述 **生理衛生講話**

發行所 東京牛込早稲田 早稲田大學出版部

（發賣所 東京日本橋區本町 博文館）

ものがこんな妙な所へはいつてゐたのであらうか。あゝして誰かゞ匿して置いたものであらうか。變だと思ひ〳〵煤だらけだからそつと椽先へ持ち出して、どうせ汚れついでに手の平ではたきながら裏を返すと、正さままゐる千ゑとかいてある。文だ〳〵と獨りて言つた。八通ある。餘程古いものだと見えて眞ん中を括つた紙縒なぞは醤油で煮しめたやうな色をしてゐる。上包の白紙も眞つ黄になつてゐる。手を洗つて机の所へ持つて上る。探つて見れば奥の方にこんなのがまたいくつかあるかもしれぬと思つたが、穢ないから止めにした。火鉢に絶える火種をついで、じつと此古き戀を見詰て座つた時には、丁度春の日の漫ろ歩きに菜の花の中に岔る、路の何れへ曲ろと躊躇ふやふな心であつた。文の文句が披いて見たい。披かうか披いたら若き昔の二人は羞かしがらう。披かずに置かうかと思案したがそれては矢つ張り心殘りだ。自分の來た手紙を封を切らずに捨てゝ置くやうな心がする。尚迷ひながら紙縒の下へ手を通さうとしたら紙縒は線香でも折るやうにぼくと切れる。

森の繪（小説）一節

寺田寅彦

いつか信さんの部屋へ遊びに行た時、見馴れぬ繪の額がかゝつてゐた。何んだと聞いたら油畫だといつた。其頃田舍では石版刷の油繪は珍らしかつたので、西洋畫といへば學校の臨畫帖より外には見た事のない眼に始めて此油畫を見た時の愉快な感じは唯忘られぬ。何處て買つたかと聞いたら、町の新店にこんな繪や、もつと大きな美しいのが澤山來て居る。ナポレオンの戰爭の繪があつて、それは〳〵よかつたと云ふ。

家へ歸つて夕飯の膳についても繪の事が心をはなれぬ。黄昏に袖無しを羽織つて母上と裏の垣で寒竹筍を拔きながらも繪の事を思つて居た。薄暗いランプの光で寒竹の皮をむきながら美しい繪を思ひ浮べて、淋しい母の横顔を見て居たら心細い樣な氣が胸に吹き入つて睫毛に涙がにじんだ。何故泣くかと母に聞かれてなほ悲しかつた。そんなに欲しくば買つて上げる。男の癖にそんな事ではと諭されて更にしやくり上げた。母は虫押への薬を取り出して呑ませてくれたがあの時の自分の心は今でも説明は出來ぬ。幼く片親の手一つに育つて餘り豊で

ない生活が朧げに胸にしみ浮世の木枯はもう周圍に迫つて居たから、何かの刺戟はすぐに譯のわからぬ悲みを誘ふたのだ。

進水式（寫生文）一節　寒川鼠骨

フロツクコートを着て、シルクハツトを被つた。姿見の前へ立て見たいやうな氣がする。オイ鏡を見せろと家人に命ずる。妻や妹は頻りに笑つてゐる。就中妹はシルクハツトは大キライぢやと言つてニガイ顔をしてゐる。其内に妻が鏡を持つて來る。障子の明るい所へ行つて一寸眺める。成程みんなが笑ふのも道理、シヤクンだ顔が一層シヤクンで見え、帽子は顔の三倍位もある。これでは全く帽子が歩行くやうなものであらう。かゝるべしとは兼て期したる事乍ら、今更のやうに悲しくなつたが仕方がない。思ひ切つて禮儀を正し、威風堂々と門を潜らうとする途端、帽子が格子戸でコツンと敲かれて後へ落ちる。ハ、、、と家人が笑ふ。待つてゐた車屋も笑ひながらそれを拾つて呉れた。

欠び（小説）一節　高濱虚子

文學者になる積りで今或工場の書記をしてゐる男が係長と喧嘩をして其晩酒を飲んで、翌朝工場を休んで、懐手をしたまゝ甲武線に乗つて中野で降りて、効外を歩いて、物音のしない野中に來て、藁に腰かけて欠びをする。此欠びは彼がいつでもよくする欠びであつて、現に今朝下宿の二階の机に凭れてもした欠びであつた。あまり静かなのに厭いて其冬枯の景色に對して種々活動をもとめる。空想的に種々の活動を想像して見る。しまひには其景色の中の一軒家が焼ける。其に満足して下宿に歸りて又欠びをする。といふ趣向なり。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

我文壇また二大作を得たり

夏目漱石氏著
小説鶉籠

（橋口五葉氏裝）

全壹冊實價金壹圓卅錢　郵稅拾四錢

（菊判五百餘頁）

目次

坊っちゃん
二百十日
草枕

島崎藤村氏著
小説綠葉集

（鏑木清方氏畫）

全壹冊實價金六拾五錢　郵稅八錢

（四六判三百六十餘頁）

目次

水彩畫家、朝飯、老孃、藁草履、爺、津輕海峽、椰子の葉陰、及び家畜

發兌元　東京市日本橋通　（振替貯金口座一六一七）　春陽堂



戀を戀する人

國木田獨歩

（一）

秋の初の空は一片の雲もなく晴て、佳い景色である、青年二人は日光の直射を松の大木の蔭によけて、山芝の上に寢轉んで、一人は遠く相模灘を眺め、一人は讀書して居る。場所は伊豆と相模の國境にある某温泉である。

溪流の音が遠く聞ゆるけれど、二人の耳には入らない、甲の心は書中に奪はれ、乙は何事か深く思考に沈んで居る

暫時すると、甲は書籍を草の上に投げ出して、伸をして、大欠をして、

『最早宿へ歸らうか。』

『うん』と應たぎり、乙は見向もしない。すると甲は卷煙草を出して、

『オイ君、燐寸を借せ。』

『うん』と出してやる、そして自分も煙草を出して、甲乙共、のどかに喫煙いだした。

『君は如何思ふ、緣とは何ぞやと言はれたら?』

と思考に沈んで居た乙が靜かに問ふた。

『左樣ね、僕は忘れて了つた。……何とか言つたッけ。』と甲は書籍を拾ひ上げて、何氣なく答へる。

乙は其を横目で見て

『まさか水力電氣論の中には說明してあるまいよ』

『無いとも限らん。』

『あるなら、其内搜して置いて呉れ給へ。』

『よろしい。』

甲乙は無言で煙草を喫つて居る。甲は書籍を拈操つて故意と何か搜して居る風を見せて居たが、

『有つたよ』

『ふん』

『眞實に有つたよ。』

『敎へて呉れ給へ。』

『實はヤッと思ひ出したのだ。圓とは……何だッたけナ……圓とは無限に多數なる正多角形とか何とか

言ッたッけ。』と、眞面目である。

『馬鹿！』

『何んで？』

『大馬鹿！』

『君よりは少ばかり多智な積で居たが。』

『僕の聞いたのは其圓じやァないんだ。緣だ。』

『だから圓だらう。』

『イヤこれは僕が惡かつた、君に向つて發すべき問ではなかつたかも知れない。まァ靜に聞き給へ、僕の問ふたのは……』

『最も活動する自然力を支配する人間は最も冷靜だから安心し給へ。』

『豪いよ。』

『勿論！そこで君の謂ふ所のエンとは？』

『歸らうぢやァないか。歸宿つて夕飯の時、ゆる／＼論ずる事にしよう。』

『サア歸らう！』と甲は水力電氣論を懷中に押こんだ。

かくて仲善き甲乙の靑年は、名ばかり公園の丘を下りて溫泉宿に歸へる。日は西に傾むいて溪の東の山々は目映ゆきばかり輝やいて居る。まだ炎熱いので甲乙は閉口しながら溪流に沿ふた道を上流の方へ

のぼると、右側の函根細工を賣る店先に一人の男が往來を背にして腰をかけ、品物を手にして店の女主人と談話して居るのを見た。見て行き過ぎると、甲が

『今あの店に居たのは大友君じやアなかッたか？』

『僕も、そんな氣がした。』

『後姿が肖て居た、確に大友だ。』

『大友なら宿は大東館だ』

『何故？』

『僕が大東館を撰らんだのは大友君からはなしを聞いたのだもの。』

『それは面白い。』

『きつと面白い。』

と話しながら石の門を入ると、庭樹の間から見へる椽先に十四五の少女が立つて居て、甲乙の姿を見るや

『神崎様！　朝田様！　一寸來て御覧なさいよ。面白い物がありますから。早く來て御覧なさいよ！』と呼ぶ。

『又た蛇が蛙を呑むのじやアありませんか。』と「水力電氣論」を懐にして神崎乙彦が笑ひながら庭樹を右に左に避けて椽先の方へ廻る。少女の室の隣室が二人の室なのである。朝田は玄關口へ廻る。

『ほら妙なものでしよう』と少女の指さす方を見ても別に何も見當らない。神崎はきよろ〳〵しながら

『春子さん、何物も無いぢやアありませんか。』

『ほら其處に妙な物が。‥‥貴樣お眼が惡いのねエ』

『何物です。』

『百日紅の根に丸い石があるでしよう。』

『其れが如何したのです。』

『妙でしよう。』

『何故でしよう』といひながら新工學士神崎は石を拾つて不思議さうに眺める。朝田は此時既に座敷から廻つて椽先に來た。

『オイ朝田、春子さんが此石を妙だらうと言ふが君は何と思ふ。』

『頗る妙と思ふねエ』

『ね朝田樣、妙でしよう。』と少女はにこ〳〵。

『さうですとも、大に妙です。神崎工學士、君は昨夕醉拂らつて春子樣をつかまへてお得意の講義をして居たが忘れたか。』

『ねエ朝田樣！その時、神崎樣が卷煙草の灰を掌にのせて、此灰が貴女には妙と見ませんかと聞から、私は何でもないといふと、だから貴女は駄目だ、凡そ宇宙の物、森羅萬象、妙ならざるはなく、石も木

も此灰としても面白からざるはなし、それを左樣思はないのは科學の神に歸依しないのだからだ、とか何とか、難事しい事をべら／＼何時までも言ふんてすもの。私、眠くなつて了つたわ、だからアーメンと言つたら、貴下怒つちやつたぢあァありませんか。ねェ朝田樣。』

『そうですとも、だから其石は頗る妙、大に面白しと言ふんてすねェ。』

『神崎樣、昨夕の敵打ちよ！』

『たしかに打れました。けれど春子樣、朝田は何時も靜粛で酒も何にも呑まないて、少しも理屈を申しませんからお互に幸福てすよ。』

『否、お二人とも隨分理屈ばかり言ふわ。每晚々々、醉ては討論會を初めますわ！』

甲乙は噴飯して、申し合したやうに湯衣に着かへて浴場に逃げだして了つた。

少女は神崎の捨た石を拾つて、百日紅の樹に倚りかゝつて、西の山の端に沈む夕日を眺めながら小聲て唱歌をうたつて居る。

又た少女の室ては父と思しき品格よき四十二三の紳士が、此宿の若主人を相手に圍碁に夢中て、石事件の騷などは一切知らないてパチ／＼やつて御座る。そして神崎、朝田の二人が浴室へ行くと間もなく十八九の愛嬌のある娘が圍碁の室に來て

『家兄さん、小田原の姉樣が參りました。』と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顏を上げて、やゝ不安な色て。

「よろしい、今ゆく。」

「急用なら中止しませう」と紳士は一寸手を休める。

「何に關ひません、急用といふ程の事じやアないんです。」と若主人は直ぐ盤を見つめて、石を下しつゝ

「今の妹の姉にお正といふのが居たのを御存じでしよう。」

「そうでした、覺えて居ます。可愛らしい佳い娘さんでした。」と紳士も打ちながら答へる。

「そのお正が此春國府津へ嫁いたのです。」

「それはお目出度い。」

「ところが餘りお目出度くないんでしてな。」

「それは又？」

「どういふものか折合が善くありませんで。」

「それは善くない。」

「それで今日來たのも、又何か持上つたのでしよう。」

「それでは早く行く方が可い。……」

「なに、どうせ二晩三晩は宿泊のですから急がないでも可いのです」と平氣で盤に向つて居るので、紳士も其氣になり何時かお正の問題は忘れて了つて居る。

浴室では神崎、朝田の二人が、今夜の討論會は大友が加はるので一倍、春子さんを驚かすだらうと

り合て樂んで居る

（二）

箱相細工の店では大友が種々の談話の末、漸とお正の事に及んで
『それぢやア此二月に嫁入したのだね、隨分遲い方だね。』
『まア遲いはうでしようね。貴下は何時ごろお正さんを御存知で御座います？』
『左樣サ、お正さんが二十位の時だらう、四年前の事だ、だからお正さんは二十四の春嫁いたといふものだ。』
『全く左樣で御座います。』と女主人は言つて、急に聲をひそめて、『處が可憐そうに餘り面白ろく行かないとか大ぶん汾汁があるようで御座います。お正さんは二十四でも未だ若い盛で御座いますが、旦那は五十幾歲とかで、二度目だそうで御座いますから無理も御座いませんよ。』
大友は心に頗る驚いたが別に顏色も變ず、『それは氣の毒だ』と言ひさま直ぐ起ち上つて、『大きにお邪魔をした』とばかり、店を出た。
大友の心には此二三年前來、何卒此世に於て今一度、お正さんに會いたいものだといふ一念が蟠つて居たのである、此女のことを思ふと、悲しい、懷しい情感に堪へ得ないことがある。そして此情想に沈る時は人間の淺間しサから我知らず脫れ出づるやうな心持になる。あたかも野邊にさすらひて秋の月のさやかに照るをしみ〴〵と眺め入る心持と或は似通へるか。さりとて矢も盾もたまらずお正の許に飛で

行くやうだ激越の情は起らないのであつた。たゞ會ひたい。此世で今一度會ひたい。緣あらば、せめて一度此世で會ひたい。とのみ大友は思ひつづけて居た。何ぞ其心根の哀しさや。會ひ度くば幾度にても逢る、又た逢へる筈の情緣あらば如斯な哀しい心根は起らぬものである。別れたる、離れたる親子、兄弟、夫婦、朋友、戀人の仲間の、逢たき情とは全然で異つて居る、「緣あらば此世で今一度會ひたい」との願の深ひ哀は常に大友の心に潛んで居たのである。

或夜大友は二三の友と會食して酒のやゝ廻つた時、斯ういふ事を言つたことがある『僕の知つて居る女でお正さんといふのがあるが、容貌は十人並で、たゞ愛嬌のある女といふに過ないけれど、如何にも柔和な、どちらかと言へば今少はハキ／＼してもと思はるゝ程の性分で、何處までも正直な、同情の深さうな娘である。肉づきまでがふつくりして、温かさうに思はれたが、若し、僕に女房を世話して吳れる者があるなら彼樣のが欲いものだ』

それならば大友はお正さんに戀ひ焦がれて居たかといふと、全然、左樣でない。たゞ大友が其時、一寸と左樣思つた丈けである。

四年前、やはり秋の初であつた。大友が此溫泉場に來て大東館に宿つたのは、避暑の客が大方歸つたので居殘の者は我儘方題、女中の手もすいたので或夕、大友は宿の娘のお正を占領して飮んで居たが、初は戲談のほれたはれた問題が、次第に本物になつて、大友は遂に其時から二

年前の失戀談をはじめた。女中なら「御馳走樣」位でお止になるところが、お正は本氣で聞いて居る、大友は無論眞劍に話して居る

『それほどまでに二人が艱難辛苦してやッと結婚して、一緒になつたかと思ふと間もなく、ポカントと僕を捨てゝ逃げ出して了つたのです』

『まア痛いこと！、それで貴下は如何なさいました。』とお正の眼は最早潤んで居る。

『女に捨てられる男は意久地なしだとの、今では、人の噂も理會りますが、其時の僕は左まで世にすれて居なかつたのです。たゞ夢中です、身も世もあられぬ悲嘆さを堪え忍びながら如何にもして前の通りに爲たいと、恥も外聞もかまはず、出來るだけのことをしたものです。』

『それで駄目なんですか。』

『無論です。』

『まア、』とお正は眼に涙は一ぱい含ませて居る。

『僕が夢中になる丈け、先方は益々冷て了う。終ひには僕を見るもイヤだといふ風になつたのです。』

そして大友は種々と詳細い談話をして、自分が如何ほど其女から侮辱せられたかを語つた。そして彼自身も今更想ひ起して感慨に堪えぬ樣であつた。

『さぞ憎らしかッたてしようねエ、』

『否、憎らしいと其時思ふことが出來るなら左まで苦しくは無いのです。たゞ悲嘆かつたのです。』

お正の兩頰には如何しか涙が靜かに流れて居る。

「今は如何なに思つてお居てゝす」とお正は聲をふるはして聞いた。

「今ですか、今でも憎いとは思つて居ません。けれどもね、お正さん僕が若し彼樣な不幸に會なかつたら、今の僕では無かつたらうと思ふと、殘念で堪らないのです。今日が日まで三年ばかりの大事の月日が、殆ど煙のやうに過つて了いました。僕の心は壞れて了つたのですからねエ」と大友は眼を瞬たいた。

お正ははんけちを眼にあてゝ頭を垂れて了つた。

「まア可いサ、酒でも飮みましよう」と大友は酌を促がして、默つて飮で居ると、隣室に居る川村といふ富豪の子息が、醉た勢で、散歩に出かけやうと誘ふので、大友はお正を連れ、川村は女中三人ばかりを引卒して宿を出た。川村の組は勝手にふざけ散らして先へ行く、大友とお正は相並で靜かに歩む、夜は冷々として既に膚寒く覺ゆる程の季節ゆえ、溪流に沿ふ町はひつそりとして客らしき者の影さへ見えず、月は冴えに冴えて岩に激する流は雪のやうである。

大友とお正は何時か寄添ふて歩みながらも言葉一ツ交さないで居たか、川村の連中が遠く離れて森の彼方で聲がする頃になると、

「眞實に貴下はお可愛そうですねエ」と、突然お正は頭を垂れたまゝ言つた。

「お正さん、お正さん？」

「ハイ」とお正は顏を上げた。双眼涙を含める蒼ざめた顏を月はまともに照らす。

「僕はね、若し彼女がお正さんのやうな柔和い人であつたら、こんな不幸な男にはならなかつたと思ひます。」

「そんな事は、」とお正はうつむいた、そして二人は人家から離れた、礫の多い凸凹道を、靜かに歩んで居る。

「否、僕は眞實に左樣思ひます、何故彼女がお正さんと同じ人で無かつたかと思ひます。」

お正は、そつと大友の顏を見上げた。大友は月影に霞む流の末を見つめて居た。

それから二人は暫時く無言で歩て居ると先へ行つた川村の連中が、がや／＼と騒ぎながら歸つて來たので、一緒に連れ立つて宿に歸へつた。其後三四日大友は滯留して居たけれど、お正には最早、彼の事に就ては一言も言はず、お給仕ごとに樂しく四方山の話を爲て、大友は歸京したのである。

爾來、四年、大友の戀の傷は癒へ、戀人の姿は彼の心から消え去せて了つたけれども、お正には如何かして今一度、縁あらば會ひたいものだと願つて居たのである。

そして來て見ると、兼て期したる事とは言へ、さてお正は既に居ないので、大に失望した上に、お正の身の上の不幸を箱根細工の店で聞かされたので、不快に堪えず、流を泝つて溪の奥まで一人で散歩して見たが少しも面白くない、氣は塞ぐ一方であるから、宿に歸つて、少し夕飯には時刻が早いが、酒を命じた。

（三）

大友は、「用があるなら呼ぶから。」と女中をしりぞけて獨酌で種々の事を考へながら淋びしく飲んで居ると宿の娘が「これをお客樣が」と差出したのは封紙のない手紙である、大友は不審に思ひ、開き見ると、

前略我等兩人當所に於て君を待つこと久しとは申兼候へ共、本日御投宿と聞いて愉快に堪えず、女中に命じて膳部を弊室に御運搬の上、大に語り度く願候

神崎
朝田

大友樣

とあるので、驚いた。何時ごろから來て居るのだと聞くと、娘は一週間ばかり前からと言ふ。直ぐ次の返事を書いて持たしてやつた、

お手紙を見て驚喜仕候、兩君の室は隣室の客を驚す恐あり、小生の室は御覽の如く獨立の離島に候間、徹宵快談するもさまたげず、是非此方へ御出向き下され度待上候

すると二人が、やつて來た？
「君は何處を遍歴つて此處へ來た？」と朝田が座に着くや着かぬに聞く
「イヤ、何處も遍歴らない、東京から直きに來た」
「そこで此夏は？」

「東京に居た」
「何をして？」
「遊んで」
「そいつは下さらなかつたな」
「全くサ。そして君等は如何だ。」
「伊豆の温泉めぐりを為た。」
「面白ろい事が有つたか。」
「隨分有つた。然し同伴者が同伴者だからね。」と神崎の方を向く。神崎はたゞ「フヽン」と笑つたばかり、盃をあげて、ちよつと中の模樣を見て、ぐびり飮んだ。朝田もお構なく
「現に今日も、斯うだ、僕が緣とは何ぞやとの問に何と答へたものだらうと聞くと、先生、この圓と心得て」と疊の上に指先で○を書き
「圓の定義を平氣な顏で暗誦したものだ、君、斯ういふ先生と約一ヶ月半も僕は膳を並て酒を呑だのだから堪ない。」
「それはお互サ」と神崎少しも驚かない。
「然し相かはらず議論は激しかつたらう」と大友はにこ〳〵して問ふた。
「やつたとも」と朝田

『朝田の愚論は僕も少々聞き飽きた』と神崎の一言に朝田は「フヽン」と笑つたばかり。これだから二人が喧嘩を爲ないで一ヶ月以上も旅行が出來たのだと大友は思つた。

三人とも愉快に談じ酒も相當に利いて十一時に及ぶと、朝田、神崎は自室に引上げた、大友は頭を冷す積で外に出た。月は中天に昇つて居る。恰度前年お正と共に散歩した晩と同じてある。然し前年の場所へ行くは却つて思出の種と避けて溪の上へのぼりながら、途々「緣」に就て朝田が說いた處を考へた、「緣」は實に「哀」であると沁み〴〵感じた。

そして構造の大きな農家らしき家の前に來ると、庭先で『左樣なら』と挨拶して此方へ來る女がある、其聲が如何にもお正に似て居るやうに思はれ、つい立どまつて居ると、往來へ出て月の光を正面に向けた顏は確かにお正てある。

『お正さん』と大友は思はず呼んだ。

『大友さんてしよう、』と意外にもお正は平氣で傍へ來たので

『貴女は僕が來て居るの知つて居たのてすか』と驚いて問ふた。

『も少し上の方へのぼりながらお話しませうか。』とお正は小聲にて言ふ

『貴女さへかまはなければ。』

『私はちつとも、かまひませんの。』

てはと前年の如く寄添ふて、溪をのぼる。

「眞實に妙な御緣なのですよ、私は今日、身の上に就て兄に相談があるので、突然に參りますと、妹が小聲で大友さんが來宿てるといふのでせう、‥‥」

「それぢやア貴女は僕より一汽車後で來たのだ。」

「さうなの。それで今夜はごた〳〵して居るから明日お目にかゝる積で居ましたの。」

さて大友はお正に會つたけれど、そして忘れ得ぬ前年の夜と全然く同じな景色に包まれて同じやうに寄添ふて歩るきながらも、別に言ふべき事がない。却てお正は種々の事を話しかける。

「貴下いつかの晩も此樣でしたねえ」

「貴下彼晩のことを憶へて居らつして?」

「憶へて居ますとも。」

「私はね、何にもかも全然憶へて居て、貴下の被仰つた事も皆な覺えて居ますの。」

「僕もさうです。そして今一度貴女に會ひたいとばかり思つて居ました。今度も實は其積で來たのです。無論何家へ嫁いて居て會へる筈は無らうとは思ひましたが、それでも若しかと思ひましてね‥‥」

「私も今一度で可いから是非お目にかゝりたひと思ひつゞけては、彼晩の事を思ひ出して何度泣いたか知れません、‥‥‥ほんとにお嫁になど行かないで兄さんや姉さんを手傳つた方が如何なに可かつたか今では眞實に後悔して居ますのよ。」

大友は初めてお正が自分を戀ひして居たのを知つた、そして自分がお正に會ひたひと思ふのと、お正

が自分に會いたひと願ふのとは意味が違ふと感じた。自分はお正の戀人であるがお正は自分の戀人てない、たゞ自分の戀に深ひ同情を寄せて泣いて呉れた柔しサを戀ひしたのだ。そして自分は戀を戀する人に過ぎないと知つた。實に大友はお正の戀を知ると同時に、自分のお正に對する情の意味を初めて自覺したのてある。

暫時無言て二人は歩いて居たが、大友は斯く感じると、言ひ難き哀情が胸を衝いて來る。

「然しね、お正さん、貴女も一旦嫁いだからには惑はないて一生を送つた方が可しいと僕は思ひます。凡て女の惑からいろんな混雜や悲嘆が出て來るものです。現に僕の事でも彼女が惑ふたからてせう……」

お正はうつ向いたまゝ無言。

「それて今夜は運よくお互に會ふことが出來ましたが、最早二度とは會へませんから言ひます、貴女も身體を大切にして幾久さしく無事てお暮になるやうに……」

お正は袖を眼に當て

「何故會へないのてせうか。」

「會へないものと思つた方が可いだらうと思ひます。」

「それては貴下は最早會ひたいとは思つては下さらないのてすか。」

「決して其樣ことはありません。僕はこれまでも彼女に會ひたいなど夢にも思はなくなりましたが、貴女には會ひたいと思つて居ましたから……」

『それてはお目にかゝる事が出來る縁を待ちませうね』

『ほんとに、さうです。貴女も今言つたやうに、くよ〳〵爲ないて、身體を大事にお暮しなさい。』

『難有う御座います。』

夜の更くるを恐れて二人は後へ返し、溪流に渡せる小橋の袂まで歸つて來ると、橋の向から男女の連が來る。そして橋の中程てすれちがつた。



男は三十五六の若紳士、女は庇髮の二十二三としか見えざる若づくり、大友は一目見て非常に驚いた。足早に橋を渡つて

お正さん〳〵。彼れです。彼の女です。！』

『まア、彼の人

ですか！」

とお正も吃驚して見送る。

「如何して又、こんな處で會つたらう。彼女も必定僕と氣が着いたに違ひない。お正さん僕は明日



朝出發ますよ。」

「まァ 如何して？」

「若し彼女が大東館にでも宿泊つて居たら、僕と白晝出會はすかも知れない。僕は見るのも嫌です。往來て會ふかも知れません如斯な狹い所ですから。」

「會つても知ん顏して居れが可いぢやァ御座いませんか。」

「不愉快です。殊に今度貴女に會つた場合、猶ほ不快です。」

翌朝早大友は大東館を立つた。大友ばかりでなく神崎も朝田も一緒である見送り人の中にはお正も春

子さんも居た。

（完）

小說「針の筵」

藤代素人

嗚ア天下、姑政治の下に壓迫せられ居る一婿殿の鬱憤が、彼が辯護士の法服を纏うて法庭に出づる時、如何に己が負へる事件の辯論に怪焔となりて現るゝか、作者が個中の心理的描寫は、巧に人生の幾微を捉へ、諷刺あり、滑稽あり、將た精緻あり、譯筆の輕妙讀者をして知らず々々同情の深奥に誘はれしむるものあり、翹足して次號の出づるを待て。

尚ほ他に短篇もの一篇併せ掲げらるべし

教界の禍根を論ず

文學博士　松本文三郎

社會政策上より見たる禁酒問題

法學博士　小河滋次郎

右二編は近時論壇に見るの大論議にして、萬丈の光彩八紘を照すの概あり。是れ亦「針の筵」と共に二月文壇の白眉たるを疑はず。

發奮

徳田秋聲

青山巡査は今朝一晝夜の勤勉が濟んで了ふと、初めて自分の體に還つて紫メリンスの辨當売の包を提げながら、朝日の一杯に漲つてゐる大道をさも樂さうにコツ／＼と家の方へ急いで行く。

此時の心持は何時になつても、樂しい。初めて夜勤の辛さを覺えた巡査拜命當初も、其から彼此五年、立番をしながらコクリ／＼と眠つて、辻待の車夫に嗤はれても平氣になつた今日も、忙しい活氣のする町を何か希望てもあるやうに、胸を鼓動させながら家へ歸つてゆく。巡査と云つても青山巡査はなかなか風采の揚つた男て、目こそ少し悄ぼけてゐるが、黒い髭なら凛々しい口元なら、少し横向になつた處などは何如しても大久保利道としか見えぬ。何かの間違からてあらうが、何うも不思議だと言つて巡査仲間ては評判になつてゐる。

其癖非常に氣の優しい方て、大概の事なら見て見ぬ振をしてゐる。泥坊などにも可怕いのかと思ふくらゐ寛大で、書生が喧嘩を吹かけても、笑つて取合はぬ。其だけ胸の廣い男かと看ると然てもない。家ては隨分氣むづかしやの隊長て、又女のやうに針の穴ほどの細い處までも氣が着く。

青山巡査は新開の下通の裏屋に住つてゐる。其て、劍をガチャ／＼言して格子戸を開けて入ると、年三歳になつた男の兒が、洗晒てはあるが垢の着かぬ、キチンとした姿をして、丸ッちく肥つた體を

框へ飛んで來て、神妙に手を突いて、「お歸り。」とお叩頭をする。
と、青山巡査は嫣然して、頭を撫てゝ、優しい聲て、
「お前昨日泣きやしなかつたか。」と訊いてみる。
其から手袋を取つて、靴を脫いで、其靴を些と持上げて減加減を見て、下駄箱の陰に置くと、旋て靴足袋も可笑いくらゐ叮嚀に叩いて中へ收つておく。其ほど儉約家かと思ふと然うでもない。脫れた釦を一々小函に收つておく位の用意のある彼は、時とすると隨分矛盾な事をやつて平氣でゐる。
家へ入ると裏てザブ〳〵細君が洗濯をしてゐる。青山巡査は珍しさうにヅラリと部屋を見過して帽子を壁に懸け、劍を解きながら、奧の書齋へ入つて何にも載つてをらぬ見苦しく剝げた一閑張の古机を見ると、心持顏を曇らして臆病らしく臺所口へ出て行く。此一閑張の机と云ふのが、彼のためには最も古い馴染で志を立てゝ初めて東京へ出て、神田の或八百屋の天井裏を假りて、法律學校へ通つた時、近所の古道具屋から買つて來たのてある。其て學資が續かなくなつて、中途學校を休して巡査になつた時分は、なか〳〵元氣のあつたもので、甚麼苦しい目に逢つても獨學して高等官になる意氣込てあつた。可也勉強家の方て、些と粘着づよい處もあるが、其代り何が何ても氣が變ると云ふ事はなく、巡査から會社員にならうなどゝ計畫んて見た事は一度もない。
細君は所夫の姿を見ると、急に洗つてゐたシャツを投出して、白い金巾の前垂に手を拭き〳〵上つて來る。二十四か五くらゐの小柄の女て、是は或時同僚の細君から周旋された東京府の士族の娘であるが、

青山は不圖其寫眞を見ると、遽にむら〳〵と貰つて見る氣になつて、何の雜作もなく談が纏つて了つた。

着物を着換へて、子供を寵したり、茶盆を拭いたり、灰を均したり、こんな事が一體所好なので、何かしら不斷チョコ〳〵手を働かしてゐると、旋て其處へ食卓が現れる。

青山巡査は箸を取上げる途端、不圖思ついたやうに、「……米は尚だ幾許あるかね。

細君は馴れてゐるので平氣で、「まだ三日は大丈夫あるでせう。」と大見胸て勘定して返辭をする。

青山は些と首を傾げて、「然し今度の米は水引は可也好い筈だが……。」

「水引が可いたつて惡いたつて、何程も違ふものぢやありませんわ。」と細君は突慳貪に言ふ。

「然うかな。」と青山は髭に着いた味噌汁を慌てゝ拭いて、不思議さうに細君の顏を見る。

其でも懲りずまに、「其から酒は一合づつお買ひなさいよ、一合づつ。酒を一升づゝ買ふほど不經濟な事はないつて然う言つてゐたてすよ。」

「誰がそんな事を言つたんてす。」

「山村が然う言つてゐましたよ。」

「山村さんは下戸だから其でも可いか知りませんけれど、宅ぢや然うは行きませんわ。」

「然うかね。然し一合以上飲まんけりや可いだらう。有れば飲むけれど、無ければ飲まんかも知れんさ。」

「必然然うてすか。」

「あゝ斷じて固く然うします。」と青山は力を入れて言つたが、ジロ〳〵と淋しさうに膳の上を見廻し、

「其代り今一合つけて貰ひませう。今日は非常に體か疲れてゐる。いや、昨日くらゐ事故の多かつた日は恐くない。」と言ひながら、熱鬧を究める十字街頭に立つて、何を取扱つたかと云ふ事を考へるともなく考へはじめる。

「そんなに忙しかつたんですか。」と妻は臺所へ立つて酒をゴボ〳〵と銚子に移し、其を持つて來て胴壺に突込む。

青山は急に飯を休めて、にこ〳〵顏で、「先づ電車と電車の間へ危く飛込まうとした按摩を一人救つたらう。彼なぞ、己が立つてゐなからうものなら、其こそ滅茶苦茶に轢かれて了ふところだつた。」

細君は「つまらないー」と云ふ顏で、厄介ですね。」

「其から米をウント積んだ車力を一人說諭してやつたよ。無論動物虐待妨止の趣意に基いて……だが。己が諄々と說いてやつたので、老父非常に感服してをつた。巡査は唯人民の安寧を保護するばかりが職務ぢやないてすよ。一面から言へば風敎を取締るので……」

と言ふとき細君は好い加減で銚子を引揚げて注いでやる。

青山は話の腰を折られながら、其を一口飲み二口飲みして、何か非常に愉快さうであつたが、急に何やら考込む。

「事故は其だけなんてすか。」

「いや肉あると」青山は又一口飮んで、「氣毒な書生があつてね、大塚の方からトボ〳〵と遣つて來てな、己の前へ來て、ピヨコ〳〵お叩頭して小な聲で何か言ひをる。善く聞いてみると、自分は埼玉のものだが、友人を頼つて東京へ來たところ、案外冷淡で大いに失望した、其所持の金もなくなつて宅の方は兄が喧しいから言つてやるだけ莫迦を見るだらうし、昨日も今日も恁して職業を求めてほつき廻つてゐるのだが、其も何うも早急に見着りさうもない。是から深川の何とか云ふ會社が社員を募集してゐると云ふ新聞の職業案内を見たから、其處へ行くのだが、昨日の晩から今まで……其時は二時だ、午後の二時まで饂飩を一杯食つたばかりで、何如にしても行けない……と云ふ始末なんだ。其から己は伊藤と謀つて、金を十五錢くれてやつた。書生は其足で直ぐ飯屋へ飛込んだが、いや、困る時はお互だ。」と青山は今でも氣毒さうな顏をして、

「其の悄然と行つた姿はなかつたよ。然も日の暮てはあるし。寒くはあるし……。あゝ、何如したか。恐く職業は見付らなかつたらうよ。」

細君は不平らしい顏をして、「そんな事を言つて、何だか知れたものぢやありやしない。警察官が那樣ものまで自分で救つてやらなけやならないんですか。」

青山は張合のない顏をしたが、其より默つて了つて手酌でチビ〳〵やる。

其時また憶出して來た。「一つの事故がある。事故と云つても此は私事で……

と云ふのは、是までにも二三度見たが、今日は又一入の感を引いた舊友の姿である。而ももう十三四

年も會はなかつた郷里の舊友で、英語のミーニングを演ると、何時もへどもどして奇想天外より落ちる、間違だらけの讀方をしては敎場中を哄と笑はした事など憶出す。大學へ來ても、平均二年に一度づつ及第の勘定で其が學校を出ると、不思議にも唯の一度で高等文官試驗に及第して、間もなく某省の參事官を拜命した事だけは新聞や官報で見て、是も何かの間違であらうと思つてゐた。其の男が何かすると、車で通つて行くのを此頃暼と見受ける其て其時分は可也間の拔けた顏で、脊ばかりヒヨロ〳〵と高く、長い足を内輪にギクンシヤクンと、歩いてゐたものだが、今見ると、人違ではないかと思ふくらゐ顏に締も出來、體に威重も附いて、其目容に深い光を湛えてゐる。

昨夕見た時は、綺麗な若い女と一緒であつた。而して、花やかな人生の幸福を一人で占めてゞもゐるやうに、大道の眞中を、然も得意さうに押並んで行いてゐるのであつた。

其のパツトした華な二人の姿が目に浮んで來ると、青山巡査はもう口も利かず、ドロンとした目容になつて、深い愁に沈んで了ふ。

其ても手は絕えず猪口と銚子を器械的に取あげてゐる。

好いくらゐ醉が巡つて來ると、そろ〳〵睡眠がさして來る。其處へごろりと横になる。而してうとうとと寢入つて了ふ。

其で目が覺めると、タオルと石鹼箱を提げて表へ出る。

青山巡査は、蘇つたやうに、シヤツキりして湯から歸つて來る。と、何時もの癖で、何處からか釘箱

を取出して來て、昨日の朝見ておいた水口の板戸を直す。天窓の工合を氣にして、莫迦々々しいほど細を引張つたり棒て突ついたりしてゐる。

時とすると古い剃刀を取出して障子張もやる。下駄の齒の毀けた奴を、鉈で切りもする。ランプの心も切る。偶には又七輪の火も煽つてやる。箒を持つて、フッ〳〵と埃を吹きながら、家中隅から隅まで掃いて廻ることもある。

而して日が暮れると、一時間ばかり、何をするともなく机の前に坐つて、下らなく物を考へてゐる。斯くて八時になると、寢室へ入つて來て、威勢よく着物を脱棄て、眞裸になつて節くれ立つた腕節を擦りながら、

「大にやるぞッ」と喚いて急いで寢衣を着る。

（をはり）



こんな人

生田葵

『おい、小使、此處ん許が這麼に散亂つて居るよ。少し整頓て置かなきや否けないぢやないか……。』

運動場の此方の板塀際に立つて眉を顰めながら、折節通り懸りの紺小倉の洋服を着て破れ靴を曳づゝて居る跛足の親爺を見ると横柄に叱り附けるのは、坂河友行と云ふ此の女學校の事務員である、擬ひ琉球紺飛白の綿入れに同じ綿入羽織、小倉袴と云つた出裝で、頭髮をてら〳〵光らして櫛目の痕鮮に奇麗に右に分け、新らしい紺足袋に紅鼻緒の麻裏草履を引懸けて居る。色の淺黑い、扁平い顏立て、拾四度の銀縁の近眼鏡を氣取つた風に懸けては居るが、顏の何處かに締らぬ所があつて、腭の短いのが殊更に目立つ。其の行爲でもあらう。今歳廿四歳であるが、二つばかりは確に老けて見える。

小使を叱つてから、其の眼を運動場の方へと向けたが、折節休憩時間て、廂髮、マナガレツト、桃割と、長い袂を振り動してきやつ〳〵と聲立てゝ騷いて居る。此の學校での上級者らしく、もうお嫁に往つてもいゝ年頃なのが五六人、一團りになつて、これは靜に打語らつて居たが、友行の聲に愕かされて、其方を回顧くと、恰度友行の眼と遭遇つた、變に眼を釣し上げてくす〳〵と偸笑ひし出したのは、派手な紫色の紬小紋の被布を着たので、額に押蔽る樣な束髮を揺り動かして前に立つ、色の黑い、其の仲間では一番に容貌の惡い、而して一番年嵩らしい、肥り拔いて大柄な友達の顏を見た。

『何なの。登美子さん、又笑つ……ていやな方ね……。』

云ふ大柄な女學生も又微笑んで居るのである。すると、登美子の隣りに立つて居る。額の廣い、眼は細くて、鼻の隆い、引締つた口元と一體に權高い顔立ちで、身體の恰好も一體に娉婷とした紫袴は、友行の方を見ると、眼に鋭い光りを見せて。

『また初めて居るよ、嫌い。人を叱ると威いと思つて居るのだらうか、あんな好かない奴つてありやしないわ。』憤るのである。

『花子さんは獨りて怒つて被入るわ。』

大柄なのが云ふと。

『でも貴女……。』

花子の網も鋭い眼を其方に向けて居るのを。おほゝゝゝと遂には聲さへ立てゝ登美子は笑ひ出したが、今一人、其處に立つて居る中で容貌善して、桃割に結つたのは、何かしら羞恥んだ態をしてあらぬ方を向いて居る。

『宮島さん、貴孃が被入るからだわ、ほうら御覽、貴孃を見る樣な見ない態をして、小使ひに吩附けてましやう。』

花子が羞恥む容貌善しに云ふのであつたが、

『でも、私知りませんわ。』

何かしら頬を染めて宮島國子は應へるのであつた。糸織の荒い紫矢飛白の羽織に、銘仙の飛白の著物、振りの大きい袂から友仙縮緬の繻袢の袖がはみ出て居る。紫紺色のかしみやの袴の裾から編上げの靴が見える鹽梅しきと、身裝飾も他の女學生に勝つて居るが、身體附き一體に優嫺て、蓮華草の中に交ちつた菫花とも見らるゝのである。

「知らないつて仰有つても駄目ですわ……おほゝゝゝ。」　笑ふのは登美子である。

「ほんとに失禮な奴つてありやしない。人もあらうに國子さんを……我身知らずですわ。」

花子は猶情知り顔に罵つたが、大柄の不容貌なのは面白い事の様に、默言つて總ての容子を見て居るのである。

「皆さん、お調戲ひなさるのでしやう。那麽事があるもんですか。」

云つて袂から毛糸細工の編懸けを取出して、針を動かしに懸るのであつた、みんなが這麽に自分の事を侮蔑すのを知る様はなく、友行は

「で、お前、此處を片附けたら、些つと校長さんのお宅へ使ひに往つて貰はなきやならないから……。」

帶の間に手を挾み、肩を威からしなら更に小使に聲を懸け、其れから例の如く女學生の群の方へ傲然たる眼を遣つた後、緩い歩調で事務室の方へ這入つて行くのである。後姿見送る跛足の小使の眼は憤りの色に輝いて居たが、不圖心附いて女學生達と眼を見合すと、もう嘲りの影と變つて居た。女學生達ちが更に首をすくめてくす〳〵笑ひだしたのは云ふ迄もない事だ。

小使を叱り附けた後、女學校の事務員は、運動場から直ぐ昇れる廊下へと上り、己れの務めする室へ歸るのであつたが、其の途に一つの難關がある。其れは敎員の詰所で、新らしく來た若い敎師や、女敎師達は、然程此の事務員の心に觸れないか、若しも頭の眞中が禿げて居る學監の聲が部屋の中にしやうものなら、何となく恐怖の色が其の顏に顯はれて、小使を庭で叱り附ける樣な勢は何處へやら、足音さへ盜む樣な調子で歩むのである。然し其の時は學監は何か調物で忙しく、其の聲は聞えなかつたので、友行は幸ひに大跨に歩んで事務室へ歸り得た。

事務室と云ふのは板敷きの六疊で、片一方は、書類をどつさり狹んだ棚が幾段にもなつて設けられ、片一方には、學校用具の見本らしいものが置かれてある。室の中は可なり亂雜で、小使ひを叱る隙で、先づ此の室を整理する方が順序かも知れないんだ、室の前方には開閉の出來る小さい硝子戸がはまつた窓があつて、受附と記されてある。其の下に白木造りの大きな卓机が据えられ、籐で張つて椅子が壹脚、更紗の座蒲團が置かれてあるのが友行が朝の八時出勤して、夕四時に退出する迄の身軀を落附ける場所なのである。部屋へ歸つて來た友行は直ぐ此の椅子の上に腰を落附けたが、先づ心頭に浮ぶ事は、今廊下で學監に遇はなかつたのを幸福と思ふ一事であらう。其れから首尾よくと云はうよりは、上手に美くしい人達ちの前で小使に小言を云ひ得た事であらう。友行は、小使などゝ云ふものは、尤も賤い、無智な人間のする事で、自分の樣に、机に向つて紙を延ばし、硯の墨を磨つて筆に含まし、文字を書く者とは、階級に非常な相違があるから自分達ちの命令する事に、一言でも口返答をする權理はなく、寧ろ

自分達ちに言葉を懸けらるゝのを名譽と心得て、叱つても禮を爲可きものと思ふて居る。其れだのに事實は反して、小使は時々自分に口返答し、反抗の氣勢を示すのみか、其の月給の差が僅々三圓なのを、非常に口惜しい事に思ひ、人世の痛恨事として居るんだもの、首尾よく叱り附け果さるゝと、何かしら勝利した樣に感じ譬へ難ない悦樂を得るのは無理のない事であらう。此の貳つの悦びを考へ果てると、今度は自分が小使に威光を見せて居た時の周圍の光景を思ひ浮べて來た。するともう靜にしては居られず、今朝大枚白銅一個を奮發して買つて來たやまとの紙包を袂から取出し、其の一本を拔いて、唾て容易く減らぬ樣に潤してから、足許に置かれた火鉢の火を點じて、ぽか／＼と喫煙し出した。白い烟がもや／＼と立ち上つて、ふうはり擴がり、軈て消え去る後から、又白い煙を續ける。恐らく今日此の事務員が此の室で事務を取出てからの快樂は此の刹那が頂上であつたらう、消えて行く白い煙の中に美しい女學生の顏を種々と描き、最後に尤も明らかに桃割に結つて、薄化粧を施し、糸織の紫矢飛白の國子の姿、顏を描き出した。微笑は頰の邊りに上つて、眼は細く、何かしら醉つた樣な形ちになつて居る。彼の時、あの女學生の群は自分の方を注視つて、何からしら囁いたり、笑つて居たが、確に自分の事を善く語し合つて、然して或人……あの人に調戲つて居たのだと、深く／＼友行は信じて居るんだ。定めし自分の頭髮を奇麗に梳づられて、艶々しい事や、眼鏡の懸け振りのいゝ事を評して居たのに違い無いと、其れから其れと思ひ浮べて居ると、恰度煙草は盡きた所で、ジヽと音したが、友行の手を燒いたのであつた、あつと空想から醒めて吹殼を火鉢の中へ落したが、其の時卓机の前方の硝子の小窓が明い

て、顔を出したのは　例の小使てある

「坂河さん、其れぢや校長さん許へ往つて參りましやう。」

返辭はせずに友行は佛頂面をして其方を眺め、向きを直して机の上の一封の書を取つて渡すのてあつたが。

「返辭を頂いて來るんだから‥‥。」

云ふ友行の言葉に今度は小使の方て返辭をせなんだ。小窓から姿が消え、足音が消え果てゝ了ふて、友行は舌打を一つして、窓が少し閉め殘されてあるのを、ぴつたり閉て、周圍を眄し、偖以前の座に回つたが、再び樂しい空想の糸を紡ぎ出さうとするらしいのが、歴々と顔に顯はれて居た。先づ初めに國子の顔、其れから、國子の父、母、國子の兄の顏綴いて其の富める家の構えてあつた。成程先刻花子が國子さんを望むなんて分に過ぎて居るはと云つたのは、至當な云ひ分て、國子の家は、此の相模の海に沿ふた、空氣の淸らかな、松林の多い市街ては、第一に數へらるゝ富める家て、父は現今土地の銀行の頭取を務めて居るんだ、其れと較べて友行の家は、隣り街へと通ふ街道筋の端て、背後に藪を控え、横手には野菜を洗ふ流れがある所に建つ、其れは見るも憐な藁葺き屋の小さな家てある。友行の母親存生の頃は表の障子打開かれて、柿が垂下されたり、駄菓子の箱が並べられしたのだが母親が墓場へ往つて了つてからは、店は閉ぢられて父親は手内職の竹籠を編み、友行の妹の今年拾六歳になるのが、母親に代つて總て炊事や、針仕事を爲る傍ら父の職を手傳つて居るんだ、國子の家と此の家を較べると、恰度蟀

蟋を入れる竹籠と、獅子を入れる鐵格子のはまる檻倉程の差があるんだ。然し怜悧な？友行は、草屋根に苔の花が咲いて、柱の歪んだ籠の家には住んで居らない。獅子の檻倉にも匹敵する樣な此の學校内ににある他の一室を自分の居住として居る。然るに校長が算盤づくの上から留守番兼帶に置くんだが、友行は自分が夜も居らねば學校の經營の或事が出來ないからだと公言して居る。此の住居て友行は此の小さい街の人と交際し、此の學校の事務員の資格を正面に翳して人と知合になるんだが、友行の此の室を夜になつてから訪問するのは、町役場の吏員、巡査、其れから學校への出入商人、街の財産家の放蕩息子、少數の中學生てあつたが友行は何故か巡査よりも、町役場の吏員よりも、此の富豪の放蕩息子に交際するのを格段な名譽と思つて居るので、非番の巡査などが遊びに行く場所に困つて、微醉機嫌で、友行の許を訪問する時など、座に那麼輩合が居ると。

『君、之は宮島さんの息子さんだ。』

頗る得意て紹介するのてある。奈何して又交際の手蔓を求めるのか。這麼金持ちの息子はみな友行の友達なのてあるが。然し何處迄友達に前方てして居るか其れは別の問題だ、國子の兄も矢張り這麼態の友行の友達て、夜遊びに往つて、來た人に紹介された事があるに違ひ無い。で、友行には國子とて然程高い處にある花とは思はれず、其れかと云つてつひ手の届く處とも思はないが、其の兄と浮世の出來事の、やれ彼處寺の和尚の頭は圓いとか四角いとか、女順禮が男の乞食と松原で喧嘩して居たとか、海岸の別莊の小間使ひは白粉を濃く塗けるとか話し合ふ中だもの、其の妹に心易い口を利いても差問えはなく、

少し背延して無理すれば手折られる艶麗かな花と思つて居るのである。些と云つて置くが、友行は自分の父親や妹を訪問するのは屹度夜更けて、奈何云ふ了簡か知らないが誰れにも見附けられない樣に裏道を拔けて行くんだ、友行の考えては之が事務員たる可き者が親を訪問する方法で、自己の資格を維持するに必用な手段と思つてるかも知れないんだ。

友行は今椅子に靠れ懸つて、切りに國子の家を想像し、國子の上に想ひを走せて居る。一體國子は奈何自分を思つて居て吳だらう。あの優しい眼、可愛い口元と、自分と遇ふ時には何か語る樣に見えて、自分の胸は其の度に亂れる。小さい胸に自分が戀して居るのを知つて居て吳るだらうか、其れても知らないのであらうか。いや知らない理由はない、小說本にも此方が戀すれば屹度彼方でも感じる樣に書かれてある。知つて居ればこそ、前方でも優しい態度をして見せるのではないか。時折思ひ切つて彼方の家を訪問する時出て來ないのは、娘心の羞恥しいからだ。此の市街であの位ゐ容貌善して、優姻な娘は外には無い。若しも此方の念が屆いて、貳人夫婦になつたら世間の奴は甚麽に羨むだらう。妻は縮緬の羽織に立派な帶、富豪だから指輪は幾つも指に飾るに違い無い。新らしい下駄を穿いて、意氣な肩懸けを首に纏ふ。自分は市樂の羽織に繻袗の帶、上に黑の一本綾の外套を端折つて、鼠の中折帽。貳人が並んで、あの八幡さんの石段を登つて行くとすれば、石を投げ附けられるかも知れない。いや投げ附けられても關はない、自分は然うして見たいのだ。此の女學校へ來る數多くの女學生の中で、容貌で國子に競爭し得るものは一人も無い。身分で競爭し得らるゝのはあの多額納稅議員の肥太の娘一人だ。心立ての

優しさては……自分の眼ては國子さんが一番だと思ふ。其れにしても國子の母親は此の戀愛を許して呉るだらうか――友行はもう貳人の戀は成立して居る樣に考えて居るんだ――戀愛の眞正な事や、自由な事は、完全な教育を受けない身には解しやうは無かろうが、人の善さゝうなあの顏附きては、娘が好きな人ならばと別に異議は無い添はして呉るだらう。然しあの嚴格さうな顏の父親は奈何てあらう？何しろ一代であの身代を搾へ上げて、あれ丈けの家の普請もし、田地田畠の所有主になつたんだが、昔しは何んでも棒を擔いて魚賣の群に交ぢつて居たのださうだ。眼に一丁字も無かつたのが獨學で勉强して、今は町會議員をも務めて居る。容易く自分の才能を認めて娘の婿にして呉るだらうか、いや呉れないとは限らない。あれだけの才覺のある人間だもの。眞實の富の價値の何たるかは知つて居るだらう。富は畢竟ずるに滅亡るもの。基督はソロモンの榮華も野の百合に若かんやと云つて居らるゝ。奢る平家は久しからず。榮枯盛衰は誰人の上にも免れる事が出來ず、飛鳥川昨日の淵は今日の瀨と云ふ言葉もある。富にも增して人の身の上に尊いのは才能である。國子の兄て、自分とは親友の藤一郎と較べて自分が何れ程か智慧分別があるかは、あの父親は屹度知つて居て呉るだらう。自分の友達は總て街の上流てはないが中流て其の交際法や應對振りは知つて居て呉るに違ひ無い。小町に居る海軍大尉と自分は汽車に同乘して對等に話した事もある。決して自分は國子の婚として恥かしいものてないんだと、考えて往つた後は、もう自分は了然國子の婿君となり澄して、其の家の二階の大廣間て、出入商人や大工や左官が自分を取捲いてぺた〳〵とお辭儀する光景を想像して獨り

て微笑んで居ると。

『あの……ちよつくら聞き申していてがすが……。』

卓机の前方の例の小窓の口で、不意に大聲に怒鳴つたものがあつたので、友行は飛び上らんばかりに愕いて眼を瞪つたが、其處には白髪頭の六拾近いと思はるゝ皺だらけの黄色い顔した老婆が、硝子窓越しに此方を覗つて居るのであつた。

『何ですか……。』

樂しい空想を破られた腹立ちに慳貪に云つて身を延して小窓を引明けたが、先方には一向に何とも感ぜぬらしく、眼脂を溜めた眼を瞬いて、

『あの、私し、此の學校に來て居ります岩井はなの縁者のものでがすが、此地え參えりました序に囑托り物頼まれて參りましたて、お氣の毒樣だがちよつくら岩井のおはなさんを呼んで呉れさつしやらねえか……。』

田舍訛りに云ふのであつた。

『岩井はな……三年級の……今授業時間だから少し待つて居て下さい。然しお前さん急ぐんだつたら此處へ置いてお往き、後で渡しといて上げるから……。』　横柄なものゝ云ひ振りだ。

『はあ、俺し話し爲てえ事もあるだあから遇ひてえだが、えら時間入りますだかね？。』

『卅分程だ、そんなら、其處から奧へ行くと小使部屋の隣りに應接室があるから、其處へ往つて待つて

彼入い。』

老媼は彼方へと去つて往つて了ふ。解らない聲合だ、あんな無敎育な不作法なのが居るから、日本も外國から輕蔑されるんだと頭腦の中で思ひながら、偖之から再び樂しい空想に耽けらうか、其れとも名簿を書き變へる仕事に取懸らうかしらと、些と思ひ惱んで居ると、部屋の外の廊下に上草履の音がして、がらりと障子を開けて這入つて來たのは黒木綿の紋附に小倉袴の出裝ち、頭の眞中は奇麗に赤光りに禿げて、周圍に房々と恰度蕈の笠の樣に胡麻鹽髮を生やした、恐ろしい背の高い、巖丈な老人であつた。

框の太い眼鏡越しに、ジロリ四邊を眄した後。

『坂河さん。校長さん許へ遣つた使ひは未だ歸つて來ませんか。』

切口上の押え附けた樣なもの云ひ振りだ。すると友行は電氣に觸れた護謨人形の樣に姿勢を正して突立ち上り。

『はい、未だ歸つて參りません。』　きつぱりした調子で應へる。

『然うですか。お前さん、昨日云つて置いた名簿の書き變へに懸つて居るのでしやうね？』

云つて眼を机の上に向ける。川路勘之進と云つて此の私立女學校の學監で先刻友行が廊下を進む時恐れた其の人である。友行は酷く周章てながらも、幸ひ名簿帳は机の上に擴げてあつたので。

『はい、遣つて居るのです。』

老人は氣味の惡い眼て、其處此處と、眄した後。

「あの屋根の修繕ですがね、昨日屋根屋が持つて來た見積り書は見ましたが、そこですつて……あの中には校舎の方のは這入つて居ないですね。」

「はい、校舎の方は何とも仰有いませんでしたから、屋根屋には何とも申しませんでした。」

「其りや否かん校舎の方も修繕せなくちやならないんです……私之から些と他行するので……あの屋根屋は二時頃に來ると云つて居たんですね。」

「はい。」

「其れてはお前さんに云つて置きますから、來たら能く見さして置いて下さい些と此方へ……。」

老人が腭でしやくつて見せたので、座を立つて友行は後に從ひ、事務室を出て、廊下を前方へ、廣庭へと降りた。大空は絹を張り詰めた樣に美くしう晴れ渡つて、初春の午後の柔い太陽の光線は、雪霜て大分踏み附いられた地面の上に敷いて、霜解けて漉々して居る處もあるが、彼方の荒地の方の去歲から枯れたまゝに殘つて居る雜草の上には來る春を偲ばず一道の生氣が漂うて居る。學校と隣地との境界には背の低い竹垣が結はれて居て、其前方は、海岸へ通ずる松原道て、高く空へと嘯く松の緑り、杖振り面白い間から海神を祟る石の鳥居などが眼に附き、耳を澄さなくとも海の音が聞えて來るんだ。貳人は幾程か庭を歩んて、程よい處に停止つたが、直ぐ眼を上げて、係る景色の中に建つ己が校舎をば見上げた。地方て學校と云へば直ぐ妙なペンキ塗りの二階立の建築を連想するが、此の女學校も矢張り其の例に洩れない、何ても今から拾年程前に、今の校長が東京の或る女學校に教員をして居たが、肺を患ひ、

海岸の土地に轉地療養の必用からして此の街へ來て、其れからつひ思ひ附いて此の女學校は建築られたんだ。最初は見事な白堊塗りて、朝日に輝やく姿の美くしさは、此の小市街の人の眼を愕かしたか、其れから四年目には綠色に塗り變へられ、其れから又今の鰕茶色に去年塗り變へられたんだ。校長の病ひが、拾年の間にいよ〳〵危篤に迫まつて、此の頃ては學校へ出勤する事が出來なくなつて了つた樣に、此の學校も修繕と云ふ藥て保つて居ると云つてい丶。然し此の老學監は少しも那麼事を思つて居ない。街の銀行に續いての大きな建築物だと思つて居るので、松の綠の間から見える鰕茶塗りは餘り感心したものてないなどゝは夢にも思浮ばないのてある。家の棟の少し浪打つ長方形の建物の午後の温い光りの中に立つのを、嚴格な眼て眺めた後。

『坂河さん、其れ彼處てす。三つ目の窓の上の瓦……草が生えてるてしやう。あの邊てすから、能く見る樣に云ふて下さい。此の間の雨の時酷く洩つたさうてすから……。』

『はい。承知しました。來たら能く然う云つて見さしましやう。』

友行の容子は先刻小使を叱つた時とは雲泥の相違て、顏を無理にも引緊めて居る樣に見えた。老學監は之て滿足したらしく、其れから眼を此方へ學校の彼方に擴がつて居る此の街の一部分へと移すのてあつた。小さい河が流れて、其れに沿ふて牧場の幾つ。乳牛の遊び戯むれて居る姿が見える。青い麥畠、慈姑田、其の間に農夫家があつて、其れから別莊態の建物。松の間から顯はれて居る御堂の屋根と、此の小市街を取捲て山の間迄に擴かつて居るのである。

此の景色を見るともう老學監は溜らないと云つた態を見せるのである。其れは女學校も他國に澤山あるが、此の女學校程、美くしい景色に取圍まれて、淸い空氣の地にあるのはないんだと、いつか東京から來た視學官か御世辭に些と云つたのを、堅く信じて居るからである。て、もう先刻友行を事務室に訪れた時の樣な不機嫌な色はなく、眼鏡越しの瞳の色が穩になつて。

『其れては賴みますぞ……。』

云つてすた〳〵と彼方へと、友行が未た何とも云はない前に行つて了つた。後姿見送つて、妙に目瞬し、鼻をも鳴らしたが、續いて引回しかけ、不圖氣か附いた樣に、國子の居る敎場の窓を見上げると、何にも見えずに、きら〳〵と太陽の光線が硝子に反射して眩しく眼を射るのみてあつた。

事務室へ歸つて來て今度こそ、用事に取懸らうと思ひながら時計を見るともう學校の終る迄に拾五分しかない。授業と休息との時間の相圖の鈴は小使の妻君が振るのであるが、學校が全く閉ぢらるゝ修業時ーの鈴のみは友行が振る事となつて居るので、今更新らしい仕事に取懸つてもと、袂から例のやまとを壹本取出して吸ひ初めて居ると。

『兄さん。』　小聲に呼ぶものがある、何處と眙す迄もなく、聲は此の室が外界に通ずる窓口て、友行は近視眼の眼を瞪つて、靑い顏した、亂れ髮の妹が、辨慶縞の繻子の衿の懸つた半纏を着て、頰に笑を含んて立つて居るのを發見した。

『何か用か？』

友行の聲は尖つて居る。然して卓机にひつたり身體を密着け、少し腹這い氣味て、窓口から外の容子を瞶り、飽迄慳貪な、早く歸れがしの情の無い顏をして妹を瞶る。

『これは御隣家から貰つたんですが、御父さんが兄さん許へ持つて往つて上げいと仰有つたから持つて來たんてす。』

妹は兄の冷淡な顏に尠からず悄氣ながらも、手にした四角い包を窓口から入れる。友行は受取つて手取り早く風呂敷の結目を解いて開けて見ると、黑塗りの小さい重箱て、重箱の中には餡ころ餅が五つばかりも這入つて居る。中を見て少しは嬉んで吳るだらうと妹の思ふのに引變へ。友行はチヨツト舌鼓をして。

『何も這麼もの持つて來なくつてもいゝのに‥‥。』

『惡う御座いましたか?。』　妹はもう悸々して居る。

『これなりて置いて行つてもいゝのだらう。』

『はあ‥‥然うして兄さんに、御父さんが御閑てしたら今晩ても來て下さいつて‥‥。』

『諾矣！早く御歸り‥‥。』

妹は逃れる樣にして歸つて行くのを、友行は人に見附けられやしないかと云つた態にきよと〳〵した眼て眄した後椅子へと落附くと、恰度終業時の二時の時計が、寂しい部屋に鳴り渡るのてある。急いて、部屋の片隅にある木の柄の附いてある鈴を握つて部屋の外に出て、力任せに高く、低く振り出した。高

い調子の音は、四邊の空氣を振動して、強く〳〵鳴り響いて、遠くの方迄へも傳はつて行く、三振り、四振り、七振り、拾振りと振つて止めたが、恐らく此の時の友行の心は、宛ら自分が學校に居る總べての人員に背く可からざる命令を傳へて居るんて、學校に居る人達は自分の此の命令て進退するんだと思つてるのかも知れない。此の勞働て、黄色い顔が少し赤ばみ、額に汗を湧かしたが、事實は隱し切れない恥かしい色が浮んて居る。と云ふのは鈴を振るのは奈何も鐵道の驛夫に似て居るからて、命令するんだと心に辯解しながらも、矢張り恥かしいんだ、振り終ると急いて、家の中へと馳込んだが、友行の此の態を垣根越しに覗いて居るものがある、其れは寄宿舍の賄所に勞働いて居る、房州生れの肥太の赧ら顔の赤い毛の見樣見似眞に束髮に結つて居る下女て、友行の鈴を振る姿を尊いものても見る樣に、いつても其の刻限になるとそつと來て、垣根越しに眼を輝かして覗ふ。下駄には菜葉の片が粘り着き、水に濡れてる手て、肩から半ば外した襷きを掴んて呼吸を潛そめて居るんだ。友行は三度の食事とも此の女の世話になつて居るので、時には友行の部屋に來て、打捨てゝある衣物を疊む事などもあるが、友行は那麽時には禮を云はずに恐い顔して睨み附けて居るのてある。然しいくら何ても之を友行の對手に見立てるのは可哀想てあらう　(完)

幸の日

吉野臥城

白羊

湖のほとり、南に廣き平原や、
嫩草の若き香蒸して日にのぼる
糸遊の平和の牧場。——牧人の
我を圍ひ眞白き羊幾頭は、
横臥の淸きとろ眼のとろとろ寢。

飽きがての智慧の樹の實の甘味、
あな甘と貪り食ひの腹痛み、
煩悶の憂き日覺えて、心をも
生身をも殺さむとせし惡日に、
靈祓のくしねぞ靈を搖り醒す。
雜草を引き捨てにける花園や、
草花の活ける姿に匂ふごと、
よみがへる胸はからりと空の晴
大自然の領のもの皆美しく、
さては又、虛心の友のいぢらしく。

玉樓の春を見捨てて夢もなう
糸遊の平和の牧場。——牧人の
我を圍む眞白き羊幾頭が、
横臥の淸きとろ眼のとろとろ寢、
守り居る、嗚呼新しき幸の日よ。

思

わしが住居は大沼のほとり、
朝は朝雁ゆふべは鴫の
聲を聞きつつ物をし思ふ。
土手にのぼれば斗藏が見ゆる、
見ゆる斗藏は紅葉の名所、

丹の頬ゑまひの美し姫は、
來よと手招き領巾うち振れど、
沼の鏡をながめて暮す。

大晦日

電燈の光に浮ぶ石ころの
縞見えて、寒さの迫る夜の町、
乾風は土の皮膚を剝ぎ去ると
吹き荒ぶ。——大晦の町の姿。

風を背に二重外套の千鳥賊は、
凍る星仰ぎて闇に影消えぬ。
俯向きて風を袴の裾膨れ、
提琴を右手に少女は現はれぬ。

惡寒の霜降るらしき夜くだちに、
兩側の店とざしたる格子戶や、
神窟神々ゑらぐとばかりに、
薄灯さす中なる人の寢もやらで。

大路には唯戛々と靴の音に、
眠たげの夜を守る巡査。——並び立つ
烏婆玉の黑き郵便函の黑き影、
寂寞の一分、二分。すだま飛ぶ。

相もなう急ぐ女のからころと
下駄の音、地心に沁みて反響する
死の領の灰白壁に寄り添ひし
車夫は、「夜も遲きに乘りませや」
引き出す腕車がたがた、誘ひ顏。

乘り去りぬ、又も寂寞一二分、
跛ひく乞食うまらに酒の醉、
「安樂の大晦日よ」嘯けば、
掛乞は提灯の晝驅り行く。

短詩五章

秋雨は、秋雨に鳴る鐘の音は、
古き愁に泣けとやら、
ひとり住むなる人に響き來。

榧の木は魔などの潜む木のさまに、
夜風わたればざわざわと
慄くけはひ、月出てにけり。

雪降らぬ國の小春や放牧の
羊と在りて角吹けば、
遠世のごとも思はるるかな。

柊に霰降る日や、かかる日に、
すぎし昔の罪悔いて、
訪ね來まさむ人もしあらば。

冬の日のとみに曇りて霰降る
枯野の夕、わが生の
魔道に墮する一瞬と見ぬ。

和歌　柴舟選

○　小川眞清

涙こそ二なき友なれわびゐして運命はかなむ孤獨の身には

荒壁の千割にまとふ蔓草に鈴蟲鳴くよ山が家の秋

塵の世のまよひに醉へる人の子に醒めよとたびし秋にやはあらぬ

おもひなき君がゑまひを見てしより此の世あるものみな美しき

美しき小鳥の影をしたひつゝ林をめぐる秋晴の里

詩にも會せずわれただかくの慰藉の道にぞ迷ふ堪へぬおもひに

葡萄ぬすむ狐うかがひ竹椽に灯もせず居りぬ月
上る時

「悲」よなどさはわれにせまり來てかゝるやつれ
の胸さいなむや

曇り日や日ぞほの照れるかすかにも望かゝれる
我が世のさまに

ゐばしまや白うさしたる月影にものいはて居る
秋の人かな

○　鷲尾美雲

朝露に鑿屑かをる匠人(しやうじん)の庭より見ゆる秋晴の富
士

月てれば魂奪はれし人の如立ちぬ岡なる大樹の
かげに

時雨るゝや灯冷たき銀屛の中なる君が御咳のこ
ゑす

御寫經の懈怠(けたい)を鼠覗ひて蠟燭ぬすむと夜寒の夜
哉

きみが帆は流るゝ藍に銀色の小波たててのぼり
ぬるかな

藤棚の藤の實ごとに雫して時雨に暮るゝ山の一
つ家

裸木(はだかぎ)のまろうも包む湖に沈む眞白の行く秋の雲

凩や窓に異形(いぎやう)の者が來て覗くと思ひ山の夜半か
な

○　山下里子

思ひませ夕はさむきしをり戸にみ空をあふぐ一
人子ありと

船のつく岸の夕のさびしさに一と目のみ見し沖
の島山

胸にくる潮の如き悲しみは君とあひ見しその夕
より

まひる來てまひるすぎゆく白雲はわがふる里の
山も越ゆらし

冬の日は柱によれるわが髮によわき光をうつつ
になげぬ

○　佐々木白溟

おとなしうおはせど君はいとたかう湖上に立てる城にも似たり

しろがねの光をてらし胸の國今か來ましぬ十善の君

むら芒、雪ふりかゝる、霜月を、馬にていそぐ妹が家かな

秋花に夕日かがよふ野を見ればわが後の世を見る思ひする

君を見し、日に咲きそめて君を見ぬ日にしをれたる秋草の花

夕さればちゝろ虫鳴き、母と姉山繭つむぐ山の家かな

○　大塚東籬

囚(とらは)れの人皆いねて北國の山添牢獄(ひとや)冬の月照る

桃の酒醉うて戯れ男小鼠は雛姫(ひひな)の袖にはたかくれぬる

竹ちかき窓に二人はよりそひぬ雛鶯のうたをかしさに

草花や野に立つ人を美しみ腹這ひながらとる繪筆かな

夢と吹く君がすさびの笛の音に低くうたひぬはぢらひながら

○　西宮白菊

かりがねの一群いまか雲に入りて月に皷を打つ古城かな

忘れじと誓ひし日より永劫の焔にゑがく御名明かに

星の夜やちまたを急ぐ人の子は齡も知らぬ幸ひ人よ

榮もなく葬られたるほらあなのしづくの音に吾年老ひぬ

○　川俣馨紅

わが胸は毒矢に射られ白鳩の草をつぐみて羽叩くに似る

冬薔薇眉美しの見らあまたつどはせてみるまろ

野の館かな

夕鐘は君と別れし椎の木に今もやひびく胸のたか鳴る

○　上村荻江

茸の山提灯さげてたそがれに兄をさがすと妹は來ぬ

夕さびは野山のかげにほの見ゆる家に泣く子の身に迫るらし

小うさぎは可愛き目して餌を乞ひぬ人は嫁ぎし紅梅の家

○　香川里霞

かしづきし戀の御龕の燈明は消えぬ失意の闇は迫りぬ

白熱の焔の川と流れ出てしそのかみ思ふ冷たき石に

○　堀岡芳雲

野をゆけば靜けさおぼえ山ゆけば涙しおぼゆ

冬ちかき國

山あひをたえず落ち來る一溪のせせらぎ寒く魚やせにけり

初冬の窓なつかしや榾の火に小さくうごく人の影あり

○　井野暢光

我袖のさはせまからじ、早う來よちゝとわび啼く雪の日の鳥

○　黒羽箭

長き世の時しりそめぬ去にし日の十年は夢を過ぎて來にし子

クリスマス吟

天てらす黄金小琴の音妙にひびける宵をあれまし丶御子

○　小林狂霞樓

黄に映ゆる灯をなつかしみそぼぬれて野路をたどる秋草の雨

うつら病む人の優さ頰に赤丹して笑むかと秋の

山の日をみぬ

應募和歌は小石川區原町百三十三番地　尾上柴舟宛の事



吹雪

吹雪はれて眼あたらし對山居　松濤樓
松明も人呼ぶ聲も吹雪かな　同
早打ちの箱根へかゝる吹雪かな　同
戰友の一歩に見えぬ吹雪かな　同
鯡積む舟子吹雪に歌ひけり　同
蕃人の家みな低き吹雪かな　同
吹雪夜や廐に床を蹴る音す　同
人二人ひたと添ひ行く吹雪かな　同
天窓の吹雪がつもる板間かな　同
前軍に糧のとどかぬ吹雪かな　同
雪折も聞えずなりし吹雪かな　同
轆馬かき込む土間へ吹雪かな　同
落人や馬上にふぶく笠淺し　同
積藁のどさとくづるゝ吹雪かな　同
吹雪する中に尊し神の杉　鐵香
出る人に雪吹きつくる戸口かな　桂川
頰冠の小女走る吹雪かな　風村
閉め急ぐ窓の戸きしる吹雪かな　菱人
橋越して片側町の吹雪かな　石羊子
半成りの達磨寂しき吹雪かな　竹宇
椋伐つて窓に烈しき吹雪哉　鬼仙
對陣の月餘をやまぬ吹雪哉　方外
吹雪して此夜寒しと日記哉　椿川
御者鞭を鳴らす大路の吹雪かな　荻村
汽車下りて町遙かなる吹雪かな　風六
隣まで行く道絶えし吹雪かな　蓼花
大吹雪戸による雛のあはれなり　萍生
蹣跚と赤垣醉ふて吹雪かな　青城
社遠く隨身門に吹雪かな　天馬
訴の旅に出る日を吹雪かな　履支
新開の並木淋しき吹雪哉　芳雲
渡し場に一夜を賴む吹雪哉　虛舟
南天やよべの吹雪のはかてある　絕壁

吹雪する道より低き小家哉　桃村
滿願のその日はげしき吹雪かな　蔚村
河豚煮て吹雪の一日籠りけり　工刀
傾城の噓思ふ夜の吹雪かな　芳哉
夕吹雪河豚汁會に駈け參ず　同
熊負ふて歸るアイヌに吹雪きけり　血紅星
延燒して郵便を待つ吹雪かな　同
鯨曳く百艘の船吹雪かな　樹公
吹雪く中を放れ馬追ふ人數哉　同
土手三里大河を右に吹雪哉　霞翠
葬の野道にかゝる吹雪哉　同
堂内の鳩をあはれむ吹雪哉　金鷄城
ふり〱て吹雪となりぬ夜となりぬ　同
打ち上げし刀一振や吹雪の夜　淡湖
吹雪の日妹遠く嫁しにけり　同
鹽濱に鳴く百千鳥吹雪哉　寒骨
松明に鮭つく川の吹雪かな　同
牧場の塀の破れを吹雪きけり　同
大市のはてて吹雪となりにけり　泰山
温泉の谷の底鳴りのする吹雪哉　同
地獄谷捲きあげて來る吹雪哉　同

吹雪の日蓑着て丸き男かな　磬花郎
吹雪の日餅ついて居る隣かな　同
晝を灯す吹雪の宿や狸汁　同
温泉に別る日を惡日の吹雪哉　同
吹雪の日日記にしるす旋十句　同
双六や吹雪の驛に二た泊り　磨劒
雪車一つ驛を出て行く吹雪哉　同
乾鮭の荷を解く馱馬に吹雪哉　同
榾明り吹雪のそとを眺め見る　同
熊祭すんで部落の吹雪かな　同

應募句は今回は概して振はず、爲めに選句の標準を下げたるも猶ほ、小魚、春洋、柳子、天酔、鳴蛙樓、ぶさ子、水圃、沐雨、松籟、翩松、烏兵、渓山、東策、雪峰、流水、龍雲、壺翁生その他十數氏の投句は遺憾ながらその一つをも採錄すると叶はざりきなほ御奮勵をのぞむ。

募集課題

摘草　一月十五日限
櫻　二月十五日限

應募句は東京駒込曙町　大谷正信宛の事



近時の外交

XY生

鬼を書くは易くして狗を書くは難し、人の多く知らざるものは、其の書くを謬れるも人之を辨ぜざればなり、今の時眞に外交の狀態を知るものは甚だ鮮し、故に外交當局を罵りて以て無能と做すの議論あるも、世の多くは其の議論を眞なりとして、我が外交全く無能なりとすべし

今の外交當局果して無能にして何事をも成し得ざるか、露都より英京に傳はりて更らに東京に來れる電報によれば、本野ラムスドルフ間の交渉は、日本の要求過大にして、ラスムドルフの苦心甚だしく、露都の人心は露國若し日本の要求に從はすんば、日露の再開戰避けがたしと稱して頗ぶる恂々たるものありといへり、悉く事相を得たるにあらざるべきも、略々日本の態度の甚だ軟弱ならざること丈けは推知し得らる

露國の新聞紙は又滿洲に於ける日本の所置の跋扈に近きを憤慨すること、明治三十三年以後に於て、日本の新聞紙が滿洲に於ける露國の横暴に切齒したると相似たるものあり、日本外交の必らずしも無爲ならざるべきは略々察するに難からず、世或は沙河子に於ける寛城子停車場問題の決定せざりしを以て、外交の無能と爲すものあり、露國に於ても亦其の委員が竟に日本委員を折服せしめ得ざりしを咎むるものあらん、少くも日露孰れか有能無能なる、未だ俄かに判知す可らざる也

想へ、日清戰役の後、約一箇年にして始めて日清通商條約を締結したりしに非ずや、清國敗れたりと雖も、其の國内の紛擾は曾て露國の如く甚だしからざりき、

露國は東亞に於て海陸共に連戰連敗し、殊に日本海々戰の敗狀の如き、幾んど悲慘を極めて、强大國の名譽を地に墜したるのみならず、善後の策未だ立たざるに、國內到る處に叛亂を企つるものあり、要路の顯官を暗殺するもの、改革の檄文を配布するもの、同盟罷工を以て政府及び資本家を苦むるもの、踵を接して相起り、竟に無前の例を以て開きたる國會も、政府と衝突に衝突を重ねて解散せらるゝあり、紛擾に、次ぐに紛擾を以てして、國礎幾んど動搖するに近かりき、此の間にありて日淸通商條約を迅速且つ圓滿に締結するの不可能なる、何ぞ多言を竢て知らんや、否强ひて締結する全く不可能ならざるも、他の敗危に乘ずる酷薄の譏を受くるを奈何せん



樺太日露境界劃定委員宿舍

米國桑港に於ける學童排斥問題に至ては、我れ幸ひに條約上の正條を權利として主張し得るも、學童排斥の如き州法律の爲し得る所にして、畢竟米國の州政府と聯邦政府との間に於ける憲法問題にして、之を解決すること蓋し至難ならざるを得ず、然るも大統領ルーズヴエルト氏をして、銳意之を解決せんと努めしむるに於て、我れは是れ以上外交機能を用ゆべき餘地あらず、若し有らば兵力問題のみ、米國を一擊して武力を以て事を決するあるのみ、而かも其の事の異なる、恐らくば如何なる自稱强硬家と雖も、此の問題を把て米國と開戰せよとはいはざるべし

大連の開放、營口の還附は、清國及び列國の義として感謝し賞賛する處、假令我が義務のみ誠實に履行するを愚直と做すものあるも、義務は義務にして所詮履行せざる可らず、既に履行せざるを得ざる以上、誠實且つ迅速に之を履行するを智なりとせざる可らず、故らに義務の履行を猶豫し遷延して以て誇りとするが如きは、狡猾、横着のみ、假令多少の利益ありとも、今や戰勝後列國の環視嫉視の間に立つ我が國の執るべき態度にはあらじ

吾人の知る所、視る所、信ずる所は斯の如くして、世の多く外交を無能と罵るものに異なれり、必らずしも自から狗を描かざるも、又鬼を描くものには非ず、吾人豈敢て外交當局を辯護せんや、外交當局の眞に非難すべき點は、蓋し世論の未だ言及せざる點にあり。

學生勞働者の割引車

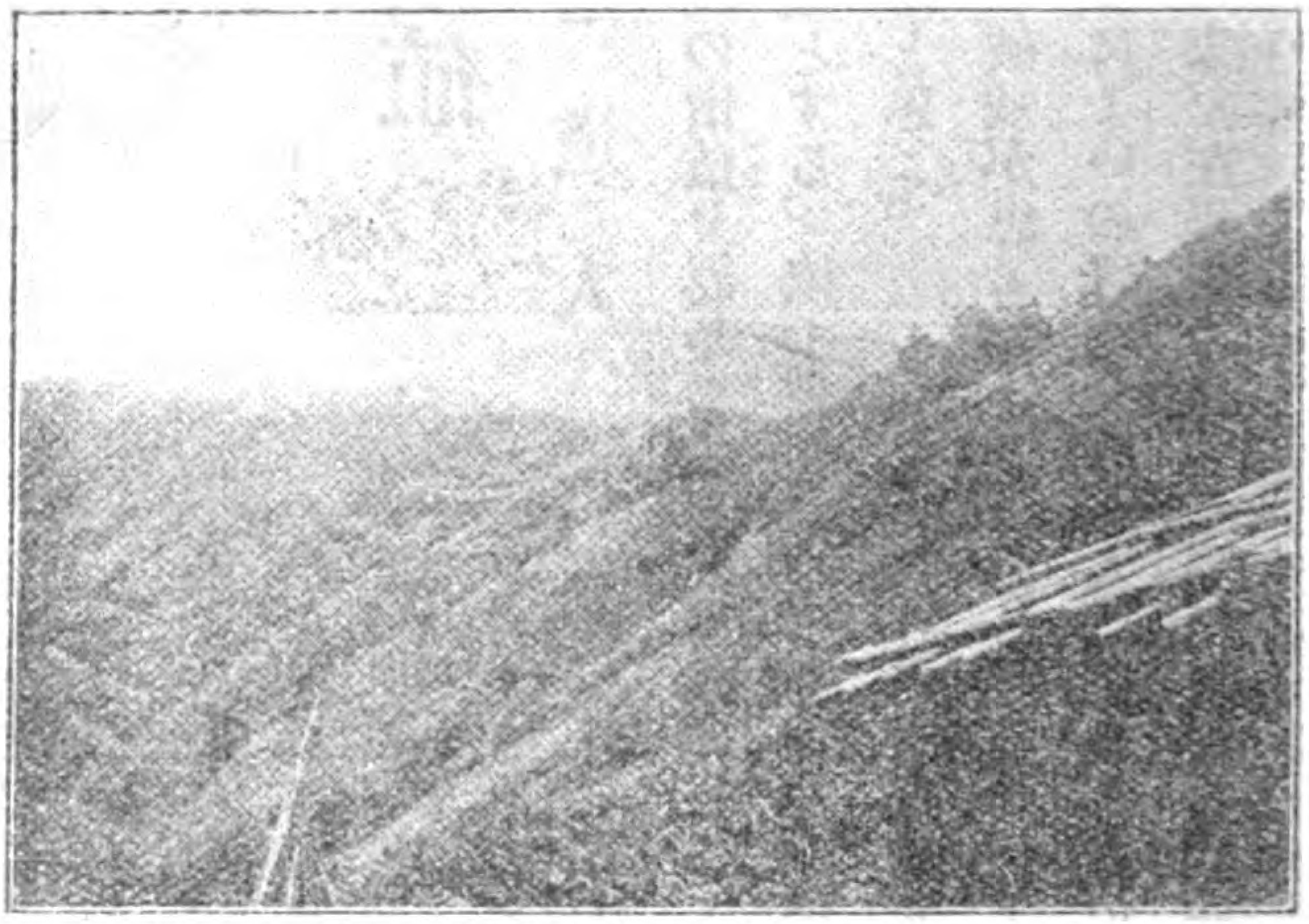
ちよいん生

東京鐵道會社が今回學生勞働者の割引時間を延ばし、從來の七時迄を改めて八時迄としたるは頗る吾人の意を得たり。是れ恐らく輿論の勢力の無視し難きものありての所置にして、いはゞ會社の屈服とも評すべきものならんも、屈服にても相當の道理の前になしたる屈服は寧ろ一種崇高の意を帶び來る。吾人は電車會社のために今回の擧を視賀するもの也

然れども吾人の意を得ざるものも即ち之れなきにあらず。彼の割引車と然らざるものとを一つ置きに發車すること即ち是れ也「午前八時前に乘車する人にして學生勞働者ならざるもの甚だ多し。割引車は即ち此等のために發車するもの也」とは是れ恐らく會社側の辯解ならん。然れども是れたゞ辯解に止りて外に何等の意義をも有せざることは彼等會社側の人の最もよく熟知する所也。何となれば若し彼等の辯解にして事實の眞相を說明せるものとせば、車掌はよく學生勞働者と然らざるものとを區別するを得るか。又は學生勞働者ならざる一般公衆は必らず割引車に乘り込むなきか。二者孰れか一の條件の遂行を豫想せざるべからず。然るに車掌が勞働者と一般公衆とを見分ることの難くして一般公衆も亦割引車の二倍の賃錢を投じて普通車に乘り込む程公德心の發達せるものにあらざることは彼等の明かに知る所なれば也。之を事實に徵し見よ。割引車の中には誰が目にも學生勞働者にあらざるもの多數に乘り　めるも、

車掌は未だ一言の抗議を差出したることなく、而して學生勞働者中には待てども／＼割引車に乘り込む餘地なきに困じ、終に止むなく普通車に乘り込むもの決して少からざるにあらずや。若し惡言を好むものあり、會社はたゞ攻撃の緩和策として學生勞働者割引車なる美名の下に乘客の半數丈けを割引する方針を取れるのみといはるゝも何の辭かあるべき、否な會社は此方針を取れることを自ら賢なりとして誇り居る如く思はる。吾人會社のために甚だ之を惜む。

且つ夫れ割引車を一つおきに出す結果として各割引車の乘客は殆んど鈴生の姿を呈し、乘客の多數押合ひて車臺の前後に溢る。危險も危險也。不便も不便也。例へば車中の人降りんとするも無數の人を押分けて下ること頗る困難に、各停留場に於て非常の時間を費やす。割引を得たる人は少し位の不便を忍ぶとせんも、之に續いて來る普通車に乘りたる人も前の割引車動かざる爲めに非常の手間を取る。從來廿分位にて到着し得る所も今は優に三十分以上の時間を要するに至れり。是れ實に忍ぶべからざるの不便也。



五十度境界線石柱建設用の小舍(頂上の建物)

夫れ電力を費やし、車輛を損じ、鐵軌を磨するの割合は割引車とて普通車とて更に異る所なし。今の如きに至ては割引車は乘客の過多混亂するに困み、普通車の人は運轉の遲滯緩慢なるに迷惑す。若し八時迄の間は悉く割引することゝせば今日の如き遲滯混亂の憂全く一掃するに足るべし。然らば乘客も其便利なるを得として益々增加し、會社の收入に差障りを生ずるが如き心配は萬々なかるべきを信ず。

惟ふに正當なる輿論に從ふは決して屈從にあらず、寧ろ一個の勝利也。會社已に輿論の一部を容れて學生勞働者のために其半分の車臺を八時迄割引す。何ぞ奮勵一番、八時迄の發車を悉く割引することをせざる。人はよく或程度まで忍ぶされど其程度を超ゆれば即ち堪忍袋も暴發せざる能はず若し今の不便の感じにして一層痛切なるに至れば決して會社の利益ならざる、はた名譽ならざる事件の出來せざるを保し難し。吾人は今に於て切に彼等の反省を望む。



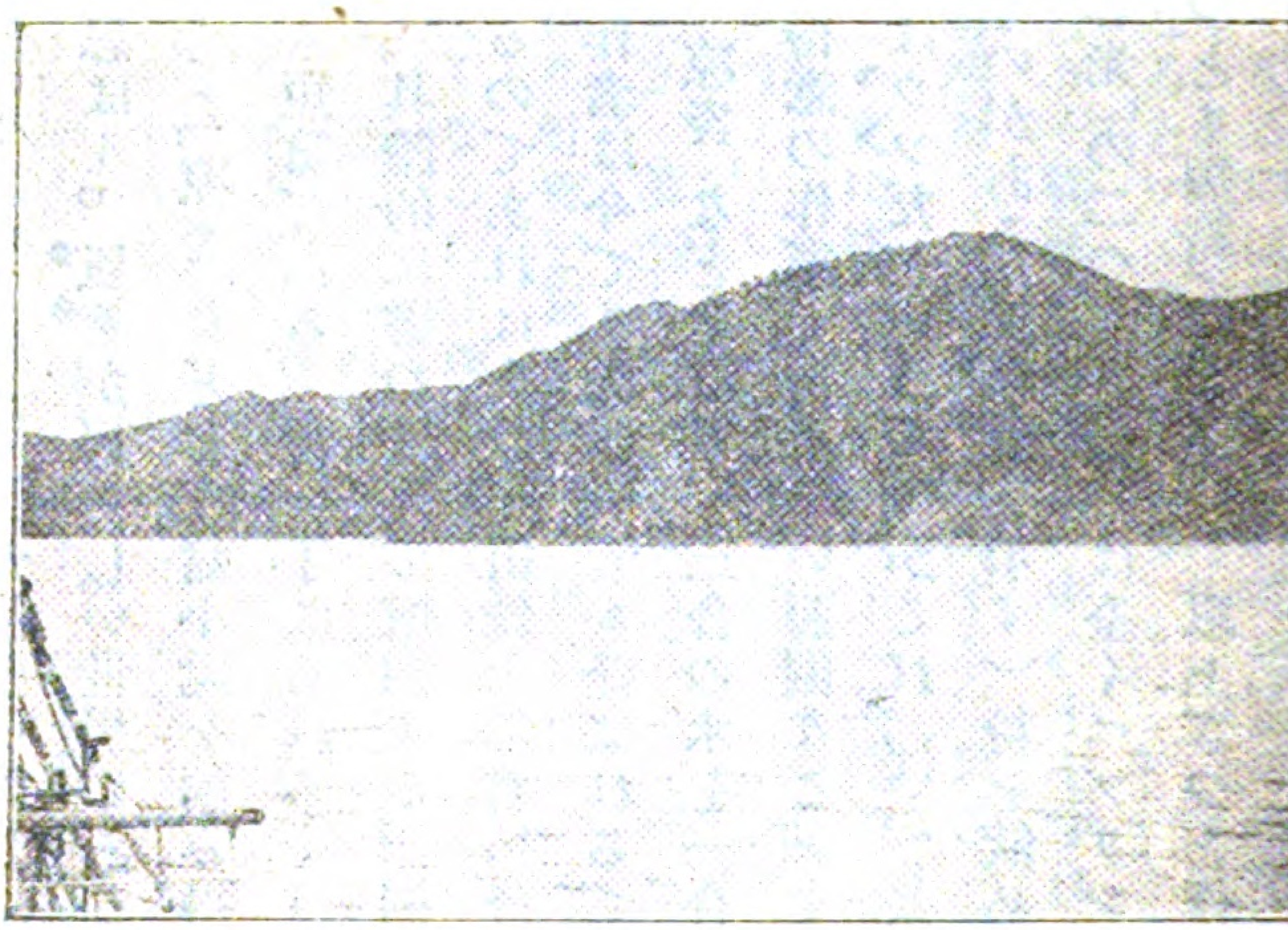
短篇小說の價値

野逸道人

我讀書社會は未だ充分に短篇小說の價値を認めて居らぬ如く見ゆる。吾輩頗る之を遺憾とする。依て玆に數言を列ねて讀者諸君の教を乞はんと思ふ。

島崎藤村嘗て我輩に向つて「僕の破戒が思ふたよりも世の好評を得、賣れ行きも可なりによいのは全く長いからです。國木田君などの價値の未だ左程廣く認められぬのは短いもの許りしか書れないからでせう。僕は國木田君もモウ少し長いものを書かれたらズッと名前が出るだらうと思ひますよ」と話されたことを記臆する。藤村の「破戒」が廣く好評を博し、賣行も頗るよいのは單に長いためばかりだといふのは確かに作家の謙遜である。又獨歩の作物が未だ甚しき人氣(ポピユラリチー)を得ないのを單に短い爲めばかりに歸するのも餘りに獨斷に過ぎるかも知れぬ。けれども吾輩は藤村の言には動かすべからざる眞理を含んで居ることを固く信ずる。長いと短いといふ此二つの文字は頗る我讀書社會の批評眼を左右する魔力を有する。短篇といへば寢床の中にむぐり込みつゝ書けるもの、長篇といへば苦吟三年せざれば出來ぬものゝ様に思ふて居る手合が少(すく)なくない。こんな幼稚な、淺薄な頭の男はチト可愛相だと思ふ。試に作者に逢て正直な所をいはせて見給へ。新聞などの續き物にホントの藝術的良心のみによつて書いて居る人は一人(ひとり)もない。――一人もないといふ言葉が餘り激烈だとならば殆んどないと訂正してもよい――が實際一人もないといふた方が事實に近いと思ふ。みんなどうしたら讀者が喝采して呉れやう、喝采せぬまでも厭きないで呉れやうと苦心して

居る。其結果其日〱を面白く讀ませよう、一回每に山を拵へようとあせッて、りきんで居る樣があり〱と見える。だつてこうなるのも無理はない。考へて見給へ今の文壇は原稿料を枚數で行くだらう。一枚いくら、一頁いくらと勘定する。だから飴細工でもなんでもだら〱と伸ばさなければ甘い飯が食へぬ。甘い飯などゝいふ贅澤は扨置き、ヒヨットすると口が乾上るといふ騷ぎになる。さういふと若い人などは躍氣となつていうだらう。靈と肉と二人の主に使ふるは非也。見よ古への藝術家が身を藝術の壇上に犧牲にして簞食屢々空しきを憂ひざりきを、とか何とか息卷くに違ひない。けれどもそれはまだお若いといはねばならぬ。藝術家だつ



海上より五十度境界線の石柱(白點)を望む

て人間である。已に人間であれば甘いものも食ひたい、美いものも着たい、樂もしたいと思ふのは素より自然であらう。まして小說家などには人一倍情に厚い――むしろ脆い、弱い人間が多い。それに以て來て、妻君に着物をせがまれたり、小兒にお菓子をねだられたりして見給へ。俗人よりももつと早くぐなりとなる。此頃では見ず知らずの女學生などにも大分でれりとなさる先生などもあらせらるゝやうに承はるアハ……。そんな笑談は止にして兎に角今の文壇は長いのを書かなければたんとお金が取れない。今の小說家に聞て見ると「新聞小說を書かなければ飯は食へない」と眞直に白狀する。でその今の長篇小說といふものは大抵新聞小說の二度の

お勤めと來て居る。チツトやソツト筆を入れるかも知れぬが、要するに醜女の白粉、產れた時の姿はそんなに變るものでない、だから吾輩などは新聞小說は大嫌ひ、之を本にしたものも餘り面白いとは思はん。風葉が何時か自分の得意の作物として「五反步」と「凉炎」などを擧げたことがあるが、これは二つとも短篇である。「靑春」はなか〱評判がよいが、風葉は「具體的に書ねばならぬ一番肝心の處が理屈で行て居るのであれは失敗の作です」とかいうて居た。だから作者は今でも矢張り佳作として「靑春」よりも「五反步」「凉炎」などを取るかも知れんと思ふ。春葉なども短篇得意の作家であるが、先づ短篇によいものが出なくてはウソだというて居る。春葉の短篇にはなか〱よいものがある。又秋聲も自分の氣に入りの作は「臨終」と「春光」の二つだと吾輩に語たことがあつたが、これも二つとも短篇である。夫れから獨步。此人の作は全體悉く短篇。短篇のみで名も賣た人は先づ此人ばかりだといつてよい。此人に逢て短篇小說の功能を述べさせて見給へ。なか〱の辯者て、薄い唇でぺら〱とうまく饒舌る。「今の世界は忙しい世界だ、汽車もある、電車もある。文字を讀む暇が惜しいので、畫報も出來た。こんなめまぐるしい程忙しい世界にあつて、何の時間あつてだら〱と長い長篇小說を讀み得るか、電車の中でも汽車の中でも讀み了はられるやうな短篇小說の必要は世の進步と比例して增加する。例へば僕の「巡査」ですね、君等が巡査山田銑太郎君に逢はうと思つたら僅か十頁を讀めば何時でも逢はれるでせう。昔は風邪を引けば葛根湯といふ三合の水を一合に煎じ詰めて飮むとかいふ馬鹿〱しい面倒なことをしたものだが、今はペプリンといふ僅かこれつぱかしの(先生指尖を以てぽつつりといふ意を示す)粉を飮めば葛根湯以上の効能がある。「短篇小說は全くペプリンですね」といふやうの氣焔を吐く。

以上ざつと作家の短篇小說に對する態度を敍述して見たが讀者は略ぼ之によつて短篇小說の價値の決して少からざることを了せられたらうと思ふ。尤も短篇小說を尊ぶ餘りに長篇小說の長所も價値も全くないやう

に斷ずるのは甚だいかん。いかん所でない、そんな馬鹿な議論をするのは少しキ印かも知れぬ。世の中が忙しくなれば長いものを讀む暇の少なくなるのは獨歩のお說の通りである。けれども忙しくなるといふのは即ち世の中の複雜となるといふ意味だらう。複雜な社會を寫すにはどうしても長くなるのは自然だ。一篇を一章に縮め、一章を一節に約し、一節を一文に略し、一文を一句に含め、一句の意を一語に寓するといふ簡潔な書き方もあらう。又中心を捉へるとか、眞髓を穿つとかいふ方法もあらう。けれども複雜な社會を寫す文字は單純な社會を寫すよりも比較的長くなるのは理の當然である。だから一方からいへば世が進むに連れて益々長篇小說の必要があるといふ議論も立つ位だ。若し「長篇と短篇」といふ題を揭げて各其長短を較し、得失を論じ、其本領及び材料との關係等を研究したら、優に一冊の書をなすことが出來やうと思ふ。然しそんな大きなことは他日に讓てこゝには只短篇小說の決して侮るべからざることをチョット書いて見た丈けである。吾輩は風葉、春葉、秋聲等の諸氏が其最も得意と信ずる短篇二三宛を集めて世間に問うて見るのも、是れ亦短篇の價値を世に認めしむる一助ともならうと思ふ。

夫れ十七字にも詩境を拓き、三十一文字にも詩情を寓するに足る。況んや短篇小說短しと雖も大抵は五千以上一萬位の文字を使て居る。此文字を以て若し詩境を拓き、詩情を惹き起す能はずとならば其人已に詩才なきことを暴露したるものといはねばならぬ。何にも殊更にモーパッサンを引いたり、ホーソオンを擔いたり、ドーデーの「水車だより」を引合に出したりして短篇小說の價値を云々する如きペダントを學ぶにも及ぶまい。我現代の作家にして已に數篇の成功せる短篇あり、作家中亦此方面に腕を揮はんとする人少からざるも、我讀書社會は未だ明かに其價値を認識せず從て出版業者も亦其苦心と價値とをよし知つて居しも、實行上之に多大の報酬をなし能はざる如き現況を遺憾とする餘り、以上の數言を發した次第である。

『月に立つ影』を讀む

樗陰生

宙外の「月に立つ影」は近頃面白く讀んだ。啻に宙外作中の傑出したるものたるに止らず、又丙午文壇に於ける一佳作といふてよからう。

一篇の荒筋をいふと、三栖(みすかつじ)克司といふ越後の國は岩船郡朝日鑛山の所有主——世路の幾辛酸を嘗めた、極めて同情(おもひやり)の厚い、道理の分つた、義理を重んずる、殊に勞働者などを非常に慇む敬服すべき人物——の長女桃與は、其父の親友寒河江(さがえ)大佐の一子愼治と幼馴染で、ゆく／＼は夫婦(いつしよ)にせんなど双方の親達も話合つて居つたが、愼治が工業學校を卒業する頃にはさう屢々往來することもならず、二人の交情は自然疎くなり勝ちであつたが、偶々一貴公子が桃與の機嫌を取て居るのを見、而かも其貴公子が某子爵の若様で桃與とは已に婚約の濟んで居る間であるといふ噂を聞いて、非常に不快に感じて桃與のことはふつちりと思ひ切た。否な思ひ切たことにしたのである。其後間もなく學校を卒業して浦賀鐵工所に入つたが、桃與の一件が動機となつたものか、性來の負けず嫌ひの剛情我慢の性質は益々極端に走りて、輕薄の人物が多いのが癪に障り、一にも規則、二にも規則といふ窮屈なのが面白からず、兎角鬱々として暮らして居る。一夜人足仲間の酒宴に交つて、其偽りなく飾りなき有様が氣に入つて終に爛醉して前後も知らず、荷車に乗せられて某の別莊に連れ込まれたが、其別莊に一人の老父と共に留守番をして居るお安といふ女——嘗ては人の妾までしたことがあつたが其旦那の金持自慢と厭味の多きを厭うて逃げて來た、至極情の厚い女と妙に氣が合つて次第に深い關係となつて了ふ其れで工場の方も居づらくなつて。暫らくお安と別れて職業を探すに出る。けれども思はしい職業とてもなく、友人の所に半分厄介の姿で居ると運あしく大病に罹る。止むを得ずお安を呼ぶ、お安は急いで來て熱心に介抱する。幸にも病氣は全快したが、此度はお安が肺炎になつてとう／＼死んで了ふ。再び處々方々に流浪して種々様々の經驗を嘗める。終に流れ／＼て朝日鑛山に來て坑穴の中の仕事をなし、お牛といふ下女兼女房といふべき女と暮らして居る。折から朝日鑛山の擴張工事落成式に臨み、兼て鑛夫の慰勞をなさんが爲めに該鑛山に來た三栖克司は我親友——而かも二百三高地の激戰に戰死したる亡友寒河江大佐の一子が圖らず自分の鑛山に來て居るのに逢ひ、大佐が戰地に出發する前夜、自分と故郷なる縦川の流に輕舸を浮べて今は行方知れざる一子愼治の身の上を頼む——、どうぞ君の桃與さんを呉れて愼治を眞人間にして呉れ、呉れ／＼も頼むというた遺託を思ひ出して、色々愼治の改心を促したが執拗なる愼治はなか／＼從へさうもない。で強て勸むるのは却て反抗の氣を高むる。靜かに時日を與へて反省せしめやうと决心して相談あらば何時でも應ずる。决して遠慮をしてはいかんといふ一語を殘して別れる其後克司は愼治の母——大佐に死なれ愼治に捨てられてたゞ一人淋しく質朴に暮らして居るお槙といふ大佐の未亡人に逢うて又再び桃與さんを貰ふ事が出來れば愼治の身持も直らう。どうぞ寒河江一家を

助けたと思うて桃與さんを貰ひたいとの懇望にあふ。大佐の遺託を思ひ、大佐の肖像を見て克司の心頼りに動く。けれども重大の事であるから自分の一了見でも極める譯にもゆかんと思うてハッキリした答をせずに歸る。て家に歸て自分の妻——病身で終始床に寢て居る妻にそれとなく寒河江のことを相談する。妻は大の愼治贔負で桃與を呉れることを主張する。桃與を呉れさへすればキット愼治は眞人間になる。エライことをすると信じて居る。桃與は學もあり容貌もよし、其上父は財産家なれば四方より縁談湧くが如く、殊に氏家と諏訪とかいふ二人のチヤキ／＼連は桃與の結婚爭から刄物三昧に及んだ程である。けれども此父にして此子あり、桃與は流石に克司の娘たるに耻ぢざる人物である。今の浮薄な女學生など丶違つて靜淑な娘である。寒河江一家の有樣を聞て、兩親の衷情を察して終に寒河江の養女とならんことを承諾する。彼女の心中には寒河江家を起し、愼治を眞人間にせんとの義俠心もある。實にけなげなる殊勝なる心掛の娘だ。それで某國大統領に花環を捧げる晴れの舞臺の名譽ある役目をお名殘として、如何なる玉の輿に乘るも儘なる地位を捨て、住み馴れし東京を後にして草深き越後に去て寒河江の養女となり、お槇と共に愼治の歸宅を心待にして淋しく暮らして居る。愼治は朝日鑛山の生活にも厭き／＼して又お牛と一所に諸方をうろついた末、暫時鐵道の修繕工事に手傳をして居る。けれどもだん／＼仕事をするのが嫌になつて毎日ゴロ／＼寢て居る。食ふ物もないのでお牛は泣く。自分も腹が減つて堪らない。けれども働くのは向更ら嫌だ。腹が益々減つて餓死に相だ。

家主から貰つた粉餅團子をお安と二人で摑み合つて食ふといふ境遇になる。お牛は益々泣く。氣の毒だとも思はれて「己にやア當はず、飯にありつけさうな所を搜して何處へでも勝手に行け」と優しく悟す。實際今は行かれた方が荷厄介がなくてよいやうに思ふ。自分の家主の倅兵作といふのは大の勉強家で快活に勞働して何の心配もなく見える。時折はこれが羨しいと思ふ。この方が人間の道かも知れぬとも考へる。彼の心は長き／＼流浪の苦みと悲みとを思うて身の行末を案ずることもないではない。確かに生活の一回轉期に達したのである。又六十以上になる高慢ちきな老人の慘死は彼をして一層自分の過去を反省せしめる。數日間の餓へに苦んだお牛は「食へさうな所へ勝手に行けと言はッしやるから參りやすぞ。長々お世話に成りやした」と書いた附木を柱の割目に挿して去つて了ふ。行かれて見ると一時腹立たしい氣味もあつたが、惡意あつて捨てたのでないので寧ろ可愛相なものだと思ふ。然しお牛が去つてからます／＼淋しさを感ずる。故郷には桃與が來て居るといふことを風の便りに聞く、然しそんな筈はないと疑ふ。時々は故郷の事を思ひ出して歸へらうかとも思ふ、然し性來の瘦我慢祟りをなして容易く歸る氣になれぬ。一日高山の岩を割く人夫共を見て、人間の力も可怖しいものだ、大に人世に奮鬪せうかとの考を起す。お槇と桃與とは愼治が獨り淋しく暮らして居るといふ噂さを聞て二人打揃うて迎へに出掛けることにしたといふ處で終つて居る。

前篇後篇合せて四百頁、決して短くはない小説である。「東京日々」に

連載せられたのを纏めたのである。以上はホンの梗概であつて、讀んだ人には詰らなく、讀まぬ人には大體の結構さへ明かでないことを恐れる。愼治と桃與と逢へる後の生涯如何。是れ亦最も興味ある一篇を成すべきものであつて、思ふに著書は續篇として他日公にする計畫中であらうと信ずる。吾輩は次に敢て批評といはず、一讀の際に得た一二の偶感を述べて見やうと思ふ。

第一に此小説の長所と思ふのは如何にも滋味の多いことである。人情を嚙み碎いた、世態を知り拔いた、老實なるお伯父さんが惇々として浮世譚、人情談をして居る如く見ゆる。躍るが如き狂熱を沸かす所はない酔ふが如き詩情を惹き起す所も少くない。けれども嚙みしめればしむる程、いふべからざる滋味が出て來る。蓋し老實の二字最も此作を評するに適する言葉と思ふ。又自然の景物を寫す筆なども淡雅にして情趣掬すべき處多い。

第二に此小説は普通の人間を描えて居る處が面白い。一體今の小説家の好んで描く人物は大抵センセーショナルならざれば即ちセンチメンタルなるが多く、彼等小説中の人物は全く小説に書かれる爲めに生れ來た人物の如く見ゆる。然るに此「月に立つ影」は此通有の弱點を超脱して小說を離れて生活する人物を描えて居るのが氣に入つた。例へば三栖克司でも寒河江愼治でも確かに小説に書かれる爲めに生きて居る人物でない。克司は氏の嘗て書いた「公民」の面影があつて人をしてそゞろに公共心の如何に尊敬すべきかを感ぜしむる。又愼治は流浪の生活を送ては居るがゴルキーの書く人物の如く、野性獸性の塊りではない。人情もあれば常識もある。いやに戀愛論などをやる青年を書く小説よりも、モット深く現代の人心に觸れて居るやうな氣がする。

又第三に此小説に感じたのは此作者在來の描寫に比して非常なる進步をなして居ることである。固より天外などの書き方に比べては見劣りのする處は少くない。けれども後篇の描寫は餘程よく出來て居る。殊に泥醉から醒めてお安と問答するあたりは活きて居るやうに思ふ。又終りの兵作との談話、老人の慘死、高山の岩割の如きも、此作者在來の書き方では或は理義の詮議に落ち相な所だが、此篇には如何にも自然に詩化されて描寫されて、愼治の思想に一轉換を與ふる強い動機となつて居るのが面白い。

要するに氏の小説は泣かせず、笑はせず、常に靜かに考へしめる。靜かに考へしめて人生の意味如何、と反省せしめる。若し泣くことがあれば、しんみりと考へた結果、人生の意味其物に零す涙であつて小説に落す涙ではない。又人生の光明、人心の高潔なるに感激して、落涙することもある。笑ふことに至ては殆んとない。何處までも眞摯であつて嚴肅である。吾輩は人を面白がらせんとする小説の餘りに多き今日、寧ろ此種の作物を嬉しく思ふ。殊に「家庭小説」といふ銘がある許りて家庭に亂入して居る幼稚なる戀愛小說の代りにかゝる作物を讀ましめたいと思ふ。

正直にいへは吾輩は宙外の作物を嫌ひてあつた。「新機軸」も面白いと

思はず「めぐる泡」の如きはつまらんと思ふた。宙外は創作を斷念すべしと迄思うたことさへある。然し此篇を讀むに及んで、氏が今の一代の風潮以外、別に儼乎たる一家の立脚地を有し、又有し得るに充分なる人たることを深く感ぜしめた。吾人は此篇を以て最も老實にして滋味ある一佳作として我讀書界に推奬すると同時に、益々作者の奮勵して創作に專らならんことを希望するものである。

次號よりは勉めて前月の文壇に於ける注目すべき作物の紹介又は批評をなし、高尚なる趣味の普及鼓吹を圖らんと欲す



我輩も猫である

はくや

我輩も猫である、名も無論未だない、

我輩の今迄の歴史と云つては實に簡單なものだ、何を云ふにも生れてまだ二ヶ月程にしかならぬ、而かも世の常の如く生れて世の常の如く生長したれば、又世の常の如く此の家に養はれたまでゞある、從て世の中の空氣を呼吸すること僅かに六十餘日、時間にした處で千四百四十時間と、直ちに暗算出來る位の事だからお恥しい次第だが淺學無智の甚だしきものである

然しながら今の主人の處へ來てから、日は甚だ淺いけれども、比較的多くの事を見聞した、主人は醫者で

あつて文學好きである、文學好きでまた話し好きである、夜になると長火鉢の處へ、一家中が集つて勝手な事を話し合ふ、家族と云つては主人と妻君と、主人の舍弟君と肥つた下女君と、我輩との五人である、

この毎夜々々の話に依つて、貫一の心中も察した、宮の後悔も不愍と思つた、浪子さんも氣の毒と思つた、欽也にも困ると思つた、繁さんも可愛さうと思つた、苦沙彌君の猫にも逢いたいと思つた、時には鼻子さんのちんを羨みもした、

我輩は子供ながら既にこの位の學問はした、まだこの外に主人の人生觀も聞いた、妻君の社會觀も聞いた一歩退いては下女君のお湯屋觀も聞いた、我輩はまだ苦沙彌君の猫と共に、大に月並を笑ふに至らずとも、少くとも我輩の年配の猫の中では、兎に角一見識あるつもりだ、然しまだ子供だけに社會の信用がないのは殘念でたまらぬ、

切めて愚人を驚かす程の履歴でもあつたらとも思ふが、これは前にも云ふ通り何の記すべき事もない、負惜みを云へば世の常の如く生れた丈けに幸ひ竹藪の中へ投り込まれて、眼を廻す程の難義もせず、又恐るべき書生と云ふものゝ暴言をも聞かずに濟んだのは、非常に幸福だつたとても云ふより外に、差し當り自らを慰める言葉もない、

自らにても慰めらるゝは聽て人からも慰めらるゝ初めである、と云ふやうな論法を荒尾讓介君から學んだ、實際お袋が鶴を喰つたとか小判を招いたとか云ふやうな、月並な夢を見て孕んだのでないのは有難い、苦沙彌君とこの友達が藪の中へ投り込まれたのも、最う少々陳腐に屬する生立ちだ、然し世間では兎角變則に生れて變則に生長したものを、歡迎する傾向がある、特に人間は斯う云ふものを喜ぶ好奇心が多い、先夜も下女君が緣日でけつかいを見て來たと綿密な説明と批評とを施して居た、それ程結構なものなら、自分でも產めば可いに、けつかいとはどんなものか我輩はまだ見た事はないが、下女君の説明で承知した處に依ると決して珍重すべき性質のものではないらしい、美

觀も起らなければ詩的趣味もない、寧ろ不快の感が起りさうだ、下女君も胸が惡くなつたと自白した、そんな不快なものを錢を出して見るに至つては、人間の好奇心にも呆れたものだと思ふ、苦沙彌君の猫を、餅を喰つて踊を踊つたと笑ふなら、我輩も亦錢を出して胸を惡くした下女君を笑はずには居られぬ、

既に苦沙彌とこの友達とは其生立ちが違ふだけに、初めて人間を見た時の感も違ふ、我輩が初めて眼が開いて馬鹿々々しく明るい太陽と云ふものを知つた時、ハッと思つて一種異樣の心持がした、どんな心持かと聞かれても說明が出來かねる、强いて云へば愉快に近いものだ、美妙と云ふ言葉が斯う云ふ時にも用ひられるとすれば、その言葉で間に合せたい、次に心を落付けて周圍の狀態を見廻す内に、我輩はぼろの中にうごめいて居る我輩の兄弟を見出した時に、又妙に心臟が躍つた、唯に兄弟ばかりでなく其中に我輩自身をも發見した時には、何だかお可笑しいやうな極りが惡いやうな心持もした、初めて眼が開いて世界のものを初めて見た時、矢張り人間と云ふものも見た、成程顏ののつぺりした妙なものだと云ふ感も、多少我輩にも起らぬではなかつたが、何よりもかよりも先づ其づうたいの大きいのに驚いた、我輩は易々と二本指でつまみあげられて生溫い掌に乘せられた、僅か掌だけの面積ですら我輩に取つては、人間に對する疊一枚位の比例に相當した、同時に其鼻息の恐しいにも驚いた、山嵐ぢやない鼻嵐だと思つた、實際此鼻嵐を正面からあびせかけられた時には、我輩は非常に呼吸困難を感ぜざるを得なかつた、然し今日では我輩も大に生長したし、又人間も見馴れたので、そんな感もなくなつた、鼻嵐もそれ程恐るべきものとも思はぬ、然し時々口を突起してフーッと吹かれるには大に閉口する、特にお尻の方を吹かれるとゾッと總身に染み渡つて、何とも云へぬ嫌やな氣持になる、

扨て我輩も亦苦沙彌君とこの友達をまねて、一とつ人間と云ふものを觀察して見やうかな、然し猫の身分で人間を觀察した處で、西洋人が日本人を觀察したよ

りは、遙に滑稽な馬鹿々々しい、誤つた、轉倒した、はき違えた觀察をして、反つて人間から冷笑を招くに過ぎない、此の如きは唯に我輩一人の器量を下げるばかりでなく、引いては吾人猫類の對面をも穢し、苦沙彌君とこの先輩にも迷惑を掛ける次第だから、この大膽な計畫は絶念しよう、然し人間の日常の言行を寫生する丈けなら、假令多少の誤謬はあるとしても、まさかに鷺を鴉と間違ひぬすまい、

人間を寫生すると大きく出ても、實は我輩未だ人間には至つて知己が少ない、數ひて見ると、主人と妻君と舍弟と下女君と、主人の親しくする四五輩と妻君のお仲好しの一二人と舍弟君の朋友の二三名と、更に八百屋の姉さんと魚屋の叔父さんとに過ぎぬ、然しこれ等の人々と雖とも、銘々精細に寫生することは到底出來ぬ、まして況んや此の先き段々知己になる人間を、どれもこれも寫生するに於てをやだ、如何に我輩物好きでも、そうは根氣がつゞかない、八百屋の姉さんは可い娘だが口が輕く、魚屋の叔父さんは元氣だがお世辭がない位で、斯う云ふ連中は御免を被りたい、但し或必要な幕へ出た場合には、どんな端役でも更に寫生を試むるかも知れぬ、自分の氣の向いた時に氣の向いたやうな寫生をするのだから、其日〱の出來心でどんな事を書くかは、到底豫言は致しかねる、元來動物の精神思想と云ふやつは、教育、年齡、健康狀態、位置、境遇等に依つて、常に變化すべき筈のものである、從つて其主義主張も亦日々變化すべきが當然である、今日是と思つた事も明日非と認める事もあらう、子供の時兵隊さんになりたいと思つたからとて、奈何しても兵隊にならなけりやならんと云ふ理屈もあるまい、昨夕大福餅が甘かつたとて、今晩酒が欲しくならぬとも限らぬ、飲みたい酒を我慢して大福を喰つて、無理に主義を立てたがつた處で愚の至りだ、貧乏時代に夕飯は乾魚と極めたからと云つて、今日富貴の身となつて宴會の席上で、乾魚を嚙るにも當るまい、若し主義を眞に立てる人があらば、それは進歩することの無い人物か、或は負け惜しみ痩我慢に過ぎぬと思ふ、然る

に人間社會には、やゝともすれば、これは我輩の主義だなどゝ十年一日愚昧な法則を頑守して居るものが少くない、仲には先祖からの主義だと云ふ奴がある、我輩の眼から見ると滑稽でたまらぬ、然し本人は決して滑稽でやつて居るのではない、現に主人の處へくる人にも斯う云ふ先生がある、まア安坐(あぐら)をかき玉へと云ふと、はい、私は安坐をかゝんと云ふのが先祖からの主義で御座いますからと、洋服を着ながら社祚時代の法則を守つて眞面目である、だからこの先生の事は陰では「先祖の主義」と尊稱し奉つてゐる、主人もまた面白半分で來る度びに吃度安坐をすゝめる、先生は何邊となく先祖の主義をくり返へす、先祖の主義は安坐より結構なものと見える、然し主義と云ふ奴も時には都合のよい事があるかも知れぬ、主人も都合のよい主義を振り廻はす人である、此の間も親友の春日紅鹿氏が來て、しるこでも一杯食はうと云つたら、我輩は自分の錢では食はん主義だと云つた、すると紅鹿氏は迷亭君の亞流である、そんな開けない主義は止めろと忠告した、そして、奈何(どう)せ主義を立てるならお客にはしるこ位は出すと云ふ主義の方が可いぜと、熱心にすゝめたので、主人も笑ひ乍ら、餘り寒いから今日丈けその主義にならうかと、とう／＼迷亭の紅鹿君にしてやられた

我輩に若し主義を定めよと云はゞ、思想の變化するを以て主義とする、進歩するのを以て主義とする、即ち一定の主義を定めぬのが我輩の主義である、故に今日つまらぬと罵倒したものも、明日は結構と賞讃するかも知れぬ、今日功妙とほめたものも、明日拙劣と罵るかも知れぬ、苟くも我輩の智識が進歩發達する以上は、斯う云ふ事は到底免かれざる出來事で止むを得ない、早い話が、先頃ごまめを喰つて甘いと思つてゐた、然るに此の頃さんまの御馳走になつてからは、どう思つてもごまめではめしが喰へぬ、即ち昨はごまめを賞讃したが今は之れを罵らねばならぬに至つた、

扨てこれから人間の寫生をやらかさうか、然し何から書いてよいやら鳥渡切り出しが難(むつ)かしい、

主人は前にも云ふ通り醫者ではあるが、開業醫ではない、年は二十八、朝から或病院へテク〳〵出掛て、夕方ノツ〳〵歸つてくる、歸つてくるといきなり火鉢の前へ陣取る、陣取つては愉快に話す、書齋は二階だが二階には居る事がない、二階が嫌ひなのか書齋が嫌ひなのかそれは知らぬ、けれども一週に一度位は一晩中引込んで居る事がある、多分難かしい病氣に出くわしたので、調べてゞも居るのだらう、それとも苦沙彌君のやうに涎を流して居眠りをして居るのかも知れぬ、一寸行つて見たいと思ふが、子供の我輩にはまだ梯子段が上れない、

或夜の事である、例の通り主人が陣取つた火鉢の向ふに、妻君も坐つてる、其傍に舍弟君も居た、我輩は火鉢の猫臺でコーバコを作つて居た、すると主人はチヨイ〳〵と我輩の髯を引張つて「白髮だな〳〵」と云つて居る、「苦沙彌君の鼻毛より長さうだ」と舍弟君が云ふ、妻君は笑ひ乍ら「長いかえお前」と我輩の頭を撫てくれた、話が惡く混線して居るから我輩は默つて居た、すると妻君は思ひ出したやうに、

「貴郞、この猫には何と云ふ名をつけましよう」

「名なんかまだ付けちや早い」

と主人は平氣て居る、

「早く付けませんと、呼びごとを聞かなくなりますよ」

「迷亭としたら可いでしよう」

と舍弟君が發議する

「醉つぱらひのやうだわ」

と妻君が洒落を用ひて却下する

「それなら苦沙彌はどうです」

「ちんなら苦沙彌が可いが猫にやまづい」

と主人も勝手な事を云ふ、

「鼻子としましようか」

と今度は妻君がひどい事を云ひだした、鼻子には我輩が第一不服だ

「名なんかまだ早いさ」

と主人は又元の說になる

「それでも呼びごとを聞かなくなると困りますわ」

と妻君も又元の挨拶をする

「何アに苦沙彌君の猫は二年越にもなるが未だ名がありやしない」

と苦沙彌君が名を付けん内は、付ける必要がないと思つて居るらしい

問はず語り

行々子

▲氣の毒なは舊派和歌である、僕は舊派和歌に眞實同情に堪えぬ、第一舊派の稱呼からが既に千萬無量の悲哀を語つて居るではないか、彼れても冷泉一派を尻目に掛けて、時には「けるかなといはれけるかなけるかなに當らぬけるも言はれけるかな」などけなされたが、兎に角舊窩に落ちぬ桂園の新緑、風雅の眞趣は此一派に在りと叫んだものだ。それが又案外にも世間から耄碌呼はり、氣の毒なとは此點である、

▲彼等も耄碌したいとは思はぬ、随分新年の御題に「ほるもきの」などゝ遣つて除けた人もある、其裏情を察すれば暗涙禁ずる能はずとでもいふ所だが、如何せん左ばかりの猿似を以て新興の和歌と轡を並ぶる譯には行かぬ、乾葡萄の眼、朽梨子の肌て、精神の甚しく飢えて居るには仕様がない、

▲が、面白くもない殺様な文字を、[illegible]排ぶる氣になれたものだと頭ごなしにして掛るのは甚だ酷だ、斯くも文字には一種の魔力あることを忘れたもの丶言だ、「妹が顔見ん隙け此山」と様な露骨な言ひ表しかたても格にきちりとはまつた處に一種不可思議の興味があるではないか、まー替へて見様なら玉ころがし見た様なものさ、玉が轉々(ころ／＼)と思つた孔に轉がり込めば其處が面白い、地口でも駄洒落でもまんまと三十一文字の形式に嵌り込めばよー／＼と囃したくなるのである、

▲お正月或る片田舎に若者が集つて人眞似な和歌の會などゝ氣張つて見た、土臭い田吾作ども何の餘韻の興趣のといふ事があろー、題は初雪とやつた、随分とへー面倒なこつたと、榾さーくべて頭の浮垢(ふけ)をかきの本の宗匠が多かつたが、中には我こそはと思ひ傲(あが)りの山部の赤人爾が斯うやつた、「初雪や小川々々がふせくわつて蛙や土筆等が苦しかるらん」、やんやの喝采暫しは自在(じざい)鍵の煤を振り落すばかりであつたが、何處にも牛可通はあるものと見える、惜いことには語が短いと呼いた、すると山部の赤人先生大狼狽、そうだんべかつてな調子て、「山櫻かな」と足した、如何にも宗匠の御手際すごい／＼で、酴醾(どぶろく)酒の杯が八方から雨霰とばかり降つたといふ事だ、此處等が言葉(ことのは)の幸(さち)てはないか、永い々々春の一日が此んなことても暮される

▲欠(あくび)ても咳嚏みても三十字あまり一文字によめば床しかりける」、之は我舊派和歌に極めて同情あるもの丶眞實の聲である、後日增大八洲歌集の中へでも入れて貰ひたい野心もある、

▲此頃森鷗外博士が大口鯛二、小出粲等諸氏と一つになつて和歌の吟咏をやつて居らるゝそーな、腰辨當の名で明星などへ書いて居らるゝ博士にしてちと妙なと思ふ人もあるだろー、が之は又別樣の見地からである、詩の稽古といふよりは寧ろ修辭の稽古である、方三尺の一小箱中三尺の長劍の居合拔、苦しい處に手練(てなみ)は有る、修辭には舊派和歌が宜しいと思つたからといふだけだそうな、今では互選といふことを遣つて居るが、僕のは佐々木(信綱)君が一番能く選んでくれる、何、選に洩れた句はつて、それは又取つて置いて世に發表することもあろーさ、と、以て其眞意の所在(ありか)が知れるではないか

▲鷗外博士は今畏きあたりの仰せを蒙つて北白河宮殿下の御傳記編纂に忙殺せられて居らるゝ、材料も大分集つて來たから遠からず脫稿するだらうと言つて居られた、博士は今迄重に飜譯物にばかり筆を着けて來たが、之から少しは自分の頭から創作といふものを遣つて見たいと話して居られた、露伴、逍遙皆沈默の姿なる今日、博士あたりから一奮發、適れ文壇の宿將たる腕を見せて貰ひたいものだ。

▲とはいへ、逍遙、露伴の二文豪亦決して今から老い込む人ではない、逍遙博士の如き、往々人に向つて、何時迄も老物を擔ぐべきでない、元老長く局に當つて若手の俊才の進路を塞ぐのは、政界、文壇の差別はない、等しく戒むべきだといつては居らるゝが、之れは唯雜誌や新聞などで、漫に大家名家の繪看板を揭げて賣らんことを勉むる極、動ともすれば新進作家を疎外せんとする傾を痛まれたので、其處には又後進を激勵する自らなる慈愛の語も籠つて居るのだ、何も博士が是で眠らうといふ考では元よりない、それと此とは全然別個の問題である、唯博士は今では樂劇に熱中して居らるゝ、將來は此方面で一大貢献をせらるゝ事であろー、だが博士は一面又非常に教育に心を勞して居らるゝ、中學倫理教科書の著述は最早や出來上つて、更に小學讀本の編纂に是から掛らるゝそーだ、それに博士近來健康稍々勝れない樣子だ、それや此れやで文學上の著述に十分精力を集中せらるゝ事の出來ぬ事實のあるのは、甚だ慨かはしいことである、が博士の眉標詩勢は自らなる精鋭の氣を物語つて相も變らぬ邁往の勇が現れて居るから大丈夫、何ものか丁未文壇を飾るべきものが現はれるだろー。

▲露伴氏は「心の跡」、「空うつ浪」の外大したものは書かずに荏苒一年餘の歲月を過ごされた、聞けば文藝界には半年前からの確約をそのまゝ、遂この新年號にも執筆されなかつたと云ふ事だ、之は如何いふのであるーか、氏は故紅葉氏の隻字隻句に肉を殺ぎ髓を削るの苦辛とは違ひ、天來の想一たび熟するや、宛がら玉瓶一傾仙漿滾々として下るの槪あり、忽ちにして名篇成る、唯その想を構ふる頗る慘憺の工夫があるといふ事だ、想ふに「空うつ浪」もまだ團圓どころではない、それを纒める爲に、一切他の作を示されぬのだとも聞いて居るが、孰れにせよ一年餘の歲月は無駄に費されては居まい、そー思へば丁未文壇も仲々腦留すべしてある。

▲今度國木田獨步氏の「小說九品」と言ふ例の短篇集が出來た、僕はまだ

讀んで見ぬから評する事は出來ぬが、早く國民之友に見えた「死」それから「鎌倉夫人」など以下凡て「運命」及び「獨歩集」に洩れた今迄の作九品を集めたものだ、氏の作は當代に一種、類を異にしたものだ、所有る皮肉を剝落して直に人生の眞髓を見するといふのが氏の小説に一貫した精神だ、吾人は全二著の上に此新著を得たのを喜ぶ

▲小川未明氏も亦氏の從來の作物を一括して小冊子となし、世に改めて評價を求めるそーだ、氏は頗るイマジナチーブの人、想の豐贍にして筆の清婉なる、僅かに望ある未來を有する人である、丁未文壇に於ける一年に幾千の進歩を見するであろーか、氏の奮勵を希望する、小杉未醒氏の富士紀行、十家詩傳、霞浦紀行の三篇も、亦美粧して「繪と人」なる書名の下に現るゝそーだ。

▲夏目漱石氏の作物が多くの讀者を心醉せしめた話の中に、一つ面白いことを聞いた、現在帝大の文科生で鈴木某といふがある、その某は神經衰弱で郷里に歸養して居たのだが、「我輩は猫である」に心底惚れ込んで、早速一書を在京の友人に寄せた、それは夏目氏の風采やら何やらを氏の作物と面白く對照して、一是一非の妙文を作り上げたのだそーな、其中に最も可笑しい一節は、ざつと先づ斯うなのだ、「我輩甚だ金ちやんを愛する、が特別に金ちやんを知つて居るでも何でもない、教場の中で會ふことは會ふ、僕からは知つて居る、が金ちやんは知る筈がない、けれど金ちやんの知らないのは僕の名だけで、僕の顔は知つて居るだろー、否知つて居るに相違ない、相違ない譯があるのだ、艶陽三月僕佳人を伴ひて山王臺邊花下を迷つた事がある、其處へ向ふから見えたは僅に金ちやんだ、行き遊び樣、チラリ一瞥を僕等の上に見舞つた時、それには言ひ知らぬ鍼親の情が、紛れもなう見取られた、金ちやんそれを忘れる筈はない、然らば金ちやん即ち我を知ると謂つべしだ」つてなことを書いたのだそーな、其友人は漱石氏を知つて居たので早速之を氏に見せた、すると先生哄笑一番痛く其文の奇を愛し、金ちやんの名で一書を鈴木某に與へたといふことだ、「君の文を見れば、決して神經衰弱の人とは見えぬ、金ちやんが保證するから早くお出で」つてな文句があつたそーた、但し斷つて置くが、之は又聞きであるから眞贋は保證せぬ。

▲新を迎へる時には常に舊を顧る傾があるものだ、それで舊い話もして見るんだが、僕には實に故根本博士が目に付いてならぬのだ、淡い白髮をきつく丁字髷に結び上げて儼然たる羽織袴の打扮、眉吊り眼圓らに長き八字の髭を口腔の兩側に刻んで脣を固く閉ぢた樣は、如何にも強項生、五尺怪しき矮軀都て是れ膽といつた風である、おまけに右手は常に袖突つぱり、其袖の中には紫袱紗に算木が包まれて居り、左手は笏若くば鐵扇、若くば細身の短刀を握つてなる、宛然たる古武士の典型、迂濶とは觸れない、觸つたら此大道で、武士に簡當て觀念さつせーとでも來そーであるからだ、が可笑しい事には是ばかりは僅に歐米崇拜で何雅な用ひて居られた、是は取る年が博士を餘儀なくしたのであろー

▲此處に一つ面白い話がある、何時でや帝國大學文科生の宴會があつたそーな、それには日頃擔任教授も出席したので、博士も無論其座に人

つたのだ、酒巡ること幾行、學生の餘興もあり、興趣愈よ酣なる時博士は突如として起つて「我は歸る」と云ひ出した、醉ひ狂へる學生等は笑ひながら一擧に根木博士萬歳とやつた、博士も枯柴の手を擧げて萬歳と熱叫した、するとやんや言つて寄つて集つた學生等は忽ち博士を胴揚した、之を見たる教職員は驚き慌てゝ老體をと氣遣つて漸く止さした、多勢の手から床に下された博士は如何思つたか山字爲す双肩に唯ならぬ氣勢を込めて暫くは沈默の睨視を一同に酬えた、正に是れ猛虎嘲を負ふの體、續いて百獸心肝碎くる底の一聲の霹靂が飛んだ、「無禮もの、何をするかッ」

▲翌日醉が醒めてからの事である、學生等は心配で此儘にはして置かれぬ、早速總代二名が辨明謝罪の責任を負ふて博士の宅へ伺候した、博士甚だ不興である、「汝等は無禮なことをするッ」、總代二名が色々長々しく胴揚の由來性質を語り、之は決して先生を侮るにあらず、先生が老軀能く教務に鞅掌し後進を提撕せらるゝの勞苦を恩として、其愈壽長く體健かならん事を祈つた至誠の溢れであると樣に、快辯甚だ勉めたので、始めて博士の諒とするところとなつた、「そーか、そーか、それでは汝等私を祝つてくれたのか、」と喜色面に溢れたそーな

▲博士の講議振りにも隨分面白い節があつた、音吐朗々發調極めて明晰、其情熱し意軒るや、舌端忽ち風霜の氣を帶ぶる有樣は、定めて青年時代には一種精悍の論客であつたろーと忍ばれた、唯聽きにくい秋田の土音が遂に取れなくつて、絕えずすーくわ(水火)の氣だとか、ごく〳〵(極、究竟の意)の處だとか言つて居られた、今更言はでもの事であるが、易は博士のお手のもの、平素の話に、朱註を讀むこと三年、易理遂に知るべからず、我れ周易に於て別に得るところありと謂つて居られた如く、頗る獨得の玄義が有つたのだ、其講義の時であつた、『陽中に陰あり、陰中に陽あり、陰と陽とは元二にして二にあらず、一にしてまた一にあらず、陽とは火なり陰とは水なり、例を擧げて之を說かんに、先づ鐵瓶に水を溢れて暫く之を放置せよ、清輕なるものは上りて天となり、重濁なるものは下りて地となる、前者は陽なり、火なり、後者は陰なり、水なり、されば元來水は上るを得ず火は下るを得ず、然るに彼の鐵瓶の蓋を取つて之を檢せよ、其處に無數の水滴粟點するを見ん、水中火氣あるに非ずして何ぞ「と大凡そ此類であつた、

冷語熱語

孤劍生

何時も聞く聲ながらさて初烏床しきは元朝の眺めなるかな極目萬里物其容を改めず而かも情は全く新なり

海飜すべく山撼ぐべし春風脈々我心動く男兒曠世の偉業は此一氣の孕む處起たん哉一年の計は元旦に在り

阿片貿易禁止は人道上當然也人に鴆毒を侑めて其死

に何の弔詞ぞ吾人は僞善より醒めし英人の襟度を愛す
米大 統領の教書は明に個人道德國際道德の不二を説く
外交政略即武器と見るが多き今日頗る吾人の耳に快也
桑港 の排日本學童諸報の竊す理由一致せず即ち彼等
に公言すべき口實なきを證すル氏の治下に此頑民あり
全米 國民排日事件を以て隣交上焦心の問題となすに
桑港新聞揃ひも揃うて知らぬ顏の半兵衛さんは面憎し
唯一 クロニクル其奴(そやつ)も日本政府と米大統領畢竟何す
るものぞと言つた風な口振傲岸不屈度し難き代物よな
平和 は列強人道の自覺に進んだ上の沙汰何の會議ぞ
主張者が戰機を挑發する樣にては海牙の發音畢竟ペケ
御互 に相手の拳骨を氣遣ひて此方の拳骨も弛まされ
ぬが人情なり軍備は拳骨に外ならず其縮少は當分は夢
英米 共に積年の情實を一掃して頻に諸宗教派の合同
を圖る茶碗と同樣割れゝば又くつ附けて見たしと見ゆ
平民 新聞復活す富豪の貧弱を虐ぐるは眼前の事實之
を救はんは宜し突飛な議論て國家を棒に振るべからず
日本 新聞頓死す雪嶺博士の慨謗の論又聞くべきなし

誠に痛むべきかな何有りとや精神已に去るそは形骸耳
欽亮 氏の爲に謀れば何が故に初に舊社員を一掃せざ
りしぞ今に至つて無節操主義を披露せらるとは愚の極
文藝 界改名して家庭文藝となる同時に誌面を刷新し
て專ら俗惡なる文藝を家庭より斥けんとすと健在なれ
文藝 俱樂部の本町誌凝つた名前かは知らねど大倉の
おち三と言ひたそうな男振なり思案の上止(よ)しては如何
之は 失敬予は心掛善くして惡名を買へる先生に同情
す眞劍では五百圓欲しくも取れぬ連中の吠ゆるより優(まし)
吾人 は毫も憎むべきを見ず麵包に尾を掉る狗は寧ろ
愛らしからずやォヤ又失敬先生と言つたて堪忍めされ

新刊批評

▲俳句講話　沼波瓊音著　東亞堂發行

初學者の手引草にと一わたり俳句の作法を解き、古今人の四季の名句を評釋し、終りに參考とすべき俳句集に俳論書を擧げ其梗概をも示したるもの目的已に目的なれば何も立ち入りたる切字や哉の詮議あるにあらず、之に依つて俳道の蘊奥を極めんには未たしけれど、而かも説明の體、

頃閑宜きを得、能く初心者をして俳の精神を默了せしめ得るものなり（定價金四十錢）

▲探偵小說 短刀英雄　米光關月著　成功雜誌社發行

見たる一快刀勇威を蠻人に示して、今はとある一孤島の酋長の女婿なる瀨戸太郎、其昔は長門の長府に産聲を擧げたる一健兒なりき、醫學修業を厭ひて飄然故國を辭したるより以來、今日に至るまでの幾波瀾、幾丘壑、快麗なる著者の筆によつて時には肌に粟を感じ、時には腸に毛を生せしむ、好箇青年の讀物（定價金參拾五錢）

▲最近西洋哲學史　岡島誘著　博文館藏版

故蟹江博士西洋哲學史を著して筆をヘーゲルに絕つ、著者之を憾みとなし、更に其後を承けて最近現代に至る迄の獨逸、英吉利斯、並に佛蘭西における哲學思想を概說したるもの、今日現存する哲學諸體系が、如何にカントの脈を引き如何にヘーゲルの流を汲めるか、此書によつて其間の消息を知るを得べし、唯それ行文の稍々暢達ならざるを憾む（定價金四十錢）

▲基督教の靈的活動　セ、ギー、デビス著　警醒社書店發行

基督教の靈的活動とは如何なるものぞ、先づ其根本思想たる三位一體說より徐々に說き起して、如上の問題を說明し終り、更に其性質、其略史、英米國の靈的活動、ウエールスのリバイバル、リバイバルの特質と教訓とを略敍したるものなり（定價金十五錢）

▲文士寶典　伊藤天籟著　日高有倫堂發行

著者は伊藤銀月氏の弟也、此篇著者の趣味に適したる章句を集めたるものなり。一種の美文資料といふべし。文章の妙味は主として前後の關係によつて出て來るもの多ければ、如何なる好文句もかく切れ／＼にしては何となく感じを薄くする心地す。されどよく讀み碎かば或は少年子弟文を學ぶ人の參考にはならんか。たゞ篇中の大部分は銀月氏の著作中より拔萃したるもの多きが如く見ゆるは、兄弟の趣味期せずして相一致したるによるか。（定價五十錢）

▲性格と哲學　文學博士桑木嚴翼著　日高有倫堂發行

博士の前著「時代と哲學」以後の論文講演等を蒐集したるものなり。「性格と哲學」「超世脫俗」「プラグマティズムに就て」「近世戲曲と人生」「孤獨生活」等約三十篇を收む。眞摯なる學者の眞摯なる意見、一讀の價値あり。（定價一圓二十錢）

▲東京大阪朝日新聞論說集　有樂社發行

東京大阪兩朝日新聞十月分の論說を集めたるものなり。「朝日」の論說は本書編輯者と仝じく吾黨の最も愛讀する處にして、平常竊かに以て、新聞論說の白眉となす。江湖文章を愛するの日、日夕反覆して習文の模範とすべし（定價二十五錢）

▲吾輩は猫である（中編）夏目漱石著　大倉服部兩書店發行

本篇は迷亭君の帽子の藝當に初まり苦沙彌先生の氣狂に關する冥想に終て居る。今更ら仰々して評するのも野暮の至りと存じ、たゞ中編が出來たでといふこと丈けを御吹聽しておく。（定價九十錢）

▲草露集　藤代素人著　大倉書店發行

獨逸文學に精通し、兼て文才饒かなる藤代禎輔氏の文集である。卷頭の「レッシングを論ず」は堂々七十四頁の大論文、此一代の文豪を批評紹介して遺憾ない。其他、フワイターク。ワグネル。シルレル。ノヷリス等を或は論評し、或は紹介したるもの何れも氏ならではと思はるゝ。嘗て本誌に出た「消夏の一策」などは極めて趣味多き文字である。吾人は氏の益々我文壇に知られ、此書の讀書界に歡迎せられんことを望むものである。（定價七十錢）

▲破邪顯正開運秘鑑　武桃庵居士著　達磨堂發行

本書一名運命哲學といふ。文章は煮え切らず思想も幼稚なる如く思はる（定價三十錢）

▲英和實用警察會話　パーマー著　綠書院發行

警視廳英語教師パーマー氏の著也。警察に關係ある人には必讀のもの也。（定價三十三錢）

▲樂天文學太郎冠者　磯洋水著　左久良書房發行

多く文藝倶樂部に出てたるを集めしものにして「人形芝居」「父日記」「下婢列傳」外十五篇の喜劇物を載す。理想的の滑稽文學とは固よりいふを得ざるも、お正月の屠蘇機嫌アハゝと笑ふには至極適當なるべし（定價五十五錢）

▲惠馬遜傑作集　大谷繞石譯　大日本圖書株式會社發行

コンコードの哲人エマーソンの傑作「自然論」「學者論」「自恃論」「報償論」の四篇を最も正直に譯したるもの也。餘り原文に忠實なる餘り、日本文としては如何はしき處なきにあらねど、原文と對照し讀むには此上の便利なかるべしエマーソンの文章は各章句の意斷絶して一篇の脈絡頗る明瞭ならざるが如き憾あれども、各句悉く皆奇警にして味ふれば不盡の含蓄あるを覺ふ、卷初に小傳を附し讀者の爲めに計ること懇切也。光明にして崇高なる思想に接せんと欲する人は一讀せよ。（定價五十錢）

▲詩集桂の卷　河井醉茗選著　左久良書店發行

「電報新聞」に選載せられたる靑年の新體詩を收め、附するに醉茗氏の作の二三を以てせり（定價三十二錢）

▲宗教詩集頌榮　一色醒川著　金尾文淵堂發行

「わが神」以下五十餘篇の新體詩を集む。何れも皆宗教的情操の淸きを見るに足る。中には不成功のものなきにあらねど概して穩和なる趣あるは可也（定價四十五錢）

▲南米渡航案內　水野龍著　金尾文淵堂發行

著者が二百四十餘日間南米を漫遊したる雜感を錄し、南米渡航者のために、懇切なる敎を記したるもの也（定價三十錢）

▲夢見草　小山內薰著　本郷書院發行

著者の美文集也。才氣の處々に閃發したるも見ゆれど未だ稚氣あるを免れず。又餘りに西洋臭きも嫌な心地す。作者の奮勵を望む（定價二十錢）

▲小說世界的大競爭　石川半山著　金尾文淵堂發行

「國民をして世界の形勢に注意せしめ、世界が如何に日本人を待遇せる乎、現に海外に出でたる日本人が如何なる行動をなせる乎、今後の日本人は如何なる意氣を要し、如何なる生活をなすを要し、特に今後海外に出づる日本人は如何なる覺悟を要する乎」等を説明せんがために、著者が洋行中の感懐を小説的に書いたものである。嘗て「毎日」に連載せられて一部の人に歡迎せられたものを一冊に纒めたものである。(定價六十錢)

▲亂雲集　島村抱月著　彩雲閣發行

著者の短篇小説十二篇を收む。吾人は正直にいへば今日抱月の書きつつある美文的論文よりも此種の作物を愛讀するもの也。文章に苦心の痕あり〳〵と見えて全體の姿よく整へり。「紅涙賦」など最もよし。表裝の美麗いふばかりなし。(定價八十五錢)

▲繪解キリスト物語　金尾文淵堂發行

松井氏の繪畫に、中村春雨氏のキリスト小傳を附せり。クリスマスの爲めに發行せるものにして小兒にキリストの一生を知らしめんとするもの也。たゞ繪畫の拙劣なるは慊らぬ心地す(定價十二錢)

▲少女の煩悶　齋藤吊花著　隆文館發行

蒲畑富士子といふ可憐の一佳人相手が唯己れの健康と美貌とに戀したりとは知らず、憐れ青春の花を輕薄なる一貴公子間宮子爵の手にムザと散らされて其儘離緣となり愛女を枕頭に殘して薄命の最後を遂ぐ、其際平日深くも胸に刻まれたる、女子は一生嫁すべからずとの信念と、汝も教育事業に獨身を委ね生涯を送るべきぞとの教訓を秘めし一個の手函を後に殘したる、之れぞ其少女、即ち一篇の主人公たる蒲畑三枝子が煩悶の枝子とはなりしにて、彼女も年齒長じては母に似たる容姿端麗の一佳人、遺命とはいへ此天質を抱いて獨旅の契を餘所目に過さんことはと、彼女の上に立ち教鞭を執れる孤兒院長須崎綾子の、時折の情の諫にも從はず、唯何時までも此くてぞとおもりし間は未だしもなりき、或る時篤き師の心遣に、敎え子夏子に伴はれて病を伊東の溫泉に養ひし時、何となく我世の寂寞を感じ、淺猿しき夏子の身上話を果敢なき切めてもの慰藉と賴める、其夏子さへ喘嗟の出來事にて彼女を獨り殘せし後は、淋れたる世のいや淋れ行く思ひ耐え難き、彼女は知られ、是ぞ青春の人懐しの心の初頭なりき、其處に同宿の青年に小原となん呼ぶ心優しき大學生あり、既に音波を顫はすヴァイオリンが、徒然の男女を結ぶ緣となり、交はす語の繁きに連れて兩情纒綿、男は遂に熱烈の戀を訴ふるに至り彼女も流水の情に誘はれんと迄危き處を、待て暫し刹那に響くは亡き母の戒めなりき、斯くて熱頭を冷却して暫く右人の語を學ぶに、男も忠實なる友藤森といふに看破られ說き破られ、暫く其間を割かんものとの配慮より、心ならずも函根の山中に誘はれ行く、彼女も此間を利用して戀の惱みを忘れんものと、隣室に見ゆる無心の少女露子を友に果敢なき想を紛す中、遂に露子の母なる病夫人と知り、何處も同じ此世は愛の容器(いれもの)なる感を新なる人の身の上に覺えて、戀なるものに身を顫はせしが、折しもあれ忘られ難き思を語る男の文、そは函根よりなりき、紅情故知らず狹々(いら〳〵)と起りて憐れ又もや惡龍の舌に捲かれんかの刹那、突如絕叫の聲繳いて起る喧囂に誘はれ行けば近頃親める病夫人は淡つけき良人の情を恨みて入水の慘を自ら遂め、亡骸には今ぞ孤獨の露子の直泣(ひた)に泣縋るなりき、之を見たる三枝子の胸に離有きは亡き母の切なる遺戒、決然行李を收めて恩師の許に歸り、情ある人々の催しの病氣全快の感謝會に於て神に誓し默禱を捧ぐるにて終る、俗惡なる家庭の樣、熱烈なる青春の情、之を

如何にして我身を處すべき、現時の世態を材としてか弱き少女の煩悶を寫す、小説としては實に好個の材料なるべし、さはれ著者の筆、文致としては頗る愛すべきものありとはいへ描寫は餘りに委曲に過ぎ板面に失し現る丶處の人物に盡く巨細の描寫を盡さずば已まずとの趣あり、却て讀者をして倦厭の情を起さしむるを憾とす、全篇三百三十頁を超ゆる其半は、一富士子の描寫に費されたるが如き、此等は少しく苦心せば此最後の一章にて十分に冗餘の消息を語り得べしと信ず、彼の間宮の後夫人津奈子の如きは左まで用もなき人物、書くべくは數行にして足れり、左れど斯かる批評は著者の眞意に對しては寧ろ酷ならんか、何となれば著者は自序に於て、「小説としては多くの非難あらん、予は・の一篇に於て家庭問題婦人問題の一資料に供せんとしたり云々」とあり、此見地よりすれば冗贅も亦著者に於て忌まれざるべきか、對話に對する地の文の調和、著者の用意の跡は見ゆれど今少し消化れて欲し、（定價金六十錢）

▲無政府主義　久津見蕨村著　平民書房發行

余が知れる範圍に於て最も早く無政府主義に關する著書を出せるは煙山專太郎氏なりしと記臆す、其の後社會主義一派に無政府主義を言ふ者ありと雖も未だ纏つたものを見ざりしに、革命の妖雲露國の天地に漲れる今日、我國には革命評論出で次いで爰に無政府主義の書出でたり。久津見蕨村氏の「無政府主義」是なり。氏は萬朝在社當時より勞働團體聯合本部の出來せる頃迄は勞働問題には資本と勞働の調和を主唱せる人にして即ち非社會主義者なりしと記臆す。今や一飛して個人的無政府主義の純理を說くの人と爲れり。加之、革命評論記者等と同じく、バクーニン等の運動にも同情ある者の如し。時勢の變潮を見るの一端とすべき歟。本書は一種の隨筆にして、恐らくは氏の薀蓄を披瀝せる者にあらざるべし。然かも老練なる文才と該博なる學殖とは隨所に散見す、蓋し無政府主義の一斑を知るには本書は最も要を得たるものなるべし。附言す、革命評論は宮崎滔天、清藤吞宇、茅野長知等の經營に成る者にして孰れも世と相背ける巖穴の士。蕨村氏はスチルネル等の學派を尊んで理を說くに甘んずるもの丶如し。對比し來れば若干の趣味あり。（定價金九十錢）

（夢蝶生）

▲プラトーン全集第二卷　木村鷹太郎著　眞善美協會發行

碩哲プラトーンの其著理想國は、國法篇に次ぐ大著として世に知らる丶ところ、該博なる學と、深遠なる識とを有する氏が理想の國家を、戲曲體文字の中に示したるもの、緒を正義の問題より初めて徐々に國家の建設に及ぼし、財產共有、妻子共有、男女平等を說き、文學、美術、音樂、體操、教育、政治、經濟、哲學と、諸多の問題に論及したるもの、今日力ある政治、社會、道德等の諸說にして、古くも淵源を此處に汲めるもの少からず、何人も一讀を要すべき書なり、此著は、此理想國に添ふるに更にチマイオス、クリスチアスの二篇を以てし、叮嚀なる譯述を試みたるもの、行文流暢、讀むに些の晦澁を覺えず、初に通篇の解題及び序論を付し、それに處々著者の論評を加へ、終りに註釋並に固有名詞の原字對照を添へたるなど親切を極む、吾人は斯かる大著を敢てして倦むことなく、今後尚ほ三年を期して全部の譯著を完成せんと聲言せらる著者の篤學に多大の感謝を拂ふものなり、（定價金二圓八十錢）

●今月は頁數增加のために新刊物は多く一通りの紹介に止めたり。次號よりは詳細に批評すべし。又寄贈を受けたるものにして未だ閲讀せざるものは次號に批評すべし

編輯だより

▼丁未の歳茲に明けぬ。四海波靜かにして、泰平の瑞祥六合に洽し。讀者も御健勝、記者も健在。何もかもお芽出たづくしに候。

▼本誌が月毎に改頁を加へ、進歩を圖り、以て江湖諸彥の御眷遇に酬えんとするの努力空しからず。今や一年の劈頭に立て遙かに來し方の一歳を顧みれば、發展向上の跡、明かに辿り得べくして、昨春の襁褓乳臭寧ろ笑ふべきものあるを感じ申候。何物の愉快か之に比し候ふべき。然れども只進歩をのみ顧みて得意の鼻うごめかすは老人の事のみ。吾人の志にあらず。吾人の志は將來に在り。偏へに精進し、猛進して將來の理想を實現するに在り。今後一年の計畫巳に成竹となつて吾人の胸中に宿る。希くは諸彥と共に明春の劈頭に立て今春を顧る時、亦恰かも今春の昨春を顧るが如き感あらんことを。

▼前號に豫告せるものにして頁數增加のため、本號に掲載する能はざるもの少からざりしは頗る遺憾に候。然し其洩れたるものの多くは、次號の誌上に爛たる光彩を放て諸彥を迎ふべく、そは各欄の終りにある豫告を一讀せられなば瞭然たることゝ存じ候。

▼本誌は次號より紙數約百四十頁內外といたし、定價は一部十八錢（外に郵稅一錢）と定め申候。頁數も昨年より大に增加したることに候へば各欄の材料益々豐富を加ふべきは勿論、小說は常に鏡鏘ならば必らず二篇を收錄致すべく候。又年二回位は昨年の通り、臨時號を發刊し、文壇第一流大家の雄篇を網羅して斯界に貢獻致したき希望に候。冀くは江湖全好の士益々深厚の御同情を賜はらんことを。

▼新春の祝辭を呈するに當りて、併せて吾人の抱負を陳ずること右の如し。稽首頓首して申す。（社末校正小僧）

本誌前號目次